

その縁は、遙か数千年の時を越えて——
今も時間を止めたままの少年に、約束通り
共に在ると、楽しげに空っぽな唄を歌う。

Stop & Start ♪ Freeze with terror...

時をも凍らせるほど怠惰な悪魔は。
凍った心をそのまま受け入れる事で動かす。

C r y p e r r .
C 3 —resurgence—

Stop & Start ♪ Freezing to death...

行くべき所がわからず少年は立ち止まり。
ただ膝を抱えている事をソレは知っていた。
たとえその歩みが、滅びに向かうものでも
……いつか解ける迷夢を、彼らは探し続ける。

世界のヒトは全て。

『神』の器に過ぎないと彼は言った。

「オマエの中には、オイラがいるによる——
オイラは『神』による」

「……は、い？」

一番初めに存在したのは、世界の『力』と
『原理』である『神』。

生き物でない『神』には、生も死もないが
『意味』があり。

その『意味』により使われる『力』が違い、
『意味』の変化は即ちその『神』の連続性の
途絶……傍目からは、廃滅や生誕があった。
「神は消えないによる。永遠に、何かの形で
続いていくによる」

そのため『神』は、『神』という唯一つの
事物でありながら無数の存在である矛盾を、
一見生き物のように両立させていた。

「しかしオイラは中身——『力』がないから、
不完全なんだによる」

『意味』しか持たない抜け殻であった彼は、その中身により、何者にでもなると……彼と共に在る銀色の髪の少年へと微笑む。

『力』とは世界の『神秘』の——原材料と生成場と結果で。

『力』本体を『神』、そして『力』の器となれる存在の内、神に似せて創ったものを、まとめて『ヒト』と『神』は呼んだ。

「だからオイラの中身になるなら、オマエは神になるによる」

『原理』を揺るがせる『力』など、本来は無い方が世界は平穏だが。

『神』はいくつかの世界に、あえて悪戯のように……直接その世界の軸となり、数多の『神秘』を流れさせていた。

『天界』と『魔界』。『宝界』と『地界』。

銀色の髪の少年を取り巻く者が属する、『宝界』を中心に繋がった世界。

「俺は結局……竜でも飛竜でも、精霊ですらないから」

その何処にも居場所を感じない、何者でもない少年は——

黒いバンダナの下、赤を溶かした青の目で、『神』の抜け殻だった彼を見る。

「だから神になれつて——アンタは言うのか」
ただ無機質に、何の情も無く。そんな少年を見守り続けた、緋色だった何かにその答えを問いかけた。

緋色の残滓は、ただ楽しげに、その現実を少年に伝える。

「それ以外に、オマエが今この現世で、時を往く術はないによる」
「……………」

遙か遠い世、『神暦』の頃からその存在を

繋いできた少年に。
さすがにそれは期限切れだと。

少年という存在の、終止符は近いと——
わかり切った事を口にした。

——ユーオンは……ずっと、ここに、いてね——

消えてしまった誰かの願い。
それを叶えるには、少年は——

「……………冗談、キツイな」
永遠に消えない何かにならなければいけない。
その身を悩ます痛みも吐き気も……全てを
永く刻まれたままで。

激しい吐き気で、目が覚めた。

「つて……」

すっかり慣れ切った、胸苦しい目覚めは、しかし今朝は新たな……よく思い出せないが、これまでにない不快感を伴っており。

「ゆ、め……?」

初めての土地の慣れない寝床で、見知らぬ天井を前にしている、金色の短い髪で尖った耳の紫の目の少年は。

一瞬、己の目が金色にきらりと光った事に気付くわけもなく。片耳に言語翻訳機である装身具を揺らし、袖が無く縦襟の、上下共にシンプルな黒衣の軀をゆつくりと起こす。

「目が覚めた? ユーオン——いや、紫雨君」
閑静で小さな城の一室、その主である貴賓……肩掛けを羽織り、くすんだ赤色で簡素な礼装の、長くまつすぐな茶色の髪の女性が、落ち着いた声を少年にかけてきた。

「気分はどうかしら。バカ息子の丸秘部屋を貸してあげたとはいえ、この世界自体、魔でない君には相性は悪いはずなんだけど」

「……マヤ?」

「やっぱり浮かない顔ね……どれ、熱はないかしら?」

少年が起き上がったベッドに腰掛けた女性は、鋭く端正な顔立ちながら、年の功とも言える穏やかさと平和さで少年に微笑みかけつつ、少年の額に手を当てる。

「と言っても、熱の元になるエネルギー自体、君には全く足りてなかったわね」

「……」

「精霊の助けになる自然の気は、魔界には、本当に乏しいの。せめて食事で補給しないと、せっかくこんな所まで来たのに、君はずっと寝たきりで過ごす事になるわよ?」

わかっている……と、難しい顔で俯く少年は、少し前から全く食事が摂れない状態であると、女性も当初から耳にしていた。

あくまで穏やかに、しかしいたずらっぽく微笑む女性は、

「と言っても、エネルギー源は食べ物だけじゃないわよね」

「……」

「今日はヒヤクネンのコドクを出してみたわ。ストレートにする、ロックにする?」

心から嬉しげに、きらりと光るガラスの杯を手をしている女性に、たははと思わず少年も平和に苦笑うしかなく。

「マヤはいつも、朝からお酒を呑むのか?」

「嫌ね。久しぶりに相手が出来た時くらい、好きに呑ませてちょうだいな」

この城で女性と対等に話をして良い者は、客人たる少年とその養父、そしてたまに城に通い来る、女性の伴侶だけという事であり。

女性の一人息子に姿形が似るらしい少年が、唯一摂れるエネルギーを躊躇いなく勧める、文字通りの悪魔の酒豪女性だった。

十五年前まで、陽の光も差す事がなかったというその世界は『魔界』と呼ばれており、『悪魔』という奪い合いが性である生き物の巣窟であるらしく。

一見は女性のように、姿形が人間と大きく変わらない者もいれば、あからさまに怪物のような姿の者もいて、少年が元々住んでいた『宝界』に比べると、とても無秩序な世界に少年からは思えたのだが。

—そりや違うっす、師匠！ 悪魔こそ、神や天使に続く制限だらけの存在なんスよ！—
「……レンは、ここに来てから元氣だな」
—と言うか、何で師匠……？ と、滞在先の城の中庭を身一つで歩き回っている少年は、傍目には独り言で何かを話し続けていた。
—今の自分はまさに招魂、魔界の魔の気で、下手したら使い魔になりつつあるっす！—

「いや……普通に妖精に戻らないのか？」

手首に巻いた紐付きの鍵状の物に付属した、蝶の羽型の飾りを腕時計のように眺めつつ、無機質な顔で尋ねる少年に、

—自分はそのまま、剣の一部がいいっすよ！
師匠は剣になれたなんて幸運過ぎっす！—

「……それで師匠なのか、レンにしたら」
—どうやら羽飾りから響いているらしい、軽い口調の少年っぽい声は心底羨ましげに、己が嗜好を本来の口調で語り始めた。

—ばねーっすよ師匠、剣として生きる生活！
オレをここに置いてくれればこの剣は最強の切れ味を保障するぜ！—

元は『刃の妖精』という、物を何でも鋭くする力の持ち主だった妖精が、金色の髪で尖った耳、紫の目の——容姿は典型的妖精の少年の躰の、本来の持ち主だったのだが、
—森の谷間生活も超快適だったけど、もう剣まじやべー。オレ本当、生きてて良かった、まじサンクス師匠！—

「いや……リンに殺されてそうだったんだろ、レンは……」

今や蝶型のペンダントトップのようなものに自我を宿す小さな元妖精は、浮気な性格から恋人に殺され、妖精たる自我の抛り所の羽を切り落とされた後からそうなっており。

羽を失い抜殻となった妖精の躰を使うのが、宝剣収集家であった妖精が最後に買った剣に宿っていた古来の魂……今も剣を本体とする、金色の髪の少年だった。

「羽さえくつつければ、まだレンはこの体、元のレンに戻せるはずなんだけど……」

—んな殺生な、オレから剣を取り上げないで師匠！ オレをここにいさせてくれっす！—
「いや……躰返さなくていいのか本当……」
妖精の躰を奪ったのは本意ではない少年は、切り落とされた羽を取戻し、妖精を元の姿に戻すつもりであったのだが。
—何事も楽しむ性の妖精という生き物は既に、現状に適応し切っていたのだった。

今でも少年は、ペンダント型となった羽が自ら望んで元の形を取り戻すなら、すぐにも軀を返す所存であるのだが、

—師匠こそ遠慮なくオレの体を使うつよよ！
劍の寿命、カツカツじゃないスカ師匠！？—
「……多分、レンの命はレンのものだから、オレのものには出来ないよ」

魂の在処は劍である少年は、劍が蓄えられる力だけが命の源であり。劍を遠くへ手放すとすぐに無力化し、意識を保つことも出来ない状態だった。

「記憶の管理も力の制御も、劍がしてるから、オレには出来ない事も沢山あるし」
劍に宿った魂は元々、今も声無き声を発する羽飾りの意識を直接感じ取っている状態で、他の者にはその声は聞こえておらず。

それはこの少年特有の、五感が及ぶ範囲の現状を汲み取れる直観という知覚で、それで少年は常に多くを感じながら動いていた。

—そつスね、キラ師匠は劍になる前の事も、ほとんど覚えてるぽいつスけど、師匠は今もその辺、曖昧なままなんすスよね——

「この軀と今の制御方法じゃ、読める記憶はこれが限界みたいだ。劍の力を多く使えば、オレもキラに戻れるけど……」

普段は金色の髪と紫の目でユーオンと名乗る少年は、時により銀色の髪と青い目でキラと名乗る人格に変貌することがあり。省エネで弱小な金色の髪の少年に比べると銀色の方はかなり強い力を使えるが、それは劍に大きな負担を強いて命を削る状態だった。

—どーせその状態なら、都合の悪い事は全部読み込めなければいっつスのにねー。最近の絶食師匠、痛々しくて見てられないスよ？—
「……………」

元々非常な小食の少年は、先日に、義理の妹と呼べる存在を失い。それから全く食事が摂れなくなっていたのは周知の事実だった。

—ラピ子ちゃんの事は忘れましょーよ、師匠！
ラピ子ちゃんもそれを願ってますって——

「オレもそう思うけど……そんなに上手く、あいつの事だけ忘れたりとか出来ないし」

無機質でも張り詰めた様子の少年に、こころもあつさり消えてしまった妹分の話を出すのは、この羽飾りくらいだった。

「あいつが苦しんでるのは知ってたのに……
オレは何もしてやれなかったし」

約一年前に羽飾りの妖精の軀を貰い受け、瀕死状態で目覚めた少年を保護した養父母が、元々連れていた人間の養女がその妹分で——
常に危うげに、明るく笑う少女だったのだが。

—まーたそんな！ 悪いのはラピ子ちゃんに巢食つてた悪魔と神様でしょー！—
絶えない微笑みの裏には、昏い呪いを抱えた妹分に、少年はその直観で気付いていながら

……最終的に妹分を追い詰めたのは、それを隠したかった妹分の闇に気が付いてしまった自分だと、少年は悟っていた。

—んな事常に考えてたら師匠、まじ死にたくなんねースカ？ オレは真似出来ねっス——

「……別に、考えたいわけじゃないんだけど」

少年の直観の基盤である五感は、自身以外の事も我が事と感ずる故障品と言え、少年にとつてそうして誰かの痛みや嘆きを映すのは、長く当たり前の生き方だった。

—師匠の直観、無いと不便だけど、あつても相当諸刃の剣っスよねー。ああでも、無いとオレとお話してもらえないっスね——

「無いのは困るよ。たまに何も観えない時もあるよ、どうしたらいいかわからなくなる」

あまりに多くを感じ過ぎて、自身と他者の境界が曖昧である少年は、未だに他の基準が持てない状態だった。

そうした様々な枷の中で、不自由な生命を、

それでも必死に少年が繋いできたのは、ある一つの願いのためであり——

「でもレンとは、エルも話は出来るだろ？」

—そつすね、エルりんマジ可愛いスよねー。

生き返らせてあげられて良かったっスよね——

少年の妹であるその少女は、遙か昔に、既に命を落とした身であったものの。

実はそれを助けられたはずの、小さな宝を持つていた少年は、妹の魂が宿る秘宝を探すために今の躰で目覚めるまで長い時を待ち。

「それもラピスのおかげだけど……ラピスがオレとエルを助けたいって思わなきゃ、今のオレ達はいなかったんだ」

昏い呪いの中で、消える事を望んだ義理の妹分の最後の願いは、少年の助けになりたい——それを感じていた少年は、実の妹が生を得る依り代に、妹分の体を使う結果となった。

—私……何処にも行く所がないよ……—

その幸薄い妹分の深い青の目に宿っていた哀しみを、こうして思い出す度……広い庭をただ歩くだけの少年を、激しい痛みが襲う。

「オレが拾われなければ……ラピスは多分、消えない道を選ぶことだつて出来たんだ」

妹を助けるためだけに長い時を越えてきた少年は、結局……妹分を利用したも同じだ。

消える事を望みつつも、同じくらい生への執着に苦しんだ妹分の心を知っていながら、自らの願いを優先した少年は。たとえそれが、妹分の望みであったとしても——

それからの絶え間ない嘔吐きは抑える事が出来なかった。

—あーもー。ほんつと師匠、絶望的なくらい後ろ向きっスよねー

呆れるような声色の羽飾りは、しかし実際はそこまで少年を心配しているわけでもなく、—そこまで行っちゃ、後は落ちるとこまで、落ちてみるのもまた一興っスね——

「何だそれ。でもレンが言うと言得力あるな」だからこそ少年も、この羽飾りには気楽に、無機質にこうした話をする事が出来た。

―師匠の妹だけあって、エルりんも直観持ちなのに、何でエルりんの方は前向きなんスか？
師匠見習ったらどうツスカ？―

「……エルのは何かふわつとしてる気がする」
―違うないっスけどー。エルりんのは多分、
―気配探知に近くて広範囲で、師匠のは五感で
狭い分、エルりんより深く観える感じっスー
「深くとは思わないけど、観えてるものは、
―少しだけ違う気はするな」

羽飾りの言う通り、少年の妹は常に気ままで、
多くを感じる性質を逆に上手く活用している
気風が昔からあり。

少年とは違い、自らもそこまで曖昧でない
妹は、この世に還ってこれた事を心から喜び
……そのことだけは少年も、全ての吐き気や
痛みと引き換えにしても、それで良かったと
大きく安堵することが出来ていた。

「昔は……エルが痛くないなら、オレだって
痛くなかったはずなのにな」

呟く自らが曖昧な少年に、羽飾りはしかし、

―それが成長っス、師匠！ 痛い事は痛い、
その場で感じた方がいいっスー！

「……そうなのか？」
キョトンとする少年に、そう！ と力強く、
羽飾りは断言する。

―後、エルりんも多分痛いと思ってますよ？
ただエルりんは痛みも喜びも両方、しっかり
受け止められるだけじゃないかと！―

エルりんマジばねーっす！ と楽しげな羽に、
少年はようやく、苦くも微笑みを見せた。
―早くエルりんの所帰りたいスね、師匠！―

「レンは本当に、女の子が好きなんだな」
―当たり前っス、男っスから！ 師匠も一度
彼女を作ってみればわかるっスー！―

「……いつ死ぬかもわからない状態なのに？」
その時だけは少年は、何処か達観した顔で、
穏やかな微笑みを浮かべて言った。

「守れないなら、傍にいたら駄目だと思うな」
それが、一人で消える事を望んだ妹分と同じ
願いであると……思い至る事までは出来ずに。

―一通り中庭を探索した後、カフェテラスが
設えられた場所に腰掛け、暗く澁む夕焼けの
ような空を少年は無表情に見上げた。

「魔界って……もつと暗いのかと思ってた」
その空を作る毒々しい紅い太陽は、魔の海と
言われる世界には本来無かったというが、

―魔王さんばねーっすよ、このせいで魔界の
魔物も悪魔もかなり減つたらしいっすよ―
世界を丸ごとねじ曲げて、そんな太陽を出現
させた悪魔は今滅んだというが。

それからは不安定な情勢という魔界にいる
ある者のため、少年はここに來る事になった。

「……オレに本当に、出来る事はあるのかな」
少年を伴ってこの世界に來た養父の目的は、
ある程度は理解していたものの。

これから彼らを待ち受けている試練と罰を、
知る由もなく。思うのはただ、紅い空の下に
來る前に見た、温かな赤い空だった。

荒野の一角、魔界ではごく小さい方のこの岩……少年の養父母と縁戚関係がある悪魔の隠居先で、少年の本来いた世界によくある、教会という建物を大きく広くしたような城に来る前に。

「……え。オレは、外で待ってるのか？」

「ああ。青の守護者とは一人で話させてくれ」少年を魔界まで連れて来た養父が、それより先に立ち寄った場所——彼らが元いた世界『宝界』において、現在は世界地図の中心にある島国『ジパング』の、更に中心地である『京都』という街で。

『花の御所』という、風雅で多くの貴賓が衛兵を伴い住まう場所にいる、街の管理者の一人である公家の男を訪ねて、養父は少年と連れ立って御所の門を叩いていたのだが。

「時間も遅いし、話をややこしくしたくない」

人目を忍ぶように、予め薄暗い黄昏時に、公家を訪ねる約束を申し入れていた養父——夕空に溶けそうな暗い青系の身なりで、薄い灰色の目と、前髪の一部が黒く染まる灰色の短い髪の若い男は、門前で少年に難しい顔で言い含めていた。

「ユーオンが世話になった礼だけじゃなく、人形事件の顛末や、行方不明の黒の守護者の事も話しておかないといけないしな」

昨秋からこの仲春まで、養父母が不在の間、偶然の成り行きでこの御所に引き受けられた少年について。少年が御所から出た後にも、感謝と謝罪に上がる余裕も無い事変に、男も少年もこれまで巻き込まれており、
「ユーオンは、黒の守護者は自分が殺したと、青の守護者に言うつもりだろう」
「……」
男が会おうとしている公家も、その事変とは無関係ではなく。

「厳密には黒の守護者も死んでないわけだし、そもそも巻き込まれたのはユーオンの方だ。

青の守護者の元仲間を斬ったとはいえ、その負い目をユーオンが持つ必要はない」

「……いいのかな、そんなんで」

『守護者』という、とある筋には名の知れた肩書を持つ公家の仲間で、それも『守護者』である者が関わった事変のために、そもそも少年はこの御所と縁を持つ事になっていた。
「話した方がユーオンの気は済むだろうから、俺から事の次第は話しておく」
「……」

慣れない服装——旧いジパング礼装に近い、前開きの上衣を帯で締める通称『漢服』似の身なりに長袴も下衣にした男は、少年と目を合わせて上衣の裾を押さえつつ少し屈んだ。
「子供の事は、親が責任持って当たり前だろ」
日頃は無愛想でも、養子の少年やその妹には穏やかな笑顔を見せる養父は、俯く少年に、そうしてただ苦笑いかけたのだった。

それから程無くして、御所の内へと少年と養父は迎え入れられ。

正装のようできて旧く、袖を捲り上げたり、いかにもチグハグな異国人の養父が、少年を一時保護してくれた公家と話をしている間に。勝手知ったる場所とばかりに、少年は一人でふらりと姿を消していた。

「……やっぱ袴で来た方が、御所の色に合ってたな」

袖が無く襟の立つ黒の上衣が基本の少年は、この御所で生活した時から、黒でシンプルな長い下衣の上に、日中は紫の袴を身に着けるようになっており。

魂である剣を手放す事が出来ない少年には、その方が帯剣に便利で、そうしていたのだが……その必要はつい最近、養父の旧い仲間の助力で無くなっており。一応正装の養父とは対照的に、いかにも異国人の身なりで御所を訪れた少年だった。

上腕に留めて、背中を覆うシンプルな白い

ケープと、膝丈まである白い腰巻の中は黒の上下という少年は。身に着ける物は、片耳の黒い装具に、左手に腕時計のように巻かれた羽飾りと紐付きの鍵がある程度であり。

そうした身軽な恰好で、不遜にも少年は、養父を待つ間に御所の瓦の屋根の上上がり。ちよど赤く焼け始めていた夕空をしばらく、一人でぼけつと座って眺めていたのだが。

「……剣はどうしたのよ？ ユーオン」

「……——」

身動きせずに夕焼けを眺めて、座り込んでいた少年の元へ、物音一つ立てずに——まるで空から降り立った鳥のように、その赤い髪の少女は自然に現れていた。

「……ツグミ」

少年はただ、懐かしい相手の名前だけを呟く。

鵜と呼ばれた、夕焼けより赤い髪の少女は、

肩にぎりぎり着くかどうかの髪を、さらりとかき上げながら……気の強さと気品を備える大きな黒い目を不服そうに細め、座り込んで空を見上げる金色の髪の少年と、少し離れた所で佇んでおり。

「せっかく来てるのに、誰にも顔も見せずに帰るつもり？」

「……」

一人で夕焼けを眺めているだけだった少年に、少年が滞在した頃に剣を習っていた師の娘で、また兄弟子の従妹でもある少女は。

公家や剣の師のみならず、仲良し子供組と言えた少女、兄弟子とその弟に挨拶の一つもない少年を、薄情者と言いたげな目でじっと見つめる。

少年は無言で、穏やかな無表情の紫の目で、夕陽を背にする少女を眩しそうに見上げた。

少年がそうして無言なので、少し気づまり

だったのか、少女は不機嫌そうに口を開いた。

「びっくりしたわ。ユーオンのお父様って、

本当にユーオンそっくりなのね」

「……………」

「ラピからそっくりとは聞いていたけど……

でも、血は繋がってないのよね？」

元は少女と、少女の従兄弟の二人に、後一人

仲良し組の少年が、少年の妹分と幼い頃から

友達関係であり。しかしその養父に少女達は

会った事がないようだった。

「……………」

「……………」

この少女達と顔を合わせれば、妹分の名前が

話に出るのは避けられない事であり。

そのため一人、誰にも会わずに屋根の上に

逃げていた少年は、穏やかに苦笑いながら、

少女によく言葉返した。

「ラピスもオレも、レイアスやアファイとは、

全然違う生き物だと思っ」

まずもって、基本ただの人間だった妹分と、

かなり強い化け物である養父母と、化け物と

しては普段は弱小そのものの少年は。

ヒトの姿をしながらヒトならぬ力を持つ、

千種を超える化け物がいるというこの世界で、

それぞれ違う様相の生き物だった。

何処か覇気のない様子で答えていた少年に、

少女は要領を得ない顔で腕を組みつつ、

「それは何となくわかるけど……でも、あの

そっくり具合じゃ、ユーオンを新しく養子に

されたのは無理ない気がするわね」

「……………」

「……………」

六年前に人間の幼女を養子とした後、昨春に

瀕死の少年に出会うまで、新たな養子を持つ

気など微塵も無かったはずの養父母の事は、

少年も重々感じていた。

「ユーオンも他人の気、しないんじゃない？」

少年がそこまで養父に生き写しな事を、常々

妹分は隠し子説を持ち出して少年をからかい、

「……………うん。正直、ホントの親な気がする」

それは化け物の養父母と何一つ、目に見える

共通点のなかった人間の妹分には羨ましくも

あった事なのだろうと。

隠し子だろうと妹分にかからかわれる度に、

焦って否定してきた少年は無意識に、妹分の

深い孤独を感じ取っていた。

ずっと苦笑いのままの少年に、首を傾げる

少女からはいつの間にか、不機嫌さは跡形も

なくなっており、

「ユーオンがそう言うなら、多分そうなのね」

拾われる以前の事を覚えていない記憶喪失の

少年が、そこまで口にするのは余程であると、

納得したように少女は頷き。

現状把握に優れる勘の良さを持つ少年を、

少年がこの御所にいた頃から、おそらく一番

その実態を掴んでいた——少年とは少し違う

方向性の、強い感受性を持つ赤い髪の少女

だった。

「ユーオン……本当に、元氣無くない？」

「……」

金色の髪の少年は、基本的に穏やかな性質で元々そう喋る方ではないものの、

「……オレ、そんなに何か変わった？」

この御所で少女の近くで生活していた頃には平和な笑顔が似合った少年が、困ったような微笑みで少女を見上げる姿は……そのまま、夕暮れに溶けそうな儂さであり。

「変わったって言うか、元氣無い」

「ツグミはいつも、ヒトの心配ばかりだ」

「何だよ。私そんなにいい人じゃないし」

アンタが危なっかしいだけでしょと、少女は目を逸らして怒った風だった。

「……」

少女がどうやら、少年の反応を待っているようなので、素直な思いを少年は口にする。

「誰にも、会う気はなかったけど……でも、

ツグミに会いたかった」

だから嬉しいと、平和に微笑んだ少年に、

「——って、そういう事じゃなくって！」

真意の不明な直球さは相変わらずの少年に、戸惑う少女はまるで話を逸らすための勢いで、

「ずっと留守にしていたけど、そっちの問題は解決したの？ もう剣はいらないの？」

あまりに近況を語らない少年に少女の方から、訊きたかった事をようやく口にした。

「……」

少女がそれを訊かなかったのは——訊いて

ほしくない少年を無意識に感じていたのか、

少年は少し目を伏せて話し出す。

「剣はレイアスの仲間に小さくしてもらった」

ほらと、左腕に腕時計のように巻く羽飾りの付いた鍵を見せた少年に、少女は目を丸くし、

「力で道具を携帯型にするやり方があるのは知ってるけど、見事なものね……」

最早装飾品にしか見えなくなった仕様の剣に、まじまじと感心しているようだった。

「解決って言うと——オレが誰なのか、もう

探さなくても良くなった」

「え？」

「オレの宿題は終わったってさ。後はそれを、採点出来る奴を迎えにいくだけだ」

実の妹をこの世に還す事が出来た少年は、そのためだけに長い時を越えて待ち続け……現在残った問題は一つ、彼らの母たる人物が、『魔界』という仕事先から帰ってこられない状況らしい事だった。

「それならまた、何処かに出かけるの？」

「うん。いつ帰るかは、今はわからない」

養母である相手にも、実の母たる縁を強く

感じていた少年は、妹にはその相手が必要と

何の迷いもなく養父への同伴を決めており。

つまらなさそうに一つ、息をついた少女は、

「じゃあ、今度帰った時には……ユーオンが誰なのか、訊いてもいいの？」

赤い空を背に尋ね、少年はただ黙って頷いた。

それは幸いだったのかどうか。少年が一番話したくなかった妹分の事は、少女から話に出す事は、不自然な程にその後も全くなく。

それからは程無くして、公家と話を終えた養父と少年は合流し、少女以外の誰にも顔を見せずに花の御所を後にした。

「青の守護者はユーオンの事を心配してたよ。今度帰った時は、ゆっくり訪ねて来いとき」

「……………」

養父の淡々とした報告に、少年は目を伏せる。

「エルフィの事も、ついでに話しておいた。人形事件はもう解決した事も含めて」

「……………エルは、ジュン達を襲ってるの？」

ただの人間でありながら少年の妹は、悪魔と契約し、悪魔が宿った人形を操り動かす事が出来る特技を持っており、

「それは、あのコ自身の意志じゃないだろう」

少年がこの御所に引き受けられたきつかけは、妹が操る人形が公家の子供二人を襲う場面にいくわし、子供達に加勢したからだだった。

「あのコは誰かの手伝いをしたかっただけで……………悪いのはそれを利用した奴らだからな」

「……………」

養父自身はわからない事としても、確かに父たる縁を感じる相手の静かな声に、少年は何故かまた顔を上げられず、俯きながら呟く。

「そんな甘いこと言ってる……………レイアスは、早死にする」

彼らがこれから赴く『魔界』を思ってたか、

自然と表情が硬くなる少年に養父は苦笑い、

「アフィを取戻して、ユーオンとエルフィが一人立ちするまでは——悪魔になっても今は死ねないよ」

ぼんぼんと、訳もわからず視界の滲む少年の頭を撫で叩く男は、不思議なくらい優しげな声色をしていたのだった。

後に少年は、少年自身でありながら少年が得られない記憶を持つ銀色の髪の少年の事を、紅い空の下で羽飾りから聴く事になる。

—キラ師匠曰く、師匠。パパは遠い前世で、エルりんをぶち殺されたらしくっすよ？—

「……………そんな相手を、レイアスは助けたのか」少年の妹がこの世に還れた大きな理由として、躰をくれた妹分だけではなく、養父の存在が不可欠だった経緯があった。

—師匠。パパも師匠達の事、子供だらーなってわかっくんじゃないうか。記憶は無くても、

師匠。パパも何か妙な眼持つてるっぽいスし—

養父の仲間にならなければ『心眼』という、『力』を見て『力』に介入することが出来る特技こそ、少年が持っていた小さな宝の力を、少年の妹を助けてくれた男の特殊性で……………力の繋がりがあれば見知らぬ相手の縁を

判別出来るのが、その灰色の目の男だった。

既に暗くなってしまった空の下で、京都を出るために連れ立って歩きながら、彩の無い目の男は少年を横目で見て僅かに俯く。

「すまないな……ラピスがいなくなつてから、ユーオン自身差し迫つてゐる状態なのに。その解決策も見つからない内に、魔界なんて所に連れていく事になつて」

「……それは、ラピスの事とは関係ないだろ
そうか？ と男は僅かに顔を顰める。

「オレは凄く昔から生きてる剣なんだから、
とつくに寿命が尽きてておかしくないのに、
ここにゐる事の方が奇跡なんだ」

今は少年の正体がある程度把握した養父には、
その身の窮状を少年は素直に伝える。

「忘れっぽくなったのも本当は……ラピスの
影響じゃなくて、オレ自身の限界なんだし」

「……」
『忘却』という『神』を宿した養女が消える
前から、消えた後もまだ様々な記憶の支障を
来たしている少年に、男は強く眉を顰めた。

*

その後、養父の旧来の仲間が造つたという
異世界へ渡る事が出来る不思議な装置を使い、
紅い空の下に來た少年と養父は――

「紫雨君？ 何か質問あるかしら？」
「――え？」

大きな教会のような小さな城の主、養母の
義理の祖母に当たるといふ悪魔の女性の元を、
まず養父は少年を連れて訪ねていた。

「ここから先、火撩君かりようとは別行動になるけど、
紫雨君は一人で大丈夫なの？」

女性から最新の情報を得た養父は、その後は
単独行動をとると少年も聞いており、女性と
共に養父の出立を見送りに出たのだが。

「くれぐれもユーオンのバックアップを頼む、
マヤさん」

「ふふふふ。その代わりちゃんと、うちの
バカ旦那とバカ息子探してね、火撩君」
後、ちゃんと真名以外で今後は呼びなさいと、
女性は養父にも少年にも言いつける。

「くれぐれも紫雨君も、悪魔や天使、神とか
そういう相手には簡単に名乗っちゃだめよ。
弱みを捉まれる可能性があるだけで、いい事
なんて何一つ無いんだから」

「ふーん……」
「ユーオンや俺には特に、真名に意味なんて
無いけどな。それでもか？」

「無いように見えてあるかもしれないでしょ。
それに人間の世界ですら、魔道を学ぶ者には
常識のことよ、これって」

「……じゃあ、マヤの事は何て呼ぶんだ？」
首を傾げる少年に、女性は綺麗に微笑むと、
「私はいいのよ。私程の上級悪魔になると、
誇示した方が自分の力を示す事になるから」
その余裕が持てる程でなければ、名は隠せと
改めて説明する女性だった。

そうしたわけで少年と養父は、滞在登録をしたジパングの登録名——養父は『うつけ検火撩』少年は『うつけ檢紫雨』を仮の呼称としてしばらく使う事にした次第であり、

『銀色』君は、『しぐれきら時雨雲英』で良いのよね？
まだ会ってないけど、会えるのが楽しみだわ
ある経緯で登録名が二つある少年は、二つの意識をそれで呼び分けようと決められていた。

昼夜の空の変化がない世界の、城の一角の広いバルコニーで、大きな四足でコウモリのような羽を生やすトカゲといった獣を横に、養父は女性と今後の相談を続ける。

「この後は紫雨君を、私からの使者として、西のアスタロト城に送ればいいんでしょう？」
「ああ。マヤさんの関係者ともなれば、早々危害を加えられる事はないと思うが……」

『飛竜』と銘打たれる、養父の力——もう一つの体だという灰色の巨獣は、少年の方をずっと心配げに見つめ続けていた。

「改めて確認するけど——アナタ達の目的は、聖魔アスタロトとして悪魔化させられ、今はアスタロト城を守る『うつけ檢流惟』……真名は、テイアリス・アースフイーユ・ナーガを元に戻して、宝界に連れ帰る事でいいのね？」

真面目な顔で言う女性に、養父は頷く。
『アスタロト』は本来、マヤさんの旦那か息子が担うべき悪魔だ。アスタロトの適性を持つ血をひくのは、今はその二人だけだし」

「そんな事ないわよ。だから私とアナタ達が義理でも親戚になるんじゃないの」
そこで、面白くなさそうな顔を隠しもしない女性との伴侶は、元々は少年の義理の祖母の、実の父に当たり……つまりは女性は、養母の祖父の後妻に当たる関係だった。

しかも後妻とは言え、その相手と元々長くそばにいたのは女性の方で、
「あのバカの若気の至りとかで、バカの血をひくのはアースフイーユもその兄弟も一緒。ふらふら自由奔放なのはお互い様でしょ」

「……それでも、真に適性があるのは多分、アフィとマヤさんの旦那か息子くらいだ」
わかってるわよと女性は、大人の女といった流し目で養父を一瞥するのみだった。

女性と養父曰く、『あくま悪魔』というのは実の存在ではなく、『魔王』がそうであるように、概念として在る悪魔の力に近い力——適性を持つ者が、概念から更に力を引き出す時こそ、悪魔が現界した状態と言えるらしい。

「あの孫ちゃんが、可逆か不可逆な状態かは知らないけど、せいぜい頑張りなさい」
「……」

力を引き出すだけなら、その時にだけヒトは悪魔と成ると言うが……魔王のように役割が固定し過ぎた者は往々にして、概念に侵され、人格まで変容するのが定めだった。

「結局……問題は悪魔憑き、なのか……」
そして悪魔と成る可能性があるのは、魔族だけではないと、少年は改めて知る事になる。

それじゃあと——灰色の目の養父は飛竜で飛立つ直前に、少年に改めて同じ事を伝えた。

「アフィの事はすまないが、ユーオンに頼む。

俺は外堀を埋めるため、魔界中を駆け回って代りのアスタロトを探すから」

「……わかってる。自信はないけど頑張る」

養母がそもそも『魔』と化してしまった時、

養父は単身、出来る限りを尽くしたようだが、

「アフィがまだ戻れるかどうか、戻れるならどうすればいいか、それだけ近くで観ているくれればいい……くれぐれも無理はするな」

男の目を以てしても引き戻せなかった相手に、現状把握に優れた少年の力をどうしても男は必要とし、ここまで連れて来たのだった。

「まずはアフィのPHSを手に入れて、何かあれば魔界にいる時はいつでも俺に連絡しろ。何としても迎えに行くから」

「でも……レイアスはアフィの半径二十kmは出禁禁止なんだろう？」

「向こうの奴らは何としても、アスタロトを

城に留めたいからな。今のアフィは敵なのか、味方なのかすらわからないから——それも、ユーオンが感じた通りに動いてくれ」

「……………」

飛竜の背から男はただ、きつく顰めた表情で硬い声色で口にし。

今や連れ合いに近付くことすら許されず、

子供として守るべき少年まで危険を冒させるしかない男の苦悩は、少年が思うよりずっと大きいようだった。

もう半年は会っていない、一年以上前に、

少年を見つけて拾ってくれた養母は——

少年が覚えている姿は、無愛想な養父とは対照的に、常に温かく微笑み養父の傍らに在った、鋭い美貌ながら童顔の女性であり。

「アフィがもし戻れないなら……レイアスは、

諦めるのか？」

答えはわかりながらも、あえて少年は尋ねる。

「それなら今のまま、アフィを連れて帰るよ。

最初からそれは……いつか今までのアフィが消えるかもしれない事は、知ってたから」

「……………」

元より相手が『魔竜』という呪いの資質を潜在させた、だからこそ『魔』に囚われ易い適格者である事を、男はずっと知っていた。

少年の脳裏には、ただ少年に笑いかける、本質は鋭くも一見は穏やかな……空のような青い髪と目の養母の声が響く。

—ラピスと仲良くしていてね、ユーオン—

今思えば、養母は一度も——

妹分を守れとは、少年には言わなかった。

「いいか。ユーオンは必ず、自分の身を守れ」

「……………」

紅い空に飛び立ち、段々と遠ざかる養父を、見えなくなるまで少年は黙って見送った。

無茶言うわねえと。

灰色の目の男の姿が完全に見えなくなったところで、悪魔の女性は嘆息しながら言った。

「こんなボロボロの子を魔界に連れて来て、自分で生き残れなんて無責任過ぎるわよね？ ちよつとは怒ってもいいのよ、紫雨君」

「……何でマヤが怒るんだ？」

バルコニーから城の内へ戻りながら、少年は不思議そうに目を丸くする。

「オレとレイアスが話し合つて決めた事だし。レイアスは——アフィはオレを傷付けないと信じて、多分そうしてる」

「甘いわね。あの孫ちゃんが傷付けなくても、孫ちゃんを引き止めた奴はわんさかいるの。君なんて邪魔物扱いでしかないわ」

「うん。だからレイアスは、マヤの事も多分、信じてるんだ」

「……………」

少年は戻った客間で長椅子にあぐらをかいて気楽に座り、向かいに座る女性を見つめた。

「マヤはいい奴だから。きつと色んな意味で、オレを助けてくれるつて思ってる」

「……火撩君本人がそんな事言ったのなら、甘えるなつてぶち殺すところだけど」

ふうと女性は、呆れたように笑いながらも、大理石の机で氷に漬した酒瓶を取り、酒杯に波々と中身を注いで少年に手渡した。

「紫雨君が言うと思議と、何か可愛がつてあげたくなつちやう」

「？」

受け取つた酒杯にちみちみと口をつけながら、女性を見返す少年に女性は端整に微笑み、

「そうね……私は君の事を気に入ってるわ。

それはその通りよ」

けれどと、きらりと今度は不敵な光を目元にたたえて少年を見つめる。

「私も見返り無しに動く気は毛頭ないのよ。火撩君が旦那も息子も見つけられなければ、君をもらうつもり。そのためならそれまで、君の力になつてあげる、それだけの事」

それはつまり——と、女性は皮肉気に笑う。

「うちの子になる気はある？ 紫雨君」

「？」

「君がそれを拒否すれば、私は君を守らない。だから先に、ここで答えを聞かせて、誓つてくれないかしら？」

「……」

くいつと酒杯を軽くあおりながらも、女性が本気で言っている事は、少年にはわかつた。

それは言わば、悪魔との対等な取引——

契約と言える重さを持つ口約束であり。

その約束を一度してしまえば、違えた時は代償に魂をとられるという類のもので。

受け入れれば結局少年の身は女性のものになり……約束自体を拒否すれば、女性が言う通り今後の身の保証はなく、危険物だらけの世界に一人放り出されるのだと。

少年を取り巻く環境の、現実が示される。

―師匠、やばいっす！ これはまじっすー！
少年にだけ聞こえる羽飾りの声は、そうした
危機感をいち早く騒ぎ始める。

―今まで全然見つかってない奴らが見つかる
可能性は、魔界じゃほとんど有り得ないっす！
師匠本気でこのヒトにもらわれちゃうっす、
帰れないっすよ、このままいくと！―

「よくわからないけど……」

少年はただ、少年なりの誠実な答えを返す。

「オレのするべき事がなくなって、その時に
まだオレがいて、マヤがそうしてほしいって
思っていたら……別にそれでいいよ」

マヤはいい奴だから――と。最後に淡々と、

少年は言葉を付け加えていた。

「……………」

むう――と。女性は少し不服そうな顔で、
少年をまっすぐに見つめる。

「ずるいわねえ。一見は別に、私の言う事を
拒否してないような言い草だけど」

「うん。嫌じゃないよ、別に」

「今にも消えてしまいそうな君が、そこまで
残ってる可能性がまず少ないし。君にとって、
するべき事が無くなる時はそもそも来るの？
君にしか出来ない事という意味はわかるけど、
それは無くなってくれるのかしら」

……と、特にしたい事も無い少年は何故か、
それでも女性の言う通り頷く事が出来ず、

「しかも君の場合計算じゃないでしょ、それ。

本気でそう思ってるでしょ、さっきの」
その答えは嘘でなく、女性を本当に拒否して
いない少年に、女性は深く息をついた。

「計算ならいくらでも、条件の改善の交渉を
してやるところだけど。それが本心だと拒否
出来ないのよね、私達って」

ヒトの望みを叶える『悪魔』である女性は、
その制約から逃れられないと嘆息する。

「オレは人間じゃないから、そもそもオレと
契約は無理なんじゃないのか？」

「その通りよ。意外に食えない子ね、本当に」
「近くに悪魔使いがいるせいかな。たまには
そんなのも、役に立つんだな」

悪魔が望みを叶える対象は人間だけであり、
少年の妹は人間であるからこそ様々な悪魔と
契約を結べる事を、少年は知っていた。

「でも……マヤと約束をするなら、契約とか
なくてもオレはそれを守るよ」

「それはさっきの条件ならって事でしょう？
悩まし過ぎるわ、そうなってしまおうと」

まあ――と、女性は今度は軽く息をつくと、
「火撩君がちゃんと、バカ息子達を見つけて
くれる事に期待しましょ」

とりあえずこの話題は保留と、女性から矛を
収めていたのだった。

後に残ったのは、羽飾りのぼやきだけで、
――も。師匠達はちよつと認めた相手なら、
すぐに言う事きこうとしちゃうんから――

とりあえず束縛は嫌いらしい羽飾りだった。

ところまで——と。翌朝には西に起つ予定の少年は、女性の酌が進んだ所で、朝の散歩の時から気になっていた事を口に出した。

「中庭で女に会ったんだ。黒い髪で黒い服の……見た目はオレと同年代の、緋い色の蛇を連れた、鳥っぽい奴に」

それは本当に、不意に過ぎた出会いで——少年は今も、その状況をどう扱っていいかわからないでおり。

「ああ。橘ん所の鴉夜ちゃんあやの事ね」
来てたのねと女性は、自身の領域である城の侵入者を咎める様子もなく、ますます速くに酒杯を空にしていく。

「うちのバカ息子が引つ掛けた神様かぶれよ。バカ息子が失踪する直前まで一緒にいたコで、橘があのコを養子にしてくれてるおかげで、許嫁にするまでこぎつけたんだけどねえ」

女性の言葉には様々な含みがある事を少年はわかったが、その内実まではわからず、

—あれはカラスさんっス師匠！ 本来悪魔は勝手に嫁とか決めるなって場合が多いんすが、この家は概念の裏をかきまくってるっス——
「……マヤの名字も、タチバナだよな？」

単純に不思議な事について、女性に問い返す。
「私は橘家に嫁入りしたと思ってちようだい。

橘は元々『パール』の地界お遊び用の名で、私の旦那は前『パール』と『アスタロト』の嫡子で、でもどっちも継がずに名前だけ橘を名乗るようになったのよ」

ぺらぺらと相当口が軽くなっている女性は、確実に悪酔いしている証拠でもあった。

「ま、アイツがどっちかを継いでたら、私もアイツの嫁にはなれなかったけど。お互い、家を継がなかったから自由なわけだ」

—『パール』の嫁は『アスタロト』と昔から決まってるっス。だから師匠ママも今は、
『パール』の嫁にされてるはずっス——

「鴉夜ちゃんは新しい世襲外の『パール』の養女で、だからうちの息子と鴉夜ちゃんは、男女逆の『パール』と『アスタロト』なわけ。全くもう、あんな可愛い許婚をほっといて、何処ほつつき歩いてるのよバカ息子は！」

「……何て言うか……」
そこは別に、どうでもいいんだけどな……と、少年はすっかり酔っ払った相手を前に酒杯を空けていく事しか出来ず。

「じゃあアフィと、その新しいタチバナは、夫婦抜いって事になるのか？」

「そーなの、だから火撩君は出入り禁止なの。私情はどうあれ、そういう事にしていないと駄目なの」

—ほらね、悪魔も色々大変なんすよ、師匠——
「……………」

この手の話題が大好きらしい羽飾りは、実に楽しそうではあったものの……。
少年が思うのはひたすら、その黒い鳥との、突然の再会への衝撃だった。

——炯！？と。

悪魔の女性の小さな城の、中庭をふらふらしていた少年の前に、突然にその黒い少女は降り立っていた。

「……………え？」

「あ……………」

金色の髪の少年を真正面から見た黒い少女は、少女が探す相手とは顔が全く違う事にすぐに気が付き、

「……………ごめんなさい。姿と気配が、探し人に少し似てたから」

少女は左上で一部結う、鎖骨までの黒い髪を僅かに震わせ、重い黒の目を拙く伏せていた。

襟口が広く高い襟に短い袖の上衣と、短い

下衣は全て暗い色の出で立ちの少女は、

「ここは探し人の実家だから、早とちりしてしまつて。驚かせて悪かつたわ」

ポカンとしたままの少年に、凜とした顔でも申し訳なさそうに眩き、黒い少女自身大きく動揺していた事は少年にも伝わったが。

「……………オレ、は……………」

俯く少女を黙って見つめる事しか出来ない

少年の髪は、今にも銀に染まりそうな勢いで。

「こいつの事……………絶対に、俺は知ってる——

その内実までは、金色の髪の少年にはまるでわからなかったが……………『銀色』にはわかってるだろうと、それだけは感じていた。

「……………アナタは全く、悪魔には見えないけど。

どうしてこの『フルーレイ』の城に？」

「……………」

その黒い少女は少し前に、大切な剣を遠く

手放した少年の剣を拾って、持ち主を探してくれた少女である事は少年もわかっており、

「おおお！ 何故にカラスさんがこのような所に！？」

それ以上に羽飾りには少女に心当たりがあるようで、後で訊いたところによると、元々は旅芸人一座の護衛をしていた羽飾りが属した一座の、臨時の花形という事だった。

「オレは……………この主人の義理の曾孫だけど」

「そうなの？ という事は、春日家のヒト？」
いや……………と少年は、不意に視線を厳しくした黒い少女に、戸惑うように言葉を返す。

「ウツギの家の、新しい養子。一年くらい前から世話になつてる」

「なるほど……………確かに、初めて見る顔だわ」
春日というのは養母の実家の姓であり、楢は養父がジパングに登録しただけの姓で、

「楢家のヒトは、ほとんど会つた事がなくて。でも……………春日家程に無頼漢ではなさそうね」
難しい顔の黒い少女は、今後親戚になり得るそれらの筋とは良い付き合いではないらしい。

この城の主の親戚ときいてか、探るように少年を見る黒い少女の背から、突然するりと隠れていたらしい緋い蛇が現れていた。

「——！」

少女はこら！　と言わんばかりに、蛇をすぐ取り押さえ、

「呼び止めて悪かったわ。あたしの事は全部忘れて」

ぶつきらぼうにそれだけ言うと、すぐにまたその場から飛び立つように消えてしまい……東の間の出会いはそうして、幕を閉じていた。

「……——」

少年はしばらく、少女が消えていった方角を見つめる事しか出来ず、

「……話さなくて、良かったのか？」

何故かそんな事を、自らに問いかけるように一言だけ呟き。

その時から絶え間ない胸騒ぎだけが、常に何処かに残っている状態だった。

「……何だろう、な」

「……師匠、どーしたっすか？」

女性との飲み会がお開きとなり、ようやく与えられた客間に戻った少年は、ふらついて倒れ込むように寝台に寝転がり、

「朝のあいっ……何か、ツグミに似てる」

「ほほう？　それは例の、師匠の剣の師匠の娘さんですな、師匠よ——」

酒豪の女性に付き合う内に、これまでにない酒量を達成した少年が朦朧とした意識で呟く言葉を、羽飾りはとても楽しげに、普段とは

違う口調で訊き返してきた。

「……？」

「……？」

「……？」

「ああ……ツグミもあいっも、いい奴だな」

少年の頭には最早、羽飾りの師匠という言葉ばかりがぐるぐる回り、内容については全く理解出来ていないまま答えた。

「オレを助けてくれた奴っぽいんだけど……お礼でも言えば良かったかな、せめて……」

今更だなど、自嘲気味に笑う少年は、少女がそんな些細な出来事は気にも留めていないと何処かでわかっていた。

「……また、会うのかな？」

「……また、会うのかな？」

「……また、会うのかな？」

「……また、会うのかな？」

「……また、会うのかな？」

現状把握に優れた直観を持つ少年は、常に目の前の相手を感じながら相手と遣り取りをするために、相手の意図や記憶している事と大きく外れない会話が可能だったが。

翌朝、少年と連れ立って居城を出た女性の問いには、すぐに答える事は出来なかった。

「やつぱり……君、昨日の話はほとんどもう、覚えてないでしょ」

「？」

女性は金色の髪の少年に、約束の事は覚えているかと尋ねたのだが、

「同じことを訊けば同じ答えを返すだろう、新しい事柄は……もう君は、一時記憶以上に覚えないうちにやり繰りしてるのね」

「……ごめん。マヤと大事な話をしたことはわかるけど、内容までは覚えてない」

「結論が出ていれば——約束をしていれば、多分覚えてくれたんでしょうけど」

一見すれば、酒の上での話は覚えていないと、それだけの事柄に思えるものの。

「覚える事と覚えないう事を分けているのも、『銀色』君なのかしら？」

「……多分、そうだと思う」

少年の養父から既に情報を得ていた女性は、その少年がここ最近、とにかく新しい事をあまり覚えられず——それを何とか持ち前の直観でカバーしながら、日常生活を大過なく続けている事を知っていた。

宝界においても様々な形で方々に存在する、旅の距離を大きく縮める最短ワープゲートを指して、少年と女性は紅い空の下の荒野で砂埃を上げながら歩みを進める。

「君が覚えなかった事も、『銀色』君なら、全て覚えているの？」

「前はそうだったけど……最近はずう」
少年曰く、余程現状に必要な事であれば、銀色の髪の少年も覚えないうのだという。

「覚えないうけない事は、先に銀がレンに言っておいて。銀が忘れてたらレンが教えてくれるか、オレが覚えるってレンが言うよ」
「という事は——紫雨君の方がまだ、色々覚えてられるということ？」

こくりと少年は、本来少年より多くの記憶を持つ『銀色』との関係の逆転にも頷いた。

「銀が覚えてなくても、オレが覚えている事は……レンは、少しずつ増えているって言うてる」
「……便利な招魂が近くにいて良かったわね。要するに君は、躰や心ではなく、魂の寿命が近いという事かしら」

通常の老化でなく、精神の維持——魂の力が必要な記憶に少年は支障があるといい、
「元々、躰や心も拙い命の量でしょうに」
「それは、容量は少ないけど補給出来るから、空っぽにならなければ何とか大丈夫らしい」
なるほどねと、女性は大きく溜め息をついた。

「それは自然の化生の君の利点でしょうけど。この世界では……それすらも危ういわね」

意識であり自我たる魂と、本質である心と、それらの拠り所である体と。

ヒトには三種類の寿命があると、少し前に養父は少年に言った。

「心や体の寿命は、単純に老化のイメージだ。それを生かし続ける力——エネルギー自体が、枯渇してしまうんだが……」

「という事は、そつちだとまず動けないか、思ったり、力を使う事自体出来なくなる？」

「ああ。ユーオンはそれは一応大丈夫だから、問題があるとすれば回転の方だろう」

心と体を繋げて一つにし、ある存在の活動自体を維持するのが魂の役割らしく、

「魂も一つの力で、補給が難しいものだから尽きる時はくる。動きが止まれば、体や心が残っていても、そこで完全に時間は止まる」

『力』に関しては、実感的な部分では魔道の徒よりも詳しい養父は、あくまでイメージで少年に伝える。

「魂が無ければ記憶は基本作れないらしい。

確かに魂と記憶は、同じ拠り所に宿ることが多いし……だからユーオンは、剣の中にある魂自体の力が枯渇し始めてるんだろう」

「……………」

なるほど……と、自身の記憶の不調を的確に説明する養父に、少年は納得気に頷いた。

「不思議なのは結局、ユーオンとキラでは、記憶の内容に差があることだな。確かに全く同じ、心と力を持った存在なのに」

「……レイアスから見ても、そう？」

「ああ。どっちも同じ奴だよ、完全に」

少年も、普段の金色の髪の毛の己と銀色の髪の毛が同一人物だとは感じてはいたが。養父が

言う通りの違和感は自分でもあり、

「……強いて言えば、ユーオンの方が少し、キラより何か持っている気はするな」

悩ましげに言った養父の言葉は、羽飾りから何度も伝えられて今も覚えていた。

そうしたわけで現在の少年は、日頃の事を、思考が出来る程度に一時記憶として把握し、ある程度の時間は覚えていた。睡眠などで意識の断絶が入ると、近時の記憶がかなりの部分、失われる状態となっていた。

「難儀な事ね。魂の補充なんて完全に悪魔の領域よ——それだって、なるべく元の自我を損なわないように、悪魔は自身と協調出来る人間の魂しか食べない事も多いわ」

ふーんと、契約により人間の魂を奪うという悪魔の意外な情報に、少年は物珍しげにする。

「悪魔は、魂を食べるのか」

「……君自身は本当に、偉く呑気よね」
傍らで心底呆れ顔の女性に、無表情のまま首を傾げた少年だった。

首を傾げた少年だった。

少年はそうして、自身の事は無頓着な性は、古くから同じ状態であるのだが——

二時間もしない内に、辿り着いた場所は、これまでいた女性の城とは違う大陸にある、構えも大きく四方を塙に囲まれた重厚な城で……見た目はやはり荒野に佇む巨大な教会と……といった、魔界の西方を支配する悪魔の城にて、少年は想定外の事態に直面する。

「……………え……………？」

同伴する女性の顔の力で、すぐにも城主へ謁見出来る大広間に通された少年を、残酷に待ち受けていたのは……………

「何——で……………」

激しい嘔吐きを抑えるように体を強張らせ、口元を塞いで黙り込んだ少年の横で、少年を……………まで連れて来た女性は城主に対峙した。

あらあら——と。

広い聖堂のような謁見の間で、祭壇の中心、簡素ながら荘厳に設えられた大きな玉座上に、あぐらをかいてもたれかかる、子供のようにだらりとした黒ずくめの養母の姿があった。

「これはこれは。随分お久しぶりですこと、フルーレティのお婆様」

空のような青の長い髪の女は、無造作に髪を下ろし、目は少年の知らない青白色に染まり

……額と頬に黒い蛇のような刻印を施され、養母とは違う不敵な顔で微笑んでおり。

「貴方にお婆様と呼ばれる筋合いはないわね。貴方が本物のティアリスならともかく」

多くの衛兵に囲まれながら、全く落ち着きを失わない女性には、少年の背中をぼんぼんと叩いてくれる余裕すらあり。

しかし少年が衝撃を受けたのは、そうした養母の変貌ぶりではなく——

「あら、それはどういう意味かしら？」

「さあねえ？ 私にわかるのは、貴方はただティアリスと同じアースフィューユという者で、ナーガの姓を冠する事だけだし」

ところで、女性は玉座の女の膝に目をやり、

「それは新しいペットかしら？ 貴方が身に纏うべきは、アスタロトたる蛇でなければ、まずいんじゃない？」

露出が多く、体にぴったりとした黒い礼装で、足のスリットから妖艶な生肌の覗く女の膝に……薄い琥珀色をした小さな狐らしき何か、丸まって寝ている事に女性も気が付き。

……少年は、ただ、何故——と。

薄い琥珀色のそれを凝視しながら、震える声で……有り得ない現実を拙く声にした。

「フ……………ピ、ス……………？」

ねえ、ユーオン……と。

何も応える事の出来ない少年の名を――

瑠璃色の髪の毛が呼ぶ声が今更に響く。

――私……何処に行けばいいのかな……――

『忘却』の神と、悪魔との契約、二つもの

呪いを抱えた妹分は……本当は八年前に既に、人間としての命は失った少女だった。

――私、命を食べて生きてるんだよ……――

少女に命を分け与える悪魔と、その契約、

本当は死者である事を普段は忘れさせる神。

その中で辛うじて続いてきた生は、しかし

少女自身が何より、呪われたものと忌み続け。

可愛いでしょう？ とその悪魔は、何一つ

悪びれもせずに、膝の上に眠る薄い琥珀色の仔狐を撫でながら無邪気に微笑んだ。

「この仔は親戚が最近手放した召喚獣なの。

私が預かっているけど、今は飼い主募集中」

「あらそう。私はてっきり、貴方自身の力、

生まれたての招魂かと思つたわ」

「嫌ね、お婆様。確かにこの仔にはほとんど

力はないけど、れつきとした獣でしょう？

ちゃんと由緒ある存在よ」

……と、女性は呆れたように玉座の女を見て、

「親戚の召喚獣ねえ……よく言うわよ」

ずっとわけのわからない少年を置いたまま、

二人の女は応酬を続ける。

まさかと、玉座の女はくすりと笑い、

「お婆様の目的は何かしら？ 別にわざわざ喧嘩するために来たわけじゃないでしょう？」

「……………」

女性もそこで、戯れは終了にしたようだった。

「貴方が本当にアスタロトに相応しいかを、

しばらく観察させてもらうわ。私自身はもう

隠居の身だから――私の腹心を、貴方の下に

派遣する事にしたの」

女性がぽんと肩を叩いた時、俯く少年の髪は

銀色に変わりかけていたのがおし留まり、

「これはフルーレティでなく、アスタロトの

祖母としての意思よ。お解り？」

「なるほど。我が城の行く末を懸念なさって、

という事でよろしいのね」

それなら断る筋はないと、素直に女は頷いた。

「……………」

「……………」

その後はただ、金色の髪の毛の少年に綺麗に笑い

かけた女を……少年は睨むしか出来なかった。

＊

不精と怠惰を司るといふ悪魔、アスタロト。

魔界の三本柱と言われる程有力ながら畏敬の念に遠い者の城に踏み入る前に、別の派閥の上級悪魔の女性は、少年に助言した。

「私からの派遣者は、剣の精霊の『紫雨』と、その部下の『雲英』の二人だと申し入れるわ。

アナタはだから、僅かでも人目がある所では、『銀色』君には変わっちゃダメよ」

「……わざわざ、二人のフリをするのか？」

「せつかく二つの気配と姿を持つ君だもの。その方が断然身動きがとりやすいはずよ」

少年は、普段は腕に巻く黒いバンダナを頭に着けると、銀色の髪で赤い目の、顔に加えて気配まで変わる呪いの持ち主であり、

「バンダナを着けた雲英君は、危ない橋でも好きに渡っちゃいなさい。代わりに、普段の紫雨君は優等生にしてるの」

「……？」

「何かあれば雲英君の責任にして、送還するという事で決着をつければいい。それまでは調べたい事や、やりたい事があれば雲英君の姿で、君は好き放題にすればいいの」

「……昨日の内にそんな策まで立てるなんて、真夜は本当に、いい奴だな」

ポカンとする少年に、ふふと女性は楽しげに笑い、

「こういう荒事——じゃなかった、お仕事、大好き。久しぶりだから血が騒ぐのよね」

更に懐から、一つの小さな銃を取り出すと、何故か少年にはい、と握らせていた。

「昨夜だけの急ごしらえだけど、君なら私の銃の引き金もひけるでしょう。私の派遣者である証明と、最悪の場合はここに込めた分の

力くらい好きに使って。ただし、月の有無で効果が変わるから注意しなさい」

懐に隠せる程度の素朴で小さな銃は、あまりその脅威は少年にはわからなかったが、

「……いいのか？ 本当に」

「私のお酒に最後まで付き合ったご褒美よ。短い間だけど、楽しかったわ」

それが女性の最大限の援助と厚意である事は、まっすぐに感じ取った少年だった。

「リクエストに応えて『銀色』君も最後に、こうしてちゃんと出てきてくれたしね」

「……真夜もつくづく、へんな奴だな」
城門の近くで立ち話を始めた女性は、少年に

『銀色』化する事を望み、すぐに聞き入れて、今まで話していた銀色の髪の少年だったが、

「紫雨君の方がうちの息子には似てるけど、君ともまた是非呑んでみたいわ」

「……俺は酒、呑めないけど」
キョトンと戸惑う銀色の髪の少年は、死神の

異名を持つ苛烈さを見る影も無く……ただ、目前の女性の穏やかさを映したようだった。

本来なら一瞬で大陸を渡る術を持つ女性が、わざわざゆっくり旅路を楽しんだ、束の間の

安らぎをも無自覚にのせて。

女性の派遣者として、一人その城に残り、客人棟だという上層階の一角に、金色の髪の毛は迎え入れられた。

「もう一方の部屋はどうされますか？ 別に用意した方が良いでしょうか？」

「……キラはオレの招魂だから、一緒にいい」案内者が引き下がった後、与えられた客間を一瞥すらせずに、少年はすぐに客間の外へとバンドナを着けて飛び出る。

「……………何処にいる？」

中空が吹き抜けの方形の回廊で、少年へとあてがわれた客間は零時の方向に位置し、すぐ近くに、上階へと続く階段を見つけ、招魂という身を偽装する銀色の髪で赤い目の、黒い翼を生やす少年は。

バンドナで半ば隠れた目に暗い光をたたえ、ある何かを目指して階段を駆け上がる。

『招魂』というのは、少年の剣と共に在る羽飾りもそうだが。女性曰く『魂魄』のみの存在であると、少年は説明されていた。

―師匠のバンドナもオレと同じ、招魂……の媒介と、確かに言えない事もないっスね―

少年の気配と顔を別人に塗り替える呪いは、そこに昔日の呪いの主の残滓があるからだ、悪魔―魂という高次存在に最も近い化生の女性も、立ち話のついでに説明していた。

―普通の生き物は、心霊と魂魄と体があって初めて、生き物として成立するんだけどね。体が死んだら体を生かす力の魄が失われて、昇天した靈魂の魂が真っ白になって、新しい魄のある体へ靈魂が転生するの―
その中で『招魂』は、魄たりえる力を持った体もしくは何かの媒介に、心霊無き魂だけが呼び戻された抜け殻であるという。

―悪魔が魂だけを食えることが可能なように、霊と魂は、上手くすれば分けられるの。一番わかりやすい例が召喚獣かしらね―

世界の化け物の力の中には、特に大きな力の一つとして『召喚獣』という、『力』だけが大きいなる獣の形で固定され使役される神秘があるが。その正体こそ、元は強い力を持った化け物の魂だけが残り、何らかの媒介の魄を得て現界可能となった、滅びた化け物の招魂という事だった。

―魂だけじゃこの現世には介入出来ないけど、魄はそれを可能にするわけ。魂に記録された力を、魄が再現すると思ったらいいわ―

剣の羽飾り―刃の妖精の魂たる羽を得て、少年が刃の精霊の力を使うようになったのも、同じ理由であるようだった。

―ま、言わばオレは師匠に使役される、獣の由緒とかはないからフツーに招魂っすー―
魔に染まれば使い魔っス！ と羽飾りは笑う。

そんな話を、上へ上へと階段を上る少年が
必死に己に刻み付けるのは――

その先にある少年の目指すものが、まさに
招魂という存在であるからだだった。

「何で……あいつが……」

目標に近づく程に強まる、否定しようのない
確信の直観に、バンダナの赤に隠された暗い
青の目を少年はきつく歪ませる。

「ラピスが……ここに、いるんだ――」

それは、その少女を完全に失ってしまった
少年にとって……。

――私なんか消していいから――

少女の消えゆく望みを知っていた少年には、
耐え難い現実の焼き直しでしかなく。

最上層に辿り着き、一つしか存在しない、

おそらく最も賓客を迎えるための客間の前に、
少年は黙って立ち尽くした。

「……間違い、ない」

扉の向こうには、慎ましいながら、この城の
主の私室と同等の造りの寝所が広がる事を、
中に入らずとも直観の少年は感じ取る。

「この先に……あいつが、いる」

そしてその中央の寝台には――

天蓋が付いた寝台の一角に、薄い琥珀色の
小さな獣が丸まって眠っている事を、まるで
直接目にしたぐらいにはつきりと確信する。

確かに消えてしまったはずの、大切な誰か。

今も絶えず少年を嘔吐かせ、消えない痛みを

残していった瑠璃色の髪の毛分が――

もう何処にも少女は存在しないこと。

それなのにこの先に何かがあること。

大き過ぎる矛盾の両立の痛みは強く。

現状把握に優れ過ぎた少年は、鍵はおろか、

畏の一つも扉には無い事をあつさりと言破し

……それがわかった直後に、躊躇わずに扉を
静かに開け放った。

――……あら、あら――

部屋に立ち入り、わかっていたはずなのに
呆然としてしまった少年の傍らで、

――ラピちゃんか……ラピ狐ちゃんに？――
同じように当惑はしながらも、何処か不敵な
楽しさすら窺わせるように、羽飾りは呟き。

「……――……」

声を呑んで寝台を見つめる、黒いバンダナで
銀色の髪の毛の赤い目の少年を、

「…………？」

広過ぎない寝所の広い寝台で、薄い琥珀色の
獣の耳を生やす、肩までの白い髪で紅い目の
少女が……ポカンと見返していた。

もしもそれが——少年の知る誰かの完全な魂であったのならば。

白い少女はおそらく、今の姿の少年を別の名前で呼んでいただろう。

「……………ラピス……………」

「……………?」

見知らぬ闖入者である少年を、肩掛けをした着物のような姿で、髪に繋がる薄い琥珀色の尻尾を首の後ろに生やした白い少女は、ただ何の感情もなく少年を見つめる。

髪や目の色が違い、獣の耳と尾を不思議な形で生やしているもの……その姿は紛れもなく、瑠璃色の髪の少女と生き写しであり。

少年は黙ってすると黒いバンダナを外し、現れた銀色の髪を金に戻してから、紫の目で再び少女を見つめたが、

「……………」

少女は相変わらず、まるで見慣れた景色でも見るように、表情も心の動きも無く、現れた異物を見つめ続ける。

「……………わから、ないのか……………」

まず少年そのものが、白い少女の中には全く存在せず、

「何も、覚えて……………ないのか……………」

「……………?」

そもそも目の前の少女には、心自体が存在してないと、金色の髪の少年は思い知る。

招魂とは結局、抜け殻に過ぎない。女性も、招魂そのものである羽飾りもそう口にした。

——魂は心霊無しに変化も成長も出来ないから、招魂の化生は、『最後にそう在った』形しかとれないの。その情報……記憶すら無ければ、召喚者の完全な人形でしかないわ——

——オレも師匠、てかオレの体が傍に無いと、

これだけ自由には思考出来ないっす。大体の招魂は頭固いバカと思つて正解っすよ——

だから召喚者の意思の通り、闖入者の事を

観察している白い少女を怖がらせないように

……警戒で済む程弱小な事が幸いした少年は、

立ち尽くしたまま、少女を見つめ続け。

白い少女の方が逆に、何も動かない状況に行動を迫られたのか、座り込んでいた寝台をゆっくりと立ち上がり。拙い足取りで少年の方へと近付いてきた。

「……………——っ……………」

「……………?」

少年を覗き込むように、紅い目を斜め下から恐る恐る近付けてきた少女に——

「……………」

びくつと少女が全身を竦ませるのも構わず、少年は堪え切れず少女を抱き寄せていた。

警戒はしても抵抗はしない少女は、少年の腕の中で成すがままの状態であり、

「何で……こんな事、するんだ」

少女を抱き締めたままの形で、少年は不意に、その第三者へとようやく言葉を発していた。

あらら——と。

少年からの声かけに、ただ状況を見ていた

誰かが、笑み混じりの嘆息と共に姿を現した。

「久しぶりに会うおかーさんへの、第一声がそれ？ 可愛い息子ちゃん」

「……オレは、あなたの事は知らない」

にべもなく言った金色の髪の少年に、少年の養母の姿をした誰かは、寝台でごろりと肘をついて寝そべり、少年を見上げた。

「くすくす。それはどーいう意味なのかなあ、

ユーオン君」

「……………」

「気にしないで、率直に喋ってくれていいよ？

この部屋の結界は特別仕様だからネ」

少年をここに連れて来た女性と対峙した時の、妖艶さとは違った、子供っぽい口調と表情の養母がそこにおり、

「ここはラピちゃんのためだけのお部屋なの。

あたしもよく、てかラピちゃんが来てからは毎日一緒に寝泊りしてるけど、ユーオン君も

ここでは気を抜いて過こしていいからね」

「……………」

少年を君付けで、養女を略した名前と呼ぶ事などまず無かった養母は、誰かとか少年は形容する事が出来ず。

誰か曰く、扉に鍵はあるが、掛けていない

この客間は、誰かの結界に常に守られた状態という事だった。

「ラピちゃん——……今は狐魄こぼくつてあたしは

呼んでるけど、狐魄はこの鍵も開けられない

赤ちゃんだと思っちょーだい。だから鍵を

閉めるわけにはいかなくってね」

その声には予想外に、養母とはまた違った、誰かかなりの優しさが一見満ちていたものの。

少年は白い少女を抱き締めたまま、少女の肩越しに誰かを、恨むような目で見つめる。

「……あなたは、オレやラピス、レイアスの知ってるアフィじゃない」

「ふんふん？」

「そっくりだけど違う。アフィとは全然……

本当は関係無い誰かだ」

その養母の体を、内なる力まで完全に再現して扱える程、養母に近いはずの誰かは……『力』だけを見る養父には、同一人物としか見えなかっただろう事も少年にはわかり。

「アフィと全く同じ力を持つてるだけの——

あなたは誰なんだ？」

「……………」

「アフィの体を奪って、ラピスをこんな形で残して……あなたは、何がしたいんだ」

ようやく白い少女を離すと、少年は厳しくも何処か泣き出しそうな顔で、誰かに対峙した。

「あたしが……誰か、って？」

くすくすと、あくまで楽しんで幼げな誰かは、

「あたしは何か——ユーオン君にはすつごく
親近感あるけどねえ」

寝そべっていた寝台で、片膝だけ立てる形で
座り直し、青白く鋭い目で少年を見貫く。

まるでそれは……己以外の誰かの軀を使う、
呪われた同志であると言いたいかのように。

「ラピちゃんをここに留めた事、君は不服？」

「……………」

「せっかく余ってた狐の落魄があったから、
命の必要なラピちゃんに、食べさせてあげた
だけなんだけど」

「それが……ラピスの親を殺した狐でもか」
おお、と誰かは、心から楽しい目付きで、
少年をじつと見直した。

「噂の直観か、凄いいねえ。話が早くて助かる」
「ラピスはもう……命を食べてまで、ここに
いる事は望んでなかったはずだ」

そうだよと罪の無い顔付きで、誰かはとても
無邪気に微笑む。

「ラピちゃんのお父さんを殺した狐だから、
ラピちゃんは遠慮なく食べて良かったのよ。
それが正しい因果応報でしょ？」

「……………」

「でも君の言うとおりに、ラピちゃんはそれを
望まなかったから、魂だけをもらっちゃった。
知ってるでしょ？ 悪魔と契約した人間は、
死後の魂を奪われるんだって」

「……………」

誰かを見る少年の眼光に火が入り、少年自身、
どうしてここまで衝撃を受けたのかようやく
自覚を始める。

「ここにはラピちゃんの本体……心はないよ。
魂を失ったラピちゃんが、今後どうなるかは
知らないけど、それでもあたしにはあのコの
魂をもらう権利があるの」

「あんたは……………」
少年の声を閉ざすように、誰かは先を続ける。

「君が滅ぼした黒の守護者も、ラピちゃんが
命を喰った悪魔も、あたしの仲間なのよ」

「……………」

まるでそれは——それも因果応報であると、
言いたいかのように。

「死神である黒の守護者は、ずっと、本当は
死者であるラピちゃんを見逃してあげてた。
あたしの仲間は自分を削って、ラピちゃんを
生かし続けた。その代償をあたしが代わりに
回収した、それだけの事よ」

「……………」

声を呑む少年に更に追い討ちをかけるように、
誰かはある現実をそこで口にした。

「たとえラピちゃんが望んでも望まなくても、
あたしは……このコは、どんな形でもいいと、
ラピちゃんをここに留める事を願ったの」
「……………え？」

「あたしがこのコの軀をもらったのは、その
願いを聞き届けた代償。願ったのは全部……
君達のおかーさん自身だよ」

ひたすら黙り無表情に佇む白い少女を横に、少年は呆然と、養母だった誰かの冷ややかな微笑みを受け止める。

「ラピちゃんを生かし続けた悪魔が、最近は何弱っていた事をあたしは知ってた」

「……」

「このコとあたしに同じ力……縁があるのは、君が言った通り。だからあたしは、このコに会いに来て伝えたのよ……ラピちゃんをまだ留めたければ、言う事をきけって」

誰かは何一つ、嘘は言っていないとわかる少年は、黙り込むしかなく——瑠璃色の髪の少女の昏い呪いが招いた事態は少年達だけに留まらなかった事を、否応無く感じ取る。

「君の問いへの答えは、大体それだけどくすりと誰かは、惜しげなく核心を口にした。

「付け加えるなら……あたしの事は、魔竜と理解してもらおうと早いかな」

「……!?!」

誰かの言葉の意味はわからないまま、しかし少年は気力を取り戻した目で、

「何で……オレにそんな事を話すんだ？」

警戒するように誰かを睨む少年に、心なしか少し幼さが抜けた誰かは端整に微笑んだ。

「それもこのコの望みだから」

「……アフィの？」

「君達は……このコの怖さをわかってない」

声色だけならとても優しげに、誰かはまるで憐れむように、少年と少女を並んで見つめた。

魔竜という言葉だけなら、少年は養父から、既に話を一つ聞かされていた。

「アフィは竜の血をひいて、暴走しそうな強過ぎる力を抱えてる。それを抑えるために、子供の頃の自分の記憶まで封じてるんだ……」

だからいつも、アフィは笑ってる」

常に危うげに笑っていた養女とは少し違う、養母の微笑みの裏に封じられた心の話を。

「記憶を封じたら、力も封じられるのか？」

「力は結局、使う者の心で形が決まるからな。小さい頃のアフィは何かと不安定だったと、その心を丸ごと封じられたと言ってもいい。今アスタロトと名乗るあのアフィが、それとどう関係するかまではわからないが……」

とにかく養母の力は強過ぎて、それを魔竜と呼んでいる事だけ、少年は理解していたが。

現在は召喚士として、主に最強の召喚獣、竜を役する事に長けた養母に宿る誰かは、魔竜だと名乗った意味……それは今の少年はさっぱりわからず。

『魔』とはね——望みを叶えるためには、どんな酷い事でもする者が成る末路なの」

「……?」

「君が言ったように、狐魄はただの抜け殻で、留める意味なんて本当はない……なのに何故、このコ……私はそれを望んだと思う?」

……やめると、思わず少年は反射的に呟いた。

「君と狐魄はどうやら、相性が抜群みたいね。」

狐魄にはね、少しでも脅威だと感じるものが近付けば、逃げるように教育していたのよ」

常に目の前の相手を、我が身のように感じる少年にはその時、相手のある変容とその内の厳しい意図が、既に伝わっていた。

「私は聖魔アスタロト。魂が属する概念界を拠点とする、天使たる身を悪魔とした高次の生物……だから、魂に関しては詳しいの」

少年は思わず、相手の冷たく青白い目から逃げるように一歩後ずさる。

「狐魄は飼い主募集中なの。召喚獣や招魂の飼い主は、基本はただの使役者だけけど」

「君達程に魂の性質が近ければ、何の問題もなく……溶け合ってしまったらどうね」

相手は本当に綺麗に、冷然と微笑んだ。

少年はただ悟る——

この高次生物という相手には、魂の寿命が近い少年など、とつくに知られていたのだと。

だからその、『魔』という相手は、

「君が狐魄を——食べてしまえば？」

「……やめろ——」

悪魔の囁きを、ある子供達の母たる縁を持つ養母へと伝えた。

「君の妹が、ラピスの軀をもらって……この世に戻ってきたように」

「——やめろ……!」

次は少年を助けるために、少女の魂をも利用すればいいと……そう言いたいのだろうか。

ざわりと——

声にも出来ない程の衝動が、少年の奥から全身に針を刺すように駆け回り。

「っ——……」

膝をついて崩れ落ちた少年は、ただ込上げる赤い何かを激しく吐き捨て……。

寝台から降り立ち上がった相手は、そんな少年を見下げるように悠然と佇む。

「その方がラピスも君の力になれて……君の中で生き続けられて幸せだと思っけど？」

悪魔と呼ぶのに相応しい容赦なき微笑みで、少年の横でずつと、無表情に立ち続けていた白い少女の頭をよしよしと撫でると、少年と少女にくるりと背を向けていた。

「今は私が力をあげれば、狐魄はこうして、ヒトの姿をとる事が出来る」

仮の主たる悪魔の背を、白い少女は変わらず無表情に見つめ続け、

「君が狐魄の主になれば同じ事が可能で……君が望むなら狐魄の記憶も還してあげるわ？」

最早答える事も出来ずに俯き座り込む少年に、それだけ言っ……養母だった悪魔は、その養子達を残して去ったのだった。

その後はいつたい、どれだけの時間――

少年はそこで座り込み、動けずにいたのか。

――つて――事は、ですよ……師匠？――

不意にようやく、羽飾りの場違いに明るい声に気が付き……。

――師匠が望むならば、ラピ狐ちゃんは記憶も戻って、ラピ子ちゃんに近いヒト型の姿で、

師匠の力として共に生きられるって……そう、

あの魔竜さんは言ったんじゃないですか？――

相手の意図を少年のように直接に感じる事がないものにとつては、そう解釈出来る現状を

冷静に伝える羽飾りだった。

「……それは……もう、ラピスじゃない」

しかし少年には、『魔』である相手が語った
思いの裏には……どんな事をしてでも望みを

叶えんとする『魔』の昏い衝動が存在すると、

誤魔化せない現実が観えてしまう。

「あいつは……ラピスを助けようと思ってるわけじゃない」

――そーなんすかねえ？　ここまでして残して

あげてる感じなの？――

「ラピスの時間は、もう止まってる。それを

あいつは……誰よりも知ってる」

だからこそ誰かは、その魂だけを残す事に

留め……記憶までも奪って、人形として白い

少女をここに置いているのだと。

「オレは……それは絶対に、嫌だ……」

金色の髪の少年は、今も傍らにある少女へと

振り返ることも出来ず、

「それがラピスの望みでも……出来ない……」

ポロポロと大きな涙を両目に、少女が消えて

しまつてから初めて、嗚咽を洩らしていた。

そっかあ……と。羽飾りは何処か、半分は

呆れたような――もう半分は安堵したような

声で、納得したように少年に語りかける。

――ラピ子ちゃんも師匠を泣かせてまで、無理
言いたいとは思ってませんよきつと――

「……」

――じゃ――師匠？　ラピ狐ちゃんのために何が

出来るか、一緒に考えましょーや――

たまにはこうして、真つ当な態度もとれる

羽飾りは、今やすっかり少年の相談役だった。

「コハクを……妙な主の所へやらないように、

あいつと話をつける」

――そーつすね。飼い主募集中らしいつス――

結論が出てしまえば、目的を遂げるためには

立ち止まらない少年は立ち上がり、

「オレにも銀にも、それは叩き込んでくれ」

――了解つス！　スパルタでいくつスよ！――

一度だけ、無表情なままの白い少女の方へと

振り返り、その部屋を後にした少年だった。

全ての衝撃も感傷も、今の少年には結局、

長くは残らないものだとしすように。

客人棟の最上階を後にした城主を、改めて探すために、少年は銀色の髪に再び変わり。黒いバンダナをぎしりと巻くと、まず自身に与えられた客間まで戻った。

現状把握に優れる事が武器である少年は、足場を固める事から始める。

「部屋の中はひとまず……監視はなさそうだ」

「へえー。客は一応大事にするんスカねえ、悪魔さん達はー」

「俺が弱いから問題にしてないんだろ」

「あ、なるほど。師匠それ説得力ありますー」

でもと羽飾りは、バンダナで半ば目の隠れた少年の何処か不敵な笑みに気付いてか、

「キラ師匠、ヤル気満々っスね？ 今までに無い悪どい顔が眩しーっスよ！ー」

「別に……こういう時は、キラのやり方を、参考にするだけだ」

バンダナをすると現れる人懐っこい顔立ちの赤い目の少年も、羽飾りに軽く笑いかけた。

「キラは何処にいつても、誰の中にも、いつも上手く立ち回ってたから」

「へえー。キラ師匠は本当、最近の事は全然覚えられなくても、遙か昔の事はちゃんと思い出せるんスカねえー」

少年が口にする名は、本来は少年が身にするバンダナの持ち主であり、バンダナによって変貌する姿はその持ち主を映しており。

そうしたバンダナの内に在る呪いと共に、その名を銀色の髪の少年に譲った、遠い日の親友の事は……今の銀色の髪の少年はわりと、しっかり思い出せるようだった。

「でも、普段の師匠はそのバンダナつけても、羽しか生えないっスよね？」

少年がバンダナの呪いによって変貌するには、何故か銀色の髪の際にバンダナをつけないとその効果は現れず、

「ああ……キラの力は俺だけのものみたいだ」

後一つ付加された力、遠い日の黒い鳥の羽が、金色の髪の少年も共有出来る力だった。

「そーなるとですよ、キラ師匠の出番が結構増える事になるっスね。大丈夫っスカ？ー」

「……多分、空いた時間の大半は寝て過ごす事になるだろうな」

「そーっスよねえ。体力にも気力にも、てか記憶にも負担かかるっスよねー」

まず銀色の髪の少年でいる事自体が、日頃の省エネ仕様である金色の髪の少年とは違い、少年に大きく負担を強いる状態ではあった。

「キラ師匠も頑張ってお酒呑むっス！ それなら元妖精のオレの体は元気になるっス！ー」

「……そうなのか？」

確かに金色の髪の少年は、大半の活動の力をそこから得ている事は少年も感じており、

「師匠みたく竜や精霊には自然の気が、でも妖精には、遊び心が最大の力の源なんス！ 多分師匠、語尾をによるとか変えてみるのも

かなりいいと思うっスよ！ー」

「……とりあえず……どっちも、嫌だ」

無表情に少年は、そう答えるしかなかった。

実際自身に、後どれくらい時間があるのか。

心や体の寿命でなく、魂の限界という事が
どういった経過で今後表面化していくのか、
銀色の髪の少年にもさっぱりわからなかった。

「……あいつを、探さない」と

客間を出た少年は、まずその階層の回廊を
ぐるりと一回りせんと歩き始め、

「剣は基本は封印っスか？ 師匠――」

その手に携える、普段の武器とは違う短刀に、
羽飾りは残念そうに呟く。

「剣を元に戻すのも力があるし……ここでは
極力、護身以外の戦闘はするなとレイアスに
言われてる」

「そーっスね、だから師匠。パ、その短刀を
師匠に渡したんスよね――」

少年は養父の意向に、基本的に異論はないが、
「でもレイアスにも、ラピスの事は想定外の
はずだから……狐魄を守る時べきには、戦う」
それはまた別の話だと、無機質に口にした。

銀色の髪の少年は当初から、養父や養母が

心配する程、弱小な妹分を守るために何をも
厭わぬ苛烈さを持った養子だった。

「何で……殺さないの？」

魔物や山賊など、妹分の脅威となり得る敵を、

出会えば皆殺しにせんとする少年を制止する

養父母に少年はそう尋ね、

「……逆にきくが。何で殺す？」

養父は何処か痛ましげに、少年に問い返し、

「殺したら、痛いでしょ？ ユーオン――」

養母はそれでも微笑みながら、悲しげな声で

少年を諭した姿を、昨日の事のように少年は
思い出した。

「無理に痛いこと……しなくていいよ――」

それでも少年は、脅威があれば潰す以外に

やり方を知らず、守るべきものが差し迫って

いる内は、違う道を探す余裕も持たず。

その役目をほぼ終えた今になって、やっと

振り返る事が出来るようになっていた。

「……とりあえず殺せば、考えずに済むのに」

「え？ キラ師匠、どーしたんスか？」

無表情であるが、苦笑するような声で呟いた

少年に羽飾りは不思議そうな空気を醸し出す。

「殺すわけにいかない奴が相手だと、俺は、

何が出来るんだろう」

「ははあ。そりゃ、自称魔竜さんの師匠ママ、

殺しちゃったら元も子もないっスね――」

少年がこんな所まで来た目的は、あくまで

流血とは本質的に無関係であり、

「殺す方法を探すのは得意だけど……助ける

方法を考えるって、本当に難しいな」

自嘲するように少年は、それでもそうすると

決めた理由を、無意識に口にしていった。

「アフィが帰れば、レイアスと、エルは……」

俺やラピスがいなくても、幸せになれる」

それが、その養子達の願いと言うように。

現在少年は、少年の客間とまさに対側の、南の回廊までちょうど辿り着いた辺りで、——えー。そこに師匠もいないとダメっすよ、エルりんもパパママも悲しむっすよー！——羽飾りは不服げに、ふとそこで立ち止まって回廊を見渡す少年に反論する。

——特にエルりん！ 師匠以外、誰も本当に、エルりんの事情知るヒトはいないんすよー！——俺もエルも、元々いはいはずだったから。ラピスの代わりにはなれないけど……でも、エルはやつと、家族と普通に暮らしていける」少年は淡々と、回廊を見回しながら、「エルなら、自分で幸せになれるよ」そこでまた羽飾りが反論する前に。

どちらも思ってもみなかった横槍が、すぐそばの扉が突然に開いて入る事になる。

「——え」
元々すぐにずれ落ちて少年の目を半分隠す、固定の弱いバンダナが突然の風にふかれ——

「あれ？ イーレンちゃん？」

開いた扉、南の客間に滞在するらしき幼げな声の主は、少年の躰の本来の通称を呼び、「……の、そっくりさん？」

扉から吹き出た風に回廊の中空に飛ばされたバンダナのため、慌ててそれを追って中空に跳んだ銀色の髪の少年は、

「……の、更にそっくりさん？」

バンダナを掴んだはいが、羽を具現化するにはそれを巻かなければいかず、

——って、師匠何気到大ピンチ！——

落下しながらそれは難しいと悟った不器用な少年が、成す術も無く落ちていく様子を声の主は目の当たりにし。

「アナタ——だあれ？」

更なる風が、人形のようなふわふわの服装の幼げな声の主の背後から生じ、中空の少年を強い上向きの風に乗せて——

声の主の元まで、少年を拾い上げていた。

「だいびんぐの邪魔してごめんねえ。アナタ、どうしてイーレンちゃんのそっくりさんに、更にそっくりなの？」

「……………」

銀色の髪の少年は、少年を風の力で引き戻し、目前でここにこ無邪気に微笑む幼げな相手に見覚えがあった。

「あんた……………」

——何と！ オレの元カノではないっすか！——羽飾りの言う通りに、ふわふわとした明るい茶髪を二つに束ね、肩の上に揺らして微笑む相手は、羽飾りが妖精だった頃に護衛をしていた旅芸人一座の花形の一人であり、

『レスト』の……レンの知り合いか」

もう一人の花形と、更には臨時の花形にまで浮気心を出した妖精を、最初に糾弾したのがこの幼げな花形だった。

「……助けてくれて、ありがとう」

「えへへー。どういたしましてえ」

花形は全く、悪意のない顔で幼げに笑った。

一人二役をするべき身としては、この場で金色の髪に戻るのも、バンダナを着けるのもどうかと難しい顔をしたままの少年に、

「気配は似てるけど、何か気がちよつと違う？」

アナタ、イーレンちゃんのそっくりさんと、どういう関係？」

花形がそっくりさんと呼ぶのは、花形の知る妖精の軀を使う金色の髪の少年を指しており、それに加えて銀色の髪の少年もそっくりさんとみなしたようだった。

「イーレンちゃんの気配もやっぱりするなあ、おかしいなあ。イーレンちゃんと金色ちゃん、銀色ちゃんの三人が一緒にいる感じ？」

「……俺には、それはよくわからない」

冷然と正直な事を答え、くるりと少年は踵を返そうとしたが、

「あんたは——この城の悪魔なのか？」

回廊を歩いていた目的を思い、踏み止まって花形に問いかけた。

「ううん。るんは休暇で遊びに来てるんだあ」

客人棟に相手がいる状況を考えれば、妥当な答えで、そもそも現状把握に優れた少年には相手が嘘をついていればわかるため、

「そうか……」

今度こそ、立ち去ろうとした少年だったが。

「アナタは？ るんと同じでナナハちゃんのかん旋？ それとも誰か知り合いがいるのお？」

「……——」

知った名前に、またも少年は踏み止まり。

「ナナハ……って？」

「るん達のレストの総支配人だよ。休暇中のレジヤーまで頼めば段取りしてくれるのお♪」

「じゃあ、あんたは……そいつの知り合いの、」

「この城主の事は知ってるか？」

少年にとってその相手は、養母の幼馴染みの妖精にあたる、現在はある大国で女王と共に執政を助けている魔女だった。

「アっちちゃんのこと？ うん、知ってるよ」

「そいつがいつも何処にいるか、知ってたら教えてくれ」

先程金色の髪の少年が話し切れなかった事を、改めて話をするため城主を探していた少年に、

「ええー。でもあんまり、今のアっちちゃんに近付くと危ないと思うよう」

「……」

親身だからこそ難しい顔をしている花形を、銀色の髪の少年は感じて黙り込んだが。

「まだまだ押すっス師匠！ ルンは悪魔では超お人好しの部類に入るので、ここで協力をとりつけておくのが得策っス——」

人間世界で違和感なくとけ込み、芸人一座の花形をしている相手に羽飾りは太鼓判をおし、少年もそれはある程度同意だったが、

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……手間をかけた」

花形に背を向けた少年に、何と花形は――

「ねえ、待ってえ、そっくりそっくりさん」

「!?」

背後から少年の首に手を回し、抱きつく形で少年を引き止めた。

「……さわるな」

基本的に銀色の髪の少年は誰かに触れる事を苦手とするらしく、すぐに花形を引き離れた少年に、花形は相変わらず無邪気に笑い、
「冷たいなあ、でもそーいうタイプ、るんは好みだなあ。久々のハントの予感?」

きらりと褐色の目を紅く光らせ、警戒態勢の少年に幼げながら艶のある微笑みを浮かべた。
「名前教えてよう。これから何かと、るんがアナタを手伝える事もあると思うよ?」

今の少年の拙い記憶に、何度も伝えられた注意事項は辛うじて残っており、

――悪魔とかには簡単に名乗っちゃだめよ――

それでもこの相手は、寄る辺無きこの城では唯一協力体制をとり得る者であること、その条件として名乗ることを相手が求めているとわかった少年は。

「……時雨雲英。あんたが知ってる、レンの知り合いは檢紫雨……俺の使役者だ」

ここで名乗るべき情報を正確に、一番最初に伝えた相手がこの花形の悪魔となった。

「ふーん。じゃあ金色ちゃんは紫雨ちゃんで、

銀色ちゃんは雲英ちゃんって呼ぶね」

「……」

加えて一つ、この相手には伝えておくべきと

少年が判断した事は、

「キラは、こっちだ」

場に他の監視者がいないことを把握しながら、黒いバンダナを花形の前で身につけ、

「あれれ。違うヒトになっちゃった、ホント」

「俺は時雨で――キラ以外の姿では人前には出ない。あんたに見つかったさっきの姿は、

他の奴には言うな」

金色の髪の少年でもバンダナの少年でもない、銀色の髪の少年の立ち位置は、決めていないと思いついた少年だった。

花形はキョトンとした目で、少年を見た後、

「それって……二人だけの秘密ってこと?」

何故かとても嬉しそうに両手を胸の前で組み、きらきらと少年を見つめ、

「じゃあるんも真名を教えちゃう♪ レスト

四望の花形、風の淪るんは世を渡る仮の名、嵐を司る愛の悪魔リリトがるんの正体なのだ!」

「……………」

「こう見えて超上級なんだぞ、有名なんだぞ、

どーだあ、驚いたかあ♪」

しかしさっぱり、その真名への有り難味など興味無い少年は冷徹に、

「面倒だから、淪でいいか」

それだけ言い捨てると、バンダナのおかげで生えた羽と共に、回廊の中空へと飛び立って

いたのだった。

下の階層に行けば行く程に、強い力の主の存在が増えていく事を、中空を降下しながら感じていたバンダナの少年の傍らで、

—そんなまさか、ルンがあのリリト様なんて！
オレ超恐れ多い事した、でも今からでもまた相手してもらいてえー！—

「……レンの本命は、^{りん}霖だったんだろ」

先程の相手の真名に、身悶えしているらしい羽飾りに、冷たい声色の少年だった。

—だってキラ師匠、リリトと言えば悪魔でも超有名なイイ女の悪魔っスよ！ その適性がルンにあるとは、オレもつと鍛えてもらえば良かったっスー！—

何事も経験っス！ と羽飾りは胸を張る。

「あいつが休暇中なら……霖も休暇中かな」
そんな羽飾りの事で、どちらかと言えどもう一人いる方の花形に会うべきかと思っていた少年は、しかしこの魔界にいる以上、それは無理だとあっさりその思いを振り払う。

降下する少年が最初にぶつかった地点は、どうやら地下の階層と地上を仕切る、一階のロビーであるようだった。

「……ここは、この城の西側になるのか」

広い方形の空間に、落ち着いた荘厳な敷物と、ランプが取り付けられたいくつもの太い柱が、客人棟のある側の城を支える土台らしく、

—まー大体、中央はこの城の関係者の空間で、東側はまた何か違う用途があるんスカねえ。もつと大きい城なら、北と南も別棟を建てて誰かを配置してると思っつスー

世界を旅する一座の護衛として、ある程度は様々な知識を持っていた元妖精は、少年にも惜しみなく情報を伝える。

—地下はその城の悪魔が支配する軍団の長が寄り集まって、滞在する場所だと聞いた事があるっス。そんな奴らに全く用事はないので、寄り付かない方が懸命っスね—

「……城主は大体、何処にいるのかな」
自身でも相手を探しながら、少年は尋ねる。

—謁見者があると最初みたく謁見の間っスが、普段は本当その悪魔によるっスよ。ばりばり政治をやる奴なら執務室でしょーし、惨劇が好みなら人間に関わるかもだし、人間に召喚される場合もありますしね—

「あんな奴……人間が使役出来るのか？」

—普通は無理っスけどねえ。エルりんが使う悪魔も無名の低級な奴らが多いっスし。ただ、エルりんが前に宿つてた人間、ディアルスの王子みたく非凡な血統だった場合は、かなり上級な悪魔を首根っこ掴んじやうとか、凄い事態もあるみたいっス—

「……」

西棟から中央の棟に続く連絡通路に入った少年は、紅い空と中庭を見回し、

「それじゃ、エルがあいつの契約者になれば……という方法も、なくはないのか」

全く期待していない声色の少年に、羽飾りはただ、そっつスねと気楽な声で反応していた。

悪魔を操る人形使い。

少年の妹の非凡な特技は、少年と似ている現状把握の直観と、悪魔と契約を可能とする人間の血を以って成立する妙技だった。

—母さんの事、お願いするね、兄さん—

剣になった少年と似て、ある媒介に靈魂を囚われていた妹は、それを手に入れた悪魔の元で魂のみを媒介の一部の黒い珠玉に遷され、しかし媒介の特性か、悪魔の数奇な力か、霊と魂を引き離されて逆に自我が戻った妹は、悪魔に見込まれ、攫われた大国の王子という人間の依り代を与えられた後で、悪魔契約に特化した魔道を教えられていたという。

—わたしは……兄さんに会いたかったよ—

そして妹は、兄という存在を求め、悪魔に利用されながら悪魔を利用していたのだった。

今も妹の魂はその黒い珠玉の内で、動かす体は瑠璃色の髪の毛の少女の軀を使う状態であり、少女本来の姿——過去に少女が死した六歳に戻った軀で、少年の妹は新しい生を受け。

魂の宿る珠玉が無事であれば、普通の人間として生活出来る身になっていたが。

広く高い天井の、柱だけが無数にある階を、城主を探して歩き回りながら少年は呟く。

「……無駄に広いな、ここの城は」

既にかなり、そこには疲労の気配があった。

「エルみたく出来れば、体は疲れないのにな」

—アレ、便利っスよね—。珠入り猫ちゃんの

ぬいぐるみ誰かが持ち歩くだけで、外の情報

エルりんは入手出来すもんね—

少年の場合、この軀を動かす魂が宿る剣を遠くに手放せば軀は息絶え、相性が良い者が剣を持たないと思惑や記憶も出来なかった。

—まあエルりんもぬいぐるみの珠手放すと、軀は最低限の事しか出来ないぽいっスけど。その辺大変っスよね—、師匠達も—

「……仕方ないな。俺もエルも、本当はもう死んでるんだから」

少年は自身もその妹も、『死者の一族』の亜種だと考えている。それは既に死した者の靈魂が、縁のある媒介に宿り媒介を持つ軀を動かす、異端の化け物の総称だったが。

しかし羽飾りは、意外な事を口にした。

—え—。エルりんはそうかもしれないっスよ、

師匠は違っスよ？—

「……え？」

—エルりんも魂が分かれてなければ、本当に普通に生きた人間になれるっスよ？—

その詳細を尋ねる前に、突然少年の周囲を、城の衛兵と見れる者達を取り囲んでいた。

初日から気ままにうろつく異邦者が目に障ったのか。衛兵に捕まった少年はすぐにも、城主の下へと引つ立てられていた。

「あらら。まだあたしに用があったの？」

「……俺はあんたの観察役だろ？ あんたの動向が見える範囲に置いてもらわなきゃ困る」しれっと不敵な笑顔で言うバンダナの少年は、羽飾りが密かに驚く程の人格の変貌ぶりを、その城主にも見せつける。

「あんたとは違って、寝床でダラダラしてる趣味はないんだよ。俺を近くにおくと、何か都合の悪い事でもあるのか？」

不敵ながらもあくまで人懐っこい笑顔で言う少年に、城主は考え込む様子を見せる。

ここの城主はどうやら、謁見の間の玉座がお気に入り場所らしく、広い玉石の座上で威厳の欠片もなく片膝を抱えて座り、首には薄い琥珀色の仔狐を巻いていた。

「その狐はいつも、あんたの傍にいるのか？」

「狐魄ちゃん？ いいえ、こうやって客人を応対する時、あたしのアクセサリーにするの。

ついでに飼い主が見つかれば一石二鳥だし」

城主はくすりと、不服そうに息をつく少年に妖しく笑いかける。

「あたしは忙しいのよ。君や狐魄に、ずっと構ってあげる余裕はないの」

「なら狐魄を解放しろ。そいつには主なんて必要ないだろ」

「あら、ひどい。狐魄に死ねと君は言うの？」

「還るべき所に還らせろ。あんたの我が俣で無理にそいつを留めるな」

淡々とした少年と城主の遣り取りを、城主の隣——玉座の肘かけに停まった大きな鳥が、興味深げに見守っていた。

城主はともすれば白を切るように、端整な微笑みを浮かべて仔狐を撫でる。

「君は随分、狐魄が気に入らないのねえ」

「……………」

「君と同じく、ここで狐魄が異物であるのはあたしも認めるわ。でもね、狐魄なんてまだ可愛い方よ？ この城には現在どれだけ、ネズミが潜り込んでいるか知らない」

そして城主は——彼女が必要とされている事情をそこで語り出した。

「長くアスタロトが不在であった間に、城はすっかり衰退してしまった。更には十五年前、ルシフェル——魔王一派の酷い道楽で魔界は壊滅的打撃を受け、まさに動乱期の幕開けとあったところ……。魔界の秩序が乱れれば、わざわざ人界に干渉する悪戯悪魔が増えて、三界の均衡が根底から崩れる事態にも、現存なりかかっているの」

少年が元いた宝界とこの魔界。更に少年は全く知らない地界という世界は個々の独立が危ぶまれていると言い……。それは少年にも、無関係ではないと城主は微笑みを消す。

「狐魄という存在は、君が思っている通り、あつてはいけない夢の続きよ」

「……」

「どうしてそんなことが、起こったと思う？
もしも……悪魔が人界に干渉せず、神なんて
傍迷惑な輩がヒトに関わらなければ、ヒトは
運命通りに生きて——そして死ぬのに」

その少女が自らを呪われた者と感じ、己を
苛み続ける事になったのは——
ヒトとして生きる輪から外れてしまった、
それ自体の重さであると城主は言うように。

「魔界から零れた悪魔が、人界に関わる事で
……運命を変えられた者は、古くからとても
多く存在するわ」

いつの間にか城主は両腕を肘かけに置き、
膝を組んで女王たる風格と共に玉座に在った。
「どれだけそれを禁忌とし、各界の御使いが
管理しようと、狂った歯車は回り続ける」

「各界の……御使い？」

「大概の悪魔達は、特に召喚されなければ、
大人しく魔界に引きこもってる。天の御使い
……この場合は天使ね、それが監察を続ける
人界の方が、余程悪魔には危険だから」

しかし動乱期においてはその限りではないと、
自身を天使だと名乗った悪魔は続ける。
「あたしはね、雲英君……せめて、この身に
具現する悪魔が治める、魔界の西方の秩序を
取り戻す義務があるの」

「……」

「そうでなければ狐魄のような可哀相なコが、
今後も増える一方になる。狐魄はあたしに、
それを教えてくれる大切な楔なの」

少年はただ、そこで綺麗に微笑んだ悪魔に、
怪訝な赤い目をまっすぐに向ける。

その城主が口にしたことは、決して嘘では
ないと少年にはわかったが、あくまでそれは、
城の者達に向けた表向きの信条に観えた。

「あんたは別に……動乱も悲劇も、嫌いには
見えないけどな」

「……あら？」

「嫌いとか好き——そもそもそういう感情が
あんたには観えない。単に……成り行きで、
そこにいるようにしか俺には思えない」

それ以上口にすれば、相手の周囲を完全に
敵に回すとわかる少年はそこで口を噤む。

「とりあえずこの城を守ることが、あんたの
今の役目で。そのためにネズミを探すことが
必要なら——それは手伝ってやる」

「……ふん？」

「その代わり狐魄も解放しろ。この城には、
あんたの言う異物以外……あんたの配下だけ
存在すればいい」

そうなればたとえ、城主が不在となっても
しばらく城は持ち堪えるだろうと——それが
現時点での、少年の出来る事の答えだった。

その城主——アスタロトと名乗る悪魔には、三つの内なる者が在ると、銀色の髪の少年はその時点でわかっていた。

—わたしは、二人のおか—さんだもの—

少年の知る、穏やかな微笑みがよく似合う青い髪と目の母は、ここでは未だ見える事が出来ておらず、

—ユーオン君には親近感あるけどねえ—
軽い口調で少年と関わり、仔狐をその姿へと導いた誰かが、主な躰の支配者であり。

しかし最も、少年が警戒すべきは、

—私は聖魔アスタロト……天使たる悪魔—
仔狐をここに留めておきながら、その虚ろな魂を少年の糧とせんと勧めた、悪魔を名乗る相手だった。

—え？ 師匠ママそんなにも、中には別人な
ヒトだらけなんスカ師匠？—

城主との対面後に客間に戻り、倒れるよう

ベッドに沈んだ少年は、バンダナを取ってもまだ銀色の髪のままであり、

「多分、普段のあいつが悪魔というそいつを抑えてる……でも抑え切れずに、ある程度は好きに泳がせてる感じだ」

—ははあ……見た目全然違いわからないのに、さすがっスねえ、キラ師匠は—

「本当は、悪魔でもないんだ、そいつは……

でもその形にする方が、まだマシなんだ」

最早少年は疲労で目を開ける事も出来ず、枕にうつ伏せに顔押し付けたまま。しかし眠りに落ちて記憶を失う前に羽飾りに情報を伝えんと、声を続ける。

「でも——……へん、でさ……」

—？—

「夢の中でしか会った事ないけど……誰も、母さんに……似てないんだ……」

そこまで言うと、少年の意識は深い闇の中に包まれてしまい——

銀色の髪の少年の内に最後によぎったのは、客間に帰る直前の城主との話だった。

「君がネズミを探してくれると言うなら……きつと、あたしも含めてという事でしようね」

「……」

ざわ、と一瞬、周囲の悪魔達の間にも僅かな動揺が走る。

「余所者の君の提言を信頼するに足る証拠をその時は持つてきなさい？ そして……何か見つけても、君が手を下す必要はない。君はあたしにそれを教えてくれるだけでいい」

城主はそうして、何も殺すなど言うように、少年に改めて釘を刺す。

「君を排除したいネズミも出るでしょうね。でもそれにも決して手を出さないで——そう

約束出来るなら、君を狐魄の仮の主として、狐魄の今後の処遇は相談に乗ってあげる」

もし少年が襲われたとしても、この城の者と戦うなという、それは戒告だった。

一時的な記憶を全て闇に還す、意識の途絶
……夢という忘我の世界が、また少年を襲う。

今や少年には、その通り現在の己を失う、
避けては通れない毎夜の洗礼だった。

—アナタ……誰?—

今の己を失う代わりに、遙かな遠い記憶に
出会う事が増えた闇の中で。それは確かに、
少年が出会った実母の声……古い真実であり。

—お願い。このままだとユオンが危険なの—

その連れ合いに、何故常に悲しそうなのか
問われる程、微笑みを浮かべる事は無い……

それでも強く在った、黒い髪と青い目の実母。

最後まで幼い子供達を守ろうとした、その
実の母を覚えていなかった少年は——しかし
決して、ある心を消さずにここまで残した。

—わたし達のエルフィを……返して!—

少年を連れ合いに預け、少年の妹を助ける
ために戦った母は、しかし思いを遂げる事が
出来ず……思えば少年は、その記憶に触れて、
妹を助けたという強い思いを魂の何処かに
刻まれた状態だった。

—俺……エルを助きたい……!—

そうして長過ぎる時を越えて、何とか妹を
助ける事が出来た少年は……少年も妹も共に、
その直観を以て、記憶の中の母と今の養母が、
似ていなくとも同じ存在と確信していたが。

—君達は……このコの怖さをわかってない—

魔竜と名乗った誰かの、ただ冷たくて鋭い
微笑みが、少年の青い目に再び突き刺さる。

『魔』とは、どんな酷い事をしても望みを

叶える者の末路だとそれは言った。

—このコはどんな形でもラピちゃんをここに
留める事を願ったの—

その声は何故か、温かな現在の母の音が、
不吉な魔の声と共に重なる。

—ラピスと仲良くしていてね、ユオン—

—君が狐魄を——食べてしまえば?—

思えばどうして……遙かに時の流れたこの
時代で、少年がその縁の繋がった養父母に、
こうもすぐに出会う事が出来たのだろうか。

—君の妹が、ラピスの躰をもらって……この
世に戻ってきたようにね—

その上まるで、その養女の存在は——

少年の妹を助けるために用意されていたと、
言わんばかりの都合の良さで。

金色の髪少年が目覚めたのは、それから半日は経った後の事だった。

「……これでも随分、早い方だよな」

「そーっすね、マヤさんのお酒の効果じゃないっすかね？ 師匠やっぱ、金色の時は体力は最近安定してるっすよー」

以前は銀色の髪で多く活動すると、一週間は寝込む事が当たり前だった少年は、たははと苦笑するしかなく。

城主曰く、客間内は城主の面子があるため、ほぼ安全と考えて良いという事だったが、

それは逆に、客間を一步出れば身の保証はしないという宣言であり……それを前提に、少年には城の何処でも好きにうろついて良いという権利が与えられる事になった。

「オレは弱いし、銀に任せるしかないけどさ」

代わりとばかりに、起き抜けから金色の髪少年は酒杯を片手に、片足を下ろして座る

ベッドの上で唯一のエネルギーを補給する。

「いやいや、こういう下積みこそが大事っす師匠。キラ師匠本気で、一口も何もとれない状態ですもんー」

「オレも死にそう。何か鉄の味がこみ上げてくるんだけど」

「あー、そういや吐血してましたっけ師匠。そんな所にアルコールなんて、死ぬ気かって感じっすねハハハハハ」

他人事として笑う羽飾りに、そうなのか。と他人事のように受け止める少年であり。

「何でお酒はOKなんすか？ 師匠ー」
「さあ……効率がいいからじゃないか？」

飲み心地自体は良くないらしく、しかしそれ以外は出来る事がないと厳しい顔だが、

「でも、これ飲んでると……御所を思い出す」
不意にそれは、そんな顔を和らげて口にした言葉だった。

元々、少年に酒を教えたのは、ジパングにいる頃に剣を習っていた師であり、

「マヤもゲンジもヨリヤも、酒を飲むと凄く楽しくなるんだ」

「……なるほど。何かちよつとわかつた気がしまっせ、師匠ー」

目前の相手にすぐ影響される少年には、その彼らの幸せな状態そのものが、心地良かったのかもしれない。

「師匠は多分、大食漢で飯大好きな誰かと、しばらく一緒にいた方がいいっすー」

「……いるのか？ そんな奴」
「全然いるっす！ 妖精は特に多いっすー」

心から不思議そうな少年に、羽飾りはふうと軽く溜め息をつくど、

「生きるために命を食べるなんて当たり前のことなのに。師匠もラピ子ちゃんも、その辺深く考え過ぎっすー」

そうしてさらりと重い事を言う羽飾りだった。

凶らずも羽飾りの勧めは、思わぬ形ですぐ実現される事になった。

「……………」

絶句するバンダナを着けた銀色の髪の少年の前で、城主たる誰か——養母の躰を使う主な支配者は、少年を呼び出した客人用の食堂を、既に一時間は占拠しており。

「君はホントに一口もいらぬのかい？
せっかく躰があるのに、もったいないなあ」

真つ白なテーブルクロスがかかった豪華な食卓上に、やたらと並べられたお菓子の数々……少年と同じように小食だった養母からは考えられない摂取量に、向かいに座る少年は啞然とする事しか出来ず。

「そんなに食べて……アフィの躰は、大丈夫なのか？」

「ふふふーん。実体に宿ったあたしの燃費の悪さは半端ないのだ、絶対太らない」

いや、そういう事じゃなくてと、つつこみの声すら少年は出せない相手の勢いであり。

お菓子のブラックホールと化した城主に、

ひとまず少年は様々なモヤモヤを呑みつつ、

「それで……俺に何の用だ？」

今回は城主から少年を呼んでおり、ようやく本題に入れた少年だった。

「うん、そうそう。気になってたんだけど、

君、何でその顔なの？」

「……へ？」

「あたしの知り合いによく似てるんだけど、
そいつらには男の子はいないし。つてか、
まずそいつらに子供自体いないだけだよ」

バンダナをつけた少年の顔は、遙か昔に、

少年を育ててくれた義母の実子のものだが。

それに見覚えがあるという城主に、少年は

呆然として沈黙する。

しかし考えてみれば、それも無理のない話ではあった。

「……そうだな。あのヒトの上司だって——
あんたは言ってたな」

少年はその義母と瓜二つの、生まれ変わりと
思える程の相手に少し前に会っている。

その相手こそ消えた妹分に命を分けていた
悪魔だと知ったのが、本当に最近で……その
上司として、妹分の魂を代わりに回収したと
主張するのが目の前の城主だと、羽飾りから
同時進行で少年は教えられていた。

二人一役の少年が同一人物であると、この
相手は当たり前に気付いており、他に人目も
無かったので、少年は真実を答える。

「……この顔は多分、あのヒトの遠い前世の
息子と同じだと思う」

「ふーん。あいつにも前世があったのかあ。
てまあ、あたしもあるし当たり前だけどさ」

「——え？」

そこであまりにあつさり、この胡散臭い話を信じるような相手に、少年は半ばバンダナに隠された目を丸くする。

「じゃ、君とあいつの前世はどーい関係？」

「……母さんが死んだ後に、育ててもらった。」

この顔はそのヒトと息子が死んだ時に、俺を隠すためにかげられた術だ」

なるほどねえと。相手が全く疑わずに信じ、

頷いている事は少年にはわかった。

「君の母さんは、早くに死んだんだ？」

「そうらしいけど……俺は覚えてない」

そこで真面目に考え込む相手の姿に。

何故相手が、そうした事を少年に問うのか

……そこには大きな意味があると、それだけ

感じ取った少年に、相手はくすりと笑った。

「それで。あたしからの質問に答えてくれた

ご褒美に、簡単なことなら君からも、何でも

要求してくれちゃっていいぞ？」

簡単なこと。を強調した相手に、少年は、

養父からの言い付けを思い出した。

「……アフィのPHS。使っていないなら俺に

渡してくれ」

「ああ。あつたねえ、そんなもの」

何処やったつけど、いい加減な事を呟きつつ、特に拒否はされていないようであり、

「あんまりよろしくないけど、ま、いいや。

後で部屋に届けさせるから、それでいい？」

こくりと頷いた少年は、そこでフと相手が笑った時に、多少の嫌な予感はしていた。

「あーでも、生き返る。昔のことは覚えて

ないけど、好きな物だけはカラダが覚えてる

のかもねえ」

「……それはアフィの躰だから、違うだろ」

お菓子に囲まれて幸せそうな、今はしっかりと体の主導権を得られているらしい何者か――

本来の養母と悪魔らしき者を抑える相手を、

少年は内心で妖精と呼ぶ事にした。

――つてキラ師匠、どーせ忘れるくせにい――

「……でも、妖精は大食漢なんだろう？」

――多いつてだけでイコールじゃないっス――

少年は何故か、甘いものが好きでノリが軽い

相手は、その呼び方がぴったりと確信してしまふ。羽飾りの多少のツツコミは気にせず、

食堂を後にしたのだが。

その場所を一步出てから、ある変化にすぐ

勘の良い少年は気が付いた。

「……今更だな、監視なんて」

――おお、ついに何かの荒事っスか？――

少年から直接見える場所にはいないものの、

ある大きな鳥が少年を見ていると、その鳥の

視覚情報ごと、少年は感じ取る。

「荒事には――しない方がいいんだろ」

近くに在るものの感覚を、我が事のように

感じる才能は全く健在であり。今の少年に、

迷いというノイズが少ない事を示していた。

この城は三つの区画に分かれ、それぞれが規模だけ違う同じような形の、巨大な教会のような縦長の城で、少年は客人向けの西棟に今もいるのだが、

「どう見ても中央棟の奴なのに」

―あれっすかね。キラ師匠に師匠ママが懐柔されないか、心配なんですよーかねー

中央にはこの城に元から住まう者が、東には関係する有力者が、西には客人が置かれると少年は聞いており。客人の事情によって西に部屋はあるが東にも別室を与えられ、城主に助力する悪魔もいるという事だった。

少年は大きな鳥の視線に気付きながらも、特に対応はせず、自室に帰るために階段を昇っていく。

昨日の今日でまだかなり疲労は残っており、本格的に動くのは、PHSを入手してからにしようかと決めていた。

中空の建物の中心を突き抜ける、芯となる構造物の四角い柱を取り巻くような階段を、螺旋の形で地道に上がっている少年は、その長さに軽く息をつく。

「弱い奴程、上の階に置かれるらしいけど」

―そりゃ何とも、親切か不親切かわからない設定っすねえー

階段を上がる疲労だけでも少年の面持ちは苦く、バンダナを着けた時に現れる羽でも、飛ぶにはかなりの力を要するようだった。

―こーいう時、自分の代わりにお使いに出てくれる使い魔がいると、凄く便利なんすけど。

キラ師匠は勿論、そんなの持つ気はさらさらないつすよね？―

「レンがいるだけで充分だろ」

―くうわ!!! 嬉しい事言ってくれますけどキラ師匠、オレ師匠から離れられないんで、使い魔としては全然失格っすー!

だからとばかりに、羽飾りは少々の苦言を、そこで提案する。

―ラピ狐ちゃんに使い魔になってもらえば、色んな問題解決しまっせ? キラ師匠―

「問題外。俺の代わりにあいつを危険な所に使いに出すなんて、まず有り得ない」

―そりゃそーですね、確かにね。でも……解決するのはそれだけではないと、少年が

あえて目を背けている問題を、羽飾りは一応提示しておこうとしたのだが――

「おお。もしかや使い魔をお探しで? 旦那」

ぴたりと、少年の足が階段の途中で止まり。

その先の踊り場で、突然炎が燃え上がり、そこから現れた何者かが少年達を見下ろし。

少年も羽飾りも、瞬時に警戒態勢に入り。

そこに現れたのは、鳥の羽飾りの付く腰に細い剣を下げる……見た事もない悪魔だった。

*

その男を一目見て。銀色の髪でバンダナを

着ける黒い羽の少年は――

「……………え」

何故か、あからさまに不快げな顔をして、それを隠しめせずに男を見上げた。

若造と中年の間といった貴賓の恰好の男は、はて？ と首を傾げ。どちらかと言えば少しいかつい風貌、前髪が無く、短い褐色の鳥頭の、喰えない顔付きでにやりとしつつ、楽しげに少年を見下ろした。

「この城じゃ初めて見る顔だな、旦那」

「……………」

「おれ様ちょうど、退屈してた所なんだが。その耳飾り、言語翻訳機と見たが、おれ様を通訳に雇えばそれも不要になるぜ。お互い、アウェイでの客人同士、協力し合わないか？」

どう見ても少年より見た目は年上であるが、少年を旦那呼ばわりする男に、少年は未だに露骨な不快視線を向ける。

少年はただ、現在少年を占める素直な思いだけをはつきりと口にした。

「俺……多分、アンタのこと嫌いだ」

「ふ！？ 初対面から言ってくれるね、旦那」

男は逆に楽しげに、両腕を組んで首を傾げる。

「いきなり喧嘩を売られる理由、参考までに少し聞かせちゃくれないか？」

「わからない。アンタの存在がとにかく気に食わない」

「こりや何とまた。論破しようにも、完全に

生理的嫌悪感って奴かねえ」

「あちゃー……キラ師匠、フィーリング重視

なのは知ってましたけど。何となく強そうな悪魔さん、あんまり喧嘩売らない方が……」

その羽飾りのツツコミは、本来少年以外に聴こえるはずはないのだが、

「そうかそうか。オマエの主はフィーリング重視なのか」

「！？」

「お？――」

羽飾りの声ならぬ言葉を、その男はどうやら聞き取れるようだった。

「おれ様はそれが言葉としての意味を持てば、水の音だろうと翻訳出来る悪魔なのさ。何か珍しい招魂連れてるみたいだけど、それでも相当、貧相なパーティだよな？」

「……………」

男の言う通り、魔界にあつては貧弱に過ぎる少年は、黙って不快そうに男を見上げる。

「なるほど。キラ師匠、オレ、この悪魔の真名わかった気がするっす――」

その声も聞き取つてか、男は特に正体を隠す必要を感じなかったらしく、

「おれ様は『カイク』。これでも長官だがね」ある有力な悪魔の適性を、そこで告げた。

しかし少年の反応は、あくまでつれなく、

「アンタが誰でも、俺はアンタとは組まない」
嫌悪感というよりは、純粹に毛嫌いといった
子供っぽい嫌がり方で少年は男に言い放ち、
「……珍しいっスね？ キラ師匠――

それには流石に羽飾りも、少し不思議そうな
様相となった。

「冷たいなあ、旦那。話くらい聞いてくれて
いいんじゃないか？」

「何にせよ、そもそも俺は協力出来るような
事なんてない。アンタの利益になる事なんて
何もない」

少年を貧弱と見切っている男に、当たり前の
結論を少年は告げるが、

「おれ様はただ、ここの城主の情報がほしい
だけさ」

「……？」

「旦那、城主と大分仲良さそうじゃないか。
どんな関係だって既に噂になってるぜ」
「……………」

ひとまず養子でも親子関係は明かしていない
少年に、男はにやりと笑い続ける。

「……そんなの、アンタ達悪魔ならすぐに、
俺とあいつの関係くらいわかるだろ」

「それがな、そもそもまずあのアスタロトが、
何処から現れたのかもわかってないんだよ。

フルーレティと縁戚にあるというが、それも
当人達が言ってるだけだしな。けれど確実に

死竜はあいつをアスタロトと認め、あいつも
見事に死竜を使役してるのは確かだし」

「……死竜？」
初発の重要そうな単語に、少年は少しだけ

毛嫌い顔を解き、男を見返した。
「知らないのか？ アスタロトが使役する、

次元移動すら可能な乗り物竜の通称だろう。
こういう基本事項も知らない、概念勝負の

魔界じゃ生き残れないぜ、旦那」
「……」

「死竜はアスタロトにしか従わない。旦那も
うかつに近寄るなよ、食われるぞ」

段々と少年は、不審な顔で男を見るように
なっていた。

「アンタは……俺にそんな助言をして、何が
目当てなんだ？」

「さてさて。旦那を利用したいのは確かだが、
それはお互い、利益になる事だと思っがね」

少年とて、男にも何か都合が良い事があり、
こうして話しかけてきているのはわかるが。

その詳細まですぐ把握するのは難しく、今、
とにかくはつきりとしているのは、

「……でも俺、アンタの事は嫌いだ」
――結局そこっスか、キラ師匠……――

あくまでまた毛嫌い顔に戻った少年に、男も
それは一番想定外のようなだった。

ふむと男は、困ったような声で表情を消し。
「感情論という奴は本当に厄介だ。どうして

そこまで嫌われるのか、不覚ながらさっぱり
わからん」

とても真つ当に、男は首を強く傾げる。

男は一見は、気安さも持つが、本質的には理屈っぽく面倒な相手だと、少年は初めから見切っていた。

「……もういいだろ。そこをどけ」

行く手に立ち塞がった男は、しかし少年をただで通す気はないようであり、

「そうなるとやはり、おれ様からも感情論で攻めるしかないのか。ヤイ旦那、言うことをきかないとおれ様怒るぞ、拗ねちゃうぞ」

「……………」

全くもって、感情を害したようには見えない笑顔の男に、少年はげんなり息をついた。

「怒って拗ねたら……何になるんだ？」

「それは当然、戦闘なんじゃないか？」

男はそこで、腰元の剣に片手をかけ、

「旦那も腕利きの剣士と見た。おれ様と戦い、負けた方が言う事をきく、それでどうだ？」

「……………」

それはわりと真つ当な決闘申し込みだったが。

「断る。騒ぎは起こしたくない」

「ちよつと旦那、仮にも少年剣士キヤラが、ここでそれは言っちゃ駄目だろ」

「何とでも言え。俺は戦闘も協力も、誰ともする気はない」

あくまで頑なな少年に、男はやれやれと、大げさに溜め息をついた。

「全く、ここまでおれ様が譲歩してるのに、本当に仕方ない奴だな旦那。言っておくが、おれ様は力づくで旦那を拉致する事だつて、やろうと思えば十分可能なんだぜ？」

「……………」

「身内の無礼はともかく、客同士の揉め事は、城主は原則不干渉だ。この城に旦那を守ってくれる奴は、誰一人としていないんだぜ」

そこまで聞くと、少年はなるほどと、男が少年の前に現れた真意の一端を悟った。

「アンタ……俺を城主に近付けたくないのか」
わざわざ協力を申し出た男の、実際の所を。

……と男は、そこで本当に笑顔が消すと、言葉を続ける少年を黙って見守る。

「客人のアンタに俺を排除させれば、この奴らも誰も咎められない。アスタロトを敵視してるように言うけど、アンタ……本当は、あいつの知り合いなんじゃないのか」

「……………」

少年にわかったのは、城主に対して敵意は無い、漠然とした男の胸中だけだが、

「あいつをアスタロトにしておきたいんだろ。だから、今のあいつの心境や、俺との関係が気になつてる……違つか？」

その城主をあえて敵視し、少年に警告をして協力を提案した男の狙いは、それくらいしか現在は把握出来なかった。

男はしばらく、無言で無表情だったが。

「何とまあ。正直……」

やがて楽しげに、すらりと剣を抜いて言った。
「お見逸れいっただぜ、旦那」

「……………」

「あーあ。だから言わんこつちやないっスー
それでも剣を抜かない少年に、男は自身の
剣の切っ先を突きつける。

「旦那よお、おれ様は基本的に交渉人でね。
正直こつちで話はつけないんだが、まだ
全く聴く耳は持たないか？」

「……………」

「おれ様も本格的には、フルーレティを敵に
回したくないんでね。命までは獲らないが、
多少の手荒さは我慢してもらおう事になるぜ」

少年としては、現体力で生粋の悪魔に対し、
殺さずに勝つのは無理だと、初めから勝敗を
悟つての不戦でもあり。

「……………アンタは何で、俺を警戒するんだ？」

「お？」

「俺がアスタロトに何か出来ると思うのか？
あいつは俺の……………全く知らない誰かなのに」
期せずして、状況はそこで交渉に戻っていた。

城主の知り合いらしい男に少年は尋ねる。

「アンタの方が、むしろあいつの考えてる事、
俺よりよく知ってるんじゃないのか」

少年はただ、話を続けながら、思いを遥か
昔の親友に巡らせる。

こういう時に、このバンダナの持ち主なら、
いったいどう対応しただろうと。

「それがな、旦那。当初はそうだったんだが、
最近あいつの意志が弱ってる感じなんだよ」

「……………」

「代わりにおれ様の知らない、やばげな奴が
現れ出してる。それは少々、都合が悪くてな」

おそらく男は、少年が妖精と呼ぶ事にした、

本来主導権を握る者の弱体化を懸念しており、

少なくとも、三つの内なる誰かが存在する
あの城主を、その全てを理解出来ている者は
いないものと見て良さそうだった。

とりあえず、男が危険視する城主は少年も

警戒していた自称悪魔の事だろうと、それが
わかっても少年の男への嫌悪はなくなるならぬ。

「……………アンタの言いたい事はわかった」

「——お？」

男は期待するような目付きで少年を見たが、
しかし少年の結論は変わっておらず、

「それでも俺は、アンタとは組みたくない。
俺にも何でかはわからないから、どうしたら
お互い納得がいくかアンタが考えてくれ」

「……………お？」

あまりにしれつと、わけがわからない上に、
凶々しい要求を言い出した少年に、男は一瞬
哑然としていた。

「アンタ、頭いいんだろ。嫌い同士のままで

上手く動かす方法くらい、思いつくだろ」

こういう時、変に駆け引きをしても仕方ない。
バンダナの主は、与えられた環境に便乗する
事に長けた人懐っこい少年だった。

男はしばらく、苦味も混じった顔で少年を見上げていたのだが。

「……なるほど。ここで引き下がっちゃうと、カイムの名折れだな、全く」

「？」

「やい少年。今しばし時間をもらうが、先の言葉はゆめ忘れるな。面白い話だ、しっかり考えてやろうじゃねーか」

そこまで言うと、現れた時のように突然炎の塊が揺らめいて生じ、男の姿はその炎の中に消えていったのだった。

「……」

再び階段を上がり始めた少年に、羽飾りが楽しげに話しかける。

「師匠、やるじゃないっすか。あのカイムに謎かけ勝負を持ちかけるなんて――」

「？」

「カイムって悪魔は、討論大好き野郎なんす。内容は普通、もっと高尚でしょーけどね――」

「俺は別に……アイツと言ひ合いをする気はなかったけど」

「っすすよねー！ お札とか銃とか短刀とか、他力本願なのが師匠達の味っスしねー！」

この流れもその延長だと、他者が力を込めた物の力を増幅し流用出来る特技を持っている少年に、羽飾りは納得げにする。

「師匠のわけわからんキライ反応、あっちに解決させよーなんて、本当にイイ度胸っスーそれは羽飾りには、あくまで褒め言葉であるようだった。

「札も残り少ないし、なるべく戦うなって、とにかく方々から言われてるし」

ジパングの花の御所にいた頃、術師である家系の者達が少年に書いてくれた様々な力の護符や、上級悪魔の女性からもらった銃など、悪魔に対抗出来る道具を、少年は持つには持っているのだ。

しかし戦闘を避けるという方針は、少年も納得している様子でもあった。

「オレはやっぱり、さつきみたく言われたら」

「剣で戦いたくなっちゃうっスけどねえ――」

「……それは、レンが強いからだろ」

「いやいや。そーいう事じゃなくて、バカなプライドの問題っスよ。でも師匠は、自分のためだけなら戦う理由はないんすね――」

今の少年は、戦えばただ消耗し、己の首を締める状態である事も大きいが。

少年にとってそれは、そうなれば望まれた仕事が出来ないと、あくまで一番の目的を見失うことは早々なかった。

……そこにその目的と同じくらい大切な、想定外の要素が割り込む事がなければ。

「……………え？」

居室に戻った少年を待ち受けていた人影に、改めて銀色の髪の少年は絶句するしかなく。

—あらら。ラピ狐ちゃんてはどうしたの？—
羽飾りが無責任に面白げにする前、少年の
ベッドに座り、その白い髪で紅い目の狐耳の
少女は、少年を待っていたようだった。

「……………」
少年はただ難しい顔付きで、無表情に少年を
見上げる白い少女を見返す。

座り込む少女の手には、ある小さな道具が
大切そうに握られており。

少女をこの部屋によこしたのが誰なのか、
否応なく少年はそこから悟る。

「…………そりゃ、PHSをよこせと言ったけど」
—成る程。ラピ狐ちゃんが師匠ママのPHS、
持ってきてくれたってわけっすか—
後で届けさせると言った城主…………妖精のあの
笑顔の理由に、少年は今更苦い顔をする。

「……………」

少年をじつと見上げる白い少女の紅い目は、
何一つ感情を浮かべる事はなく—

部屋に帰れば、すぐにも横になりたかった
疲労の強い少年は、その目から視線を逸らす
気力が戻らず。まるで魅了されたかのように
立ち尽くす自身に気が付いていた。

「……………」

今するべき事は、簡単であるのに。

少女からPHSを奪い、部屋から追い出し、
消耗した体力をとにかく休んで補う。

それがわかっていながら、少女に向けて、
伸ばしかけた手は上がらず—

「……………」

本来少年は、部屋に戻った時にバンダナを
外し、金色の髪に戻って少しでも力の消耗を
抑えるつもりだった。

しかし現在は、新たに少年を監視し始めた
大きな鳥の視線を感じ、二人一役である事を
簡単に明かすわけにもいかず。

そのため、金色の髪の少年に、銀色の髪の
少年が持て余す心の処理を投げる事も出来ず。

—師匠。あんまり意地張ってないで、素直に
なつてしまえばどーっすか？—

「…………え？」

ずっと苦い顔で歯を噛みしめるような少年に、
羽飾りがまるで、諭すような口調となる。

—ラピ狐ちゃんに、触れたいんでしょ？—

「……………」

金色の髪の時には躊躇わずに、目の白い
少女を抱き締めていた少年の—

救いを求めるその声を、しかし銀色の髪の
少年は、汲み上げる事を拒むだけで。

「…………俺は……………いらない、から」

少女が動かないならと、自室を後にした、
倒れる寸前のふらふらな少年だった。

少年に与えられた部屋に居座る少女のため、逆に少女の居室——最上階へ避難しようかと思った少年だったが。

階段までつくくと、最早これを上がる気力はないと、そこで座り込んでしまった。

「あれえ？ 何だか死にそうな気配だけど、どーしたのオ、雲英ちゃん」

その階段から遠い南の、同じ階に居室のある幼げな悪魔……羽飾りが元いた旅芸人一座の休暇中の花形が、両膝に腕と頭を乗せて俯く少年に、わざわざ出て来て声をかける。

「お部屋に戻らないの？ 嫌な虫か何かでも出たあ？」

「……………」
何も思えずに俯く少年を、花形はしばらく面白そうに覗き込んだ後で、

「それなら、るんの部屋に連れ込んでやうぞ」
見た目より怪力に、強引に少年を抱え上げた。

「!?!」

少年は抵抗する力もないままに、あつさりと花形の部屋へ運ばれ、ぼーんと軽い音がたつ勢いで、少年の居室のものより豪華な寝台へ投げ込まれていた。

「使つていーよお。ここには怖い虫さんは、誰も来ないからねえ」

花形はそう言うのと樂しげに、自身も柔らかな場所へ軽やかになだれ込む。

—おお、さすがはリリト様、超積極的い！—
何やら羽飾りははしゃいでいるが、少年には既に、少年を押し倒すように抱き着いてきた花形の体温を感じる余力もなく、

「……………悪い」

バンドナを外さないままに、気絶するようにそこで眠りについた少年だった。

ありゃあ。と花形は、意識を失った少年を残念そうに寝顔を覗き込む。

「ガードが緩いんだか硬いんだか……でも、今ちよつかい出すとホントに死んじやいそーだなあ」

その命のあまりの拙さに、眠る少年の額をバンドナごしにつつきつつ、自称ハンターはくすりと微笑む。

「いーよお、今は休ませてあげるから。でも、目が覚めてからは見てろー」

少年の消耗が、純粹に体力だけの問題ではない事を、幼げな花形は知る由もなく。

「リリトちゃんを受け入れてくれれば、一杯お役に立てるのになあ？」

それでもあくまで、気に入った相手の力になりたい想いは純粹である花形だからこそ、少年は警戒せずに眠りにつく事が出来ており……ぴくりとも動かずに眠る少年を、まるで聖母のように見守る、幼げな花形だった。

その後少年が、バンダナをした銀色の髪の毛で目覚めたのは、一日以上たつてからの事だった。

「……??」

眠りという忘我を経て、何故自身が見知らぬ部屋にいるのか見事に少年は忘れ去り。

さすがに少年をずっとは見守れない花形が、たまたま不在の時に少年は目覚めていた。

「……ここ、何処だ？」

—やばいっス師匠！ 体調とか色んな意味でやばいっスから腹を括りましょう！—
待ちくたびれたかのような羽飾りから、妙にわくわくとした声色が響く。

「レン……今、ここ、何？」

現在少年がいる場所は、そもそも最初に、少年が連れ込まれた同じ階の部屋とも違い、城のかなり下層階である事に少年はまず気が付く。

「あれ？ 間が悪いなあ、今起きちゃったの雲英ちゃんてば？」

部屋全体が薄暗く、少年が寝かされていた天蓋付きの広いベッドの周囲だけが明るく、枕元には何やら香り高い花びらが散らされた真つ白な寝床で。

まだ良く動かない上半身を起こそうとした少年を、暗いドアから戻ってきた者がすぐに、飛びつくように押し倒していた。

「——？」

わけが全くわからない少年は、キョトンと大きな枕に背を預け、首にしがみつく相手を不思議そうに横目で見つめる。

「おはよー、気分はどうかなあ？ まだまだ元気なさそうだけどー」

「……何で、あんたがここにいるんだ？」

その顔見知り——幼げな花形の手を解く事も難しい程、まだ少年の回復は拙く、

—ここはレンのお仕事場みたいな感じっス。師匠が眠りこけてる間に運ばれたっスよー羽飾りの声は花形には全く聞こえていないが、奇しくもその後を花形が上手く続ける。

「ここなら誰も邪魔は入らないよオ♪ 何せアっちゃんが用意してくれたお部屋だもん」
「……??」

すりすり心から嬉しげに頬をよせる花形は、最早言葉は不要とばかり、有無を言わず、少年の懐に手をかけようとして——

とりあえずその部屋に監視の目がない事はわかった少年は、一番重要な事として、まず……黒いバンダナをあつさり外す。

「あれ。——紫雨ちゃんになっちゃった？」
え！ と花形は不服気に体を起こし、金色の髪に戻った少年を真上から覗き込んだが。

「ありがとう。この方が楽だから、助かる」
少年は至って自然に、変貌を解ける場所の提供について、さらりと礼を口にした。

花形はひたすら、えー！と少年の間近で不満げな顔を見せる。

「使役者ってそーいうコト！？ 紫雨ちゃんてば一人三役なのオ！？」

「……他の奴には、黙っててくれ」

淡々と答える金色の髪の少年を枕に押しつけ、むむむと唇を噛み締める花形に、少年はただ目を丸くする。

「ヒドイ、雲英ちゃん絶対落とせそうだったのに……紫雨ちゃんになるなんて反則だあ。こう見えても、るんは一途なんだぞ！」

どうやらこの花形は、金色の髪の少年より銀色の髪の少年が良いらしく、越えられない壁がそこにはあるようだった。

相変わらず状況をわかっていない少年は、しかしようやく、花形が派手にがつくりしている空気は肌で感じ取ったようであり、

「……ごめん。銀でいるのは、大変なんだ」

そんな間が抜けた答えを繰り返すしかなく。

そこでそれこそ我が意とばかりに、花形は更に少年と距離を詰める。

「だからるんが、雲英ちゃん元気にしようと思ったのにいー！ 愛の悪魔リトちゃんの本領発揮なのに！」

「……出て来ないから、銀は別にいいって、言ってると思う」

さすがにこの距離まで近付かれると、事態を悟り始めたのか、無表情でも僅かに赤い顔ではつきりと答えた少年だった。

もう。と花形は、少年を解放してベッドの端に座り直すと、上体を起こした金色の髪の少年を恨めしそうに見つめた。

「雲英ちゃんも冷たいけどオ、紫雨ちゃんも大概だぞ！ リトちゃんに全くよろめいてくれないなんてー」

「……ごめん。オレにはよくわからない」

何となく謝った少年に、しかし花形は、

「まあいーけどね。紫雨ちゃんの小鳥ちゃんみたいな子、タイプなのは知ってたし」

その花形が少し前にジパングで出会っていた、小鳥と呼ぶ少女……花の御所で少年が世話になった剣の師の娘を持ち出した花形に、へ。と少年は花形をまじまじと見る。

「カラスや小鳥ちゃんみたく品のある感じ、るんにはないもんなあ。さすがに理想高過ぎだと思っぞ、紫雨ちゃん」

「ツグミが……オレの何？」

「とぼけてもダメだよ。誰がどう見ても、

紫雨ちゃんの小鳥ちゃん狙いだねって、霖もみんなも温かく見守ってたんだから」

「……??？」

あくまで首を傾げる少年に、花形はそこで改めて宣戦布告を行っていた。

「次は待ったなしで雲英ちゃん落とすから！」

そこには多少の、少年がジパングに帰る前に、という響きが新たに混じるように。

花形から無事解放されたは良かったものの、居室に戻るためには、またしても上の上まで階段を昇らなくてはいけない状況に、少年は大きく溜め息をついた。

「あーあー、だから言わんこっちゃないっす。せめて体力だけでも、ルンからおすそ分けてもらえば良かったっすー」

階段にぺたんと座り込む少年に、羽飾りは容赦なくツツコミを入れる。

「師匠、ホントに男っすか？ 可愛い女子にあそこまでされて食指が動かないって、オレ本気で心配になるっすよ？」

「そんな余裕あれば、苦労しないだろ……」
「余裕は何処ぞから奪って作るものっすよ。ルンは少なくともその辺、与えるのが得意なお人好しの、好都合な相手なのにく〜」
「……レンがそう思うなら、他にも同じ事、考えてる奴がいたのかもな」

「？」

その花形の別室を、わざわざ直々に用意したという城主を思い浮かべつつ、少年は暗めな顔を膝の間に埋める。

「ラピスといいあいつといい……とにかく、オレに奪えって言ってるみたいだ」

そもそも少年が自室にいられず、あの花形に拾われる事になった理由を、羽飾りから先程改めて聞かされていた少年は、その共通性に思い至らざるを得ず。

「でもオレは……これ以上、いらないから」
そして銀色の髪の少年と同じ答えを無表情に呟く、動く事すら精一杯の少年に。

羽飾りが全くと、嘆息したその時に――
「それなら……アナタの不秩序を全て、あるべき所へと還しなさい」

ぐにやりと……少年が座り込む無味乾燥な階段の風景が、揺れる水面に映るように歪み。

「――!？」

驚いて顔を上げた少年の周囲が、唐突に薄い暗がりにも包まれ。

今いる階段という場所は変わらないものの、明らかにこれまでと異質となった場の空気に、強い警戒心で立ち上がった金色の髪の少年を……階段の上から見下ろす、その黒い少女は、無慈悲に呟いた。

「選んでもらうわ。あたしの言う事をきくか、それとも……ここで時の闇へと還るか」
「……え？」

そこにいたのは、紛れも無く――
鎖骨までのまつすぐな黒い髪と深い黒の目、ひらりと短い黒い下衣を揺らした、全体的に黒のシルエットを纏う端麗な少女で。

フルーレティを冠する悪魔の女性の居城で出会った、あの涼やかな黒い鳥だった。

金色の髪の少年よりも先に、まず羽飾りが驚きの声を上げる。

「……え……？」
「……え……？」
「……え……？」

「……え……？」
「……え……？」
「……え……？」

「……え……？」
「……え……？」
「……え……？」

「……え……？」
「……え……？」
「……え……？」

「……え……？」
「……え……？」
「……え……？」

「……え……？」
「……え……？」
「……え……？」

「……え……？」
「……え……？」
「……え……？」

「……え……？」
「……え……？」
「……え……？」

「……え……？」
「……え……？」
「……え……？」

「……え……？」
「……え……？」
「……え……？」

「……え……？」
「……え……？」
「……え……？」

「……え……？」
「……え……？」
「……え……？」

「……え……？」
「……え……？」
「……え……？」

「……え……？」
「……え……？」
「……え……？」

「……え……？」
「……え……？」
「……え……？」

「……え……？」
「……え……？」
「……え……？」

「……え……？」
「……え……？」
「……え……？」

「……え……？」
「……え……？」
「……え……？」

ぐつと少年は言葉にならない声を呑みつつ、
数段先で立ち止まった黒い少女を、まっすぐ
見上げる。

「それが——今のあなたの仕事なのか？」

「……ええ。闇に融け、闇を暴く神火の鳥を
宿す使徒、そんな風と呼ばれているわね」

その実態も少年には全くわからないものの、
少女の名前が『鴉夜』である理由は、そこで
何となく納得した少年だった。

おそらくは世界中の黒い鳥の目を通して、
少女曰く、不秩序の発生源へ赴く使徒は……
だからこそ、以前に一度己を手放した『剣』
である少年を、すかさず保護する事が出来た
ということも。

「……………」
使わない時は腕に巻いてある黒いバンダナを、
苦い眼差しで少年は見つめる。

「……あなたに……羽を返すのは、別にいい」
「——？」

俯きながら拙い声を振り絞る少年に、少女は
厳しい視線を向ける。

「でもこのバンダナごと、渡す事は出来ない。

これは大事な……多分、約束なんだ」

そのバンダナが持つ意味を、本当の所は、
金色の髪の少年は知らない。

銀色の髪の少年にそれを手放せというのが、
どれ程酷なことであるか——たとえそれが、
少年と古の縁を持つらしき黒い鳥の言葉でも、
領けない理由はわからなかった。

それでも少年は、銀色の髪の少年の代りに
譲れない答えを伝える。

「だから今は——あなたの言う事はきけない」
「……………」
「あなたは多分、これが全部手に入らないと、
納得しないんだろ？」

そうして、よくある不秩序な答えを伝えた
少年に、少女は険しく——哀しげな顔となり。
「それなら……あたしは、アナタを闇に還す」
それが少女の役目と、厳然と口にした。

気が付けば薄暗がりの中で、少女の周囲は、
大気が熱される揺らめきに満ちつつあり、
「アナタもわかっているはずよ？ アナタの
ような特殊な存在が世界に混じること……
何かの運命を、必ず狂わせていくこと」
「……………」

思わず後ずさった少年がいた場所を、瞬時に
黄金と言える輝きを放つ炎の渦が包んだ。
『神』や『悪魔』は、意味や概念に沿った
形でのみ、世界に在る事を許されているの。
それを乱す存在は禍でしかない……あたしが
昔、多くのヒトを傷付けたように」

少年はただ、わかりきっていた己の現実に、
こみ上げる嘔吐きを噛み締めて堪えた。

黒い少女は、厳しい言とは裏腹に、とても甘い相手であると少年はすぐに悟る。

―師匠、カラスさんの炎よけるのはいっすけど、逃げ場は何処にも無いっすよ!―

「……!」

階段を飛び降りて後退し、黒い少女の死角に入るように逃げる少年のいた場所は、次々と炎の渦が立ち昇っていくが。少女が本気なら逃げる隙間もないはずだった。

『神界』って何なんだ……どうしたら元の場所に戻れるんだ?」

この薄暗がりにいる限り、黒い少女が少年を見失う事はない。

そうして少年を追い詰め、自らバンダナを差し出させようとしているのだと、少女側の思惑を嫌でも少年は感じていた。

誰もいない部屋の一つに、とにかく少年は飛び込んで息をつく。

「銀は出れそうにないのか? レン」

―当たり前っす。逆に師匠、何で今それだけ動けてるんすか?―

確かにへたり込んでいた少年が、紫金の目と共に、そもそも金色の髪である時には上手く動かせない軀を素早く駆動し。黒い少女から辛くも身を隠している少年に、羽飾りが心底不思議そうに尋ねた。

そうして比較的思うように動ける状態は、金色の髪の少年には、以前に一度だけ覚えがあった。

『地』に行った時と……同じ、だ」

―それって―師匠が黒の守護者、黙らせたあの時の事っすか?―

しかし考える余裕などなく、部屋のドアが突然発光し。瞬く間に融けて消え、そこから黒い少女が、揺らめく大気と共に中に入ってきた。

少年はその様子に、思わず、素朴な疑問を尋ねる。

「―いいのか? この城のもの、そんなに破壊して」

「本当の城では何も壊れていないわ。ここは神界だと言ったはずよ」

飛び込んだ部屋は存外に広く、何列も並ぶ質素な長椅子と高い天井、その中心に祭壇が設えられた礼拝堂らしき場所だった。

「あたしには勝てないとわかったでしょう。諦めてそのバンダナを渡しなさい」

最後列の長椅子の後ろで、少年と黒い少女は、睨み合うように対峙する。

白い少女が持っていたPHSを受け取れていない少年は、助けを求めると選択肢もなく。そして何より―この相手と戦いたくない躊躇いが、少年の勘の良さまで鈍らせる。

「どうして……今なんだ？」

「——？」

「マヤの城でも会ったのに。あの時はあんた、オレの事は敵視してなかった」

今はただ、相手と話してみるしかない。

ともすれば本気で、黒い少女は少年を消す

……その覚悟がある事を感じ、少年も警戒を崩さず、少女の黒い目を見つめる。

黒い少女は苦い顔で、少年と数メートルの距離を保ったまま質問に答えた。

「アナタの事がわかったのは、その後よ」

「じゃあオレの情報は、ここに居る悪魔から受け取ったってこと？」

「……その通りだけど」

情報源はおそらく、少年を監視し始めたあの大きな鳥であると思われ。城主ならともかく、黒い少女にも情報を与えた監視者に、少年は怪訝な表情を浮かべる。

「何でソイツはあんたにそれを教えるんだ？」

「アナタに教える義務はないわ」

「そうかな？ あんた、ひよつとしたら——ソイツに利用されてるかもしれない」

「……？」

黒い少女も一層険しい顔付きとなり、少年を見返した。

少年は素直に、思い当たる限りの現状を伝える。

「オレはここで歓迎されてない。でもこの奴が直接オレを排除出来ないから、あんたを動かそうとしてる気がする」

「……そうだとしても、それがあたしの役目であることは変わらない」

「——フルーレティを、敵に回しても？」

ぴくりと、そこで黒い少女は息を呑んだ。少年はそこで、戦うためではなく、自らの証を立てるために——

窓から月も見えない薄暗がりの礼拝堂で、その聖なる小銃を静かに取り出した。

「……それは、真夜さんの」

その銃を悪魔の女性が少年に預けている事。そこにある意味をすぐ読み取った黒い少女は、ぎりつと歯を噛み締める。

「あんたは……あのヒトの一人息子の、許嫁……なんだろ？」

牽制のためとはいえ、黒い少女に銃を向ける自身に、少年は知らず吐き気を堪える。

それはひとえに、役目と立場——どちらが大切かという問いは、この堅物過ぎる少女に大きな苦悩をもたらすと感じての事か。

黙り込んでしまった少女を苦い顔で見つつ、水平に構えた銃を向ける少年に対して。

その緋い蛇が、常日頃隠れる少女の首元、黒い髪の下からするりと這い出ていた事には、少年は気付かず。

足元から長椅子の陰に隠れ少年に近付いた蛇が、まさに少年に牙を向こうとした瞬間。

「悪いが今回は『橋』が優先だ、アヤ」

「……!?」

場に突然響いた、落ち着きのある若い男の声……融けて消えたドアから入ってきた、一見少女と同じように黒いシルエットの者の姿に、緋い蛇はさつと少年から離れる。

「カイ……!?!? どうしてここに!?!?」

黒い少女は驚愕といった様子で、その黒い男——余程の事がない限り、自らは動かない相手をまじまじと見つめた。

「……アイツ……」

少年はその男に、辛うじて見覚えがあった。

最近のように新しい記憶が難しくなる前の、花の御所にいる頃に見知った相手であり。

肩までの長い黒い髪を無造作に一つに括り、黒く長い上着を羽織った、上下共に黒い服の男は、今は『ボール』と呼べとだけぼやき、煙草に火をつけながら少女の隣に立った。

「俺のヨメ……アスタロトからのお達しでな。」

その少年には手を出すなだよ」

「そんな、悪魔側の事情なんてあたし達には関係ないこと——」

「悪いがアスタロトには借りがあつた。ここで返せと言われちゃ俺も動くしかない」

その黒い男は、黒い少女には養父と言える相手で、男の言は少女は無視出来ない事を、少年はいつもの直観でおぼろげに悟る。

「カイが借りを作るなんて……信じられない」

「若気の至りだ。と言つても数年前だが」

全く事情は納得出来ないながら、しぶしぶ少女は諦めたのか。段々と薄暗がりになりが差していき。

「……——つて、え?」

それと同時に、少年の目もただの紫に戻り。その躰は、これまでの動きの代償とばかりに、強い消耗が表面化し。

礼拝堂の様子が、元の城に戻ると同時に、

少年はボタンと前のめりに倒れ込んだ。

「……——」

少女はその姿を見て、一瞬逡巡し、

「やめとけ。意識は残つてゐるぞ、ソイツ」

黒い男はよつと、少年の近くに来て屈むと、倒れた少年の脈を測るように片手をとつた。

「今何かしようとしても、死ぬ気で抵抗するだろうな。残念だが俺の職業柄、こうなつた相手に余計な負担を与える事は好かない」

あくまで淡々と無表情な男は、そうして——倒れている少年を、よつと担ぐと。

「一応、うちにカルテもある患者だからな。この場は俺が預かるぞ、アヤ」

「…………わかつたわよ。ひけばいいんでしょ」

ただし、少年がこの城にいる間だけだと。それを黒い少女は宣言した後、あっさりと場から消えていった。

自らを『バール』……アスタロトの夫たる悪魔と名乗った黒い男は。至って不服げに、少年を少年自身の居室まで送った。

「これは救いようがないな。白夜がいた方がまだマシだったか……」

意識はありながらも、目を開ける力もまだ戻らない少年をベッドに寝かせ、全身状態を医者のように診る男は……それもそのはず、少年がジパングにいた頃に連れて行かれた、謎の場所にある診療所の所長であり。

そこは確か『橘診療所』だったと、夢現に少年は思い出していた。

「俺の声は聞こえてるな？」 『剣』の神霊
少年の額に手を当てて、枕元に座りながら、黒い男は嘆息するように言う。

「今オマエが動けないのは、体力の問題じゃない。自分でもわかってるだろうが、それは魂——気力の問題だ」

黒い男はそれでも、意識だけは保っている少年のカラクリを明るみに出す。

「自然の化生、霊としてのオマエは限界だが、神としてならまだ猶予はある。どちらにせよ、これまでと同じままのオマエでいることは、諦めなければ先は無いがな」

『神界』という場に立ち入る事が出来て、束の間でも力を受けられた少年に、本来なら『神』を名乗る男は——
黒い少女より研ぎ澄まされた、神としての眼を以って少年に告げた。

『魔』となり魂を喰らうか、『霊』のまままで滅びるか。『神』として自身を初期化する、

オマエが出来る事はその三つしかない
そのどれをも、自らは選ぶとうしない者を、まるで憐れむように男は見下ろす。

「記憶を奪い、一時的に魂を軽くする白夜がいた内が一番生き物らしくいられたなんて、何とも皮肉な話だがな」

その『忘却』の神とも縁のあった黒い男は、少年の窮状を、既に全貌を理解していた。

「オマエの中には、情報が多過ぎる。どれも捨てられないなら、容量の限界も当たり前だ」
元より、自ら以外の事も我が事と観る少年が過ごした時間の重さを、まるで知るように。

「それとも——オマエが望むなら。後一つ、邪道な方法は無くはないがな」

そこでぴくりと、僅かに眉を顰めるような動きを少年は見せ。そしてその後に、ずっと強張っていた少年の口元が拙く和らいだ事に……黒い男は軽く眉間に皺をよせる。

「……アスタロトの奴が、嘆くわけだ」
フウと息をついた黒い男が、軽く振り返った視線の先には、小さなドアがあり。

その向こう、中空の回廊でドアを見上げる薄い琥珀色の仔狐と。その横で壁にもたれ、両腕を組んで佇む城主にまるで気付くように。

ほどなくして、黒い男は応急処置と称し、少年に何故かバンダナを巻いて帰り。

金色の髪のままバンダナを着けた少年が、次に目覚めた時には、

「……オレ、ここにずっといたっけ？」

―それはですねえ。話すとき長いスよ師匠―
サイドテーブルにはPHSが安置されており、訳がわからず目を丸くする少年に、羽飾りも溜息をつきつつ経過を説明するのだった。

―で。師匠、動けそうっスか？―

「……今はきついな。でも、このまま少し大人しくしてたら、ちよっと回復しそうだし」
透き通る黒い翼を背に、バンダナをしたまま、少年はベッドに大の字に横たわり。不思議とそれで、落ち着く心地を感じていた。

―この羽、カラスさんも目をつけるわけっス。確かに何かへんっスよねえ―

「？」

―カラスさんは多分、教会関係の使者っスね。

噂は聞いた事があるけど、『神』を重視する原理集団が、まだいたとは驚きっス―

さっぱりわけのわからない少年は、そのまま羽飾りの語りに耳を傾ける。

―師匠。この世界で『力』を使う奴は全て、その力の根源は『神』ってのが、魔道の常識、原理派の認識なんス―

「全てって……悪魔や精霊とかもか？」

―精霊や悪魔、天使とか『宝珠』は例外です。どれも高次存在なので、『神』崩壊的な感じ。

でも悪魔の概念は『神』が歪められたもので、

『神』より下位存在の天使が、『神』に近くなってしまうたようなものが多いっス―

そして羽飾りは、『力』を持つモノは全て

『神』の依り代に成り得ると口にする。

―化け物はみんな、『神』の器たり得るんス。

でも『力』の本体は常に異界……カラスさん曰く『神界』にあると言いますね―

「……レイアスの飛竜が、本体は異界だって言ってたみたいに？」

―多分それっス。オレも知識だけだから半信半疑っスけど……器の方は、適性さえあれば複数の『力』も使えるけど、本体の『神』はラピ子ちゃんの『忘却』みたく、名前通りの『力』しか使っちゃいけないと聞いたことがあります。概念に縛られる悪魔みたいに―

「それじゃ、あいつがオレを狙ったのは……」

―師匠がもしも、『剣』って神様扱いなら、この摩訶不思議な『翼』から力を受けるのは、確かにおかしいです。師匠今、羽のおかげで少しづつ回復してるんスよ―

それはそもそも、自ら以外の者の『力』を、自身の延長として使えてしまう少年の歪さに他ならなかったが。

『翼』の方も古の黒い鳥だけでなく、ある様々な『力』を最近に後付けされていた事は、今は誰も知る由もなく。

少しずつ余裕が戻ってきた少年が、最初に
取りかかったのは。慣れない小さな通信道具
——PHSを手取る事だった。

全く同じPHSを持っていた過日の妹分が、
どのようにそれを使ったか思い出しながら。
打ち込んだ伝話番号は、彼らの養父に繋がる
はずのもので。

「——ユーオンか？」
すぐに応答した若く物静かで、しかし確かな
強い意思を窺わせる声は、間違いなく養父の
ものだった。

「うん。レイアス……今は喋れるのか？」
「ああ、大丈夫だ。無事か？ ユーオン」
まずとにかく少年の安否を確認する養父に、
ううんと少年は気楽に回答する。
「レイアスよりは大変じゃないけど、色々と
ピンチだとは思う」

PHSの向こうの、声を聴いただけで養父の
疲れ具合もわかる少年は、養父が何か言葉を
返す前にすぐに本題を切り出した。

「アフィのPHSが手に入ったから、オレが
今わかってる事を言うよ」

こうしてまともに話せる内に、それだけは
伝えておかなければいけない。知らず少年は、
困ったように笑いながら、無意識にPHSを
掴む手に力を込める。

少年は元々、説明が苦手な方だが、自身の
思いが誤解なく伝わっているかどうかはある
程度わかるため、焦らずにじっくりと現状を
伝える。

養母には今、三人の内なる者が存在する事。
養母自身はほとんど浮上せず、自称魔竜、
少年は妖精と呼んでいる者が一応は主導権を
握っている事と。妖精に普段は抑えられる、
悪魔を名乗る何者かがいる事について、全て
ありのままを口にした。

養父は重く考え込みながら、しかし何処か
納得がいったように、深く息をついていた。

「妖精に悪魔か……俺が手こずったのは多分、
妖精の方だな」

「そうだと思う。悪魔の方は最近強くなって
きたって、カイクって悪魔が言っていたらしい」
「それでそいつらは……アフィとはどういう
関係なのかわかるか？」

何故そもそも、そのような同居人を養母が
身の内に置く事になったのか。それも当然、
説明しなくてはいけない事柄だが、少年には
一番気が重い話題でもあった。

「……妖精は、アフィと同じ力があるけど、
多分アフィとは別人だ。同じだからアフィを
選んで、軀を借りてるんじゃないかな」
「……アフィは何故、そうしたんだ？」
養父の当然の問いに、少年は軽く息を吸い、
冷静に神妙に答えた。

「そいつ、ラピスの件に関わった天使だとも
言つてた。ラピスはもうすぐいなくなるから、
嫌なら身を貸してアフィに言つたみたいで」
PHSの向こうで、養父が息を呑む心配が、
確かに少年に伝わってくる。

「……でも悪魔は多分、ラピスが消えてから、
表に出て来たから。悪魔の方は、アフィとは
何か関係があるんだと思う」

その養女を失つた事を養父は痛み、養母にも
どう告げたものかと悩んでいたのだが。

寧ろ、連れ合いこそ一人で苦しんでいたと
——それを知つた衝撃を息を殺して呑み込む、
養父のしばらくの沈黙に。少年は目を伏せ、
黙って待つ事しか出来なかった。

しかし養父は、存外に早く気を取り直し、
話を再開していた。

「よくわかつたよ、ユーオン。それなら全て、
話の筋が通る」

「え？」

「ただ、後一つだけ。それならアフィは……
ラピスが消えた今、何のために、まだ悪魔で
居続けるんだ？」

「……」
あまりに理解の早い養父は、少年も知らない
何かを掴んでいるようであり。

有無を言わせぬ問いかけに、少年はやつと、
少年の苦い現状を養父に告げた。

「……多分……オレのせい、かもしれない」
「……？」

「アフィは——悪魔は、ラピスの抜け殻を、
まだ留めてるんだ。あいつはオレの事も……
そうやって何かの方法で、残そうとしてる」

この城には今、薄い琥珀色の仔狐がいる事
……それが少年の妹分の残骸と、包み隠さず
口にした少年に。

養父は悲しげにフッと息をつき、少しの間
黙り込んでしまったものの。

「ユーオンは——どうしたいんだ？」
「……え？」

さすがに少年は、養母がその妹分の魂を、
少年に与えんとしている可能性までは、今は
口が出来なかったが。

まるでその昏い意思に気付いているような
養父の問いかけに、少年は言葉に詰まる。

「何か方法があるのなら、俺もアフィも……
何をしたって、ユーオンを助ける」
「……」

「ラピスの事だつて同じだ。でもそれが一番
ラピスを苦しめたのかもしれない……俺は、
同じ事は繰り返したくない」

だから養父は、少年自身の希みを訊きたいと
言うように静かに尋ね。

「でもアフィは……違つたのかもしれない」
そしてそれが、養母が何も言わずに、一人で
抱え込んだ因と知るように口にした。

少年自身は、この先どうしたいのか。

養父は無理に答えは求めず、その後通信は、養父の現状と把握事を伝えられて終わった。

「情報はこれだけで十分だ。ユーオンはもう無理はせずに——帰れそうなら、すぐにでも引き上げて休んだ方がいい」

最後にそうは言われたものの、今の状況には、まだ少年は納得していない事と……この城を出れば、もれなく自称秩序の使徒に襲われる可能性を思うと、たははと現状維持するしか今の所はなかった。

何かあればいつでも連絡しろと、煩い程に言い含められた少年は、PHSに紐を通して腰のケーブにぶら下げる事にした。

「今度カラスさんに襲われたら、師匠。パパの助け呼びましょーや、師匠——」

「そうだな。いきなりで驚きそうだけだな」

少年は自身が、不秩序な『神』として黒い

少女に狙われた顛末を話していない。

話せば養父は無理をしても、この城に来てしまうかもしれない。城にいる間は大丈夫と言つても、養父が悩むのは確実だった。

「多分あいつも……オレが大人しくしてれば、悪いようにはしなさそうだし」

色々と不確定要素はあれど、養母の城主がどんな形でも少年を守ろうとしている事も、黒い少女の件からもわかり、

「そっすね。後は師匠は、師匠ママを陥れる、もしくは取り入りたい奴らに注意して、細々生活するのがいいと思うっすー」

「ネズミ探しは続けるけど。アフィの事も、出来ればもう少し探りたいし」

「それ全然、細々でも大人しくもないっすーそれでも少年には、現状は微温湯の如きで。不安要素はただ、何処まで少年は動けるのか……その限界がわからない事だった。」

再びくたりと、ベッドに大の字になると、

城主の采配か大きな鳥の監視の目もないため、少年は銀色の髪へと変わる。

「あー。キラ師匠、出て大丈夫なんスか？」

「……きついけど、これで動けるくらいまで、回復しなきゃ駄目だろ」

金色の髪のままではその程度もわからないと、顔を強く顰めながら、無表情に呟く。

「まず、回復出来るのかどうかだけだな……今はとにかく、凄く——眠い」

ずっと着けたままのバンダナは、すぐさま少年の目を赤く染め上げるものの。

そこには最早、以前までのような烈しさはほとんど見られず。

「出来ないなら出来ないで……仕方ないし」
そうして銀色の髪のまま目を閉じた少年は。羽飾りが思わず、次の目覚めがあるか心配になる程に、安らかな顔をするのだった。

その眠りはまるで、少年が約一年前、今の
軀で目覚める前のような暗い夢心地だった。

実の妹に小さな宝を返すため、剣と自らを
一つにしてまで待ち続けた少年は、長い時の
ほとんどを深い海の底で過こし。

自らの意識はほぼ皆無だったが、それでも
剣は、暗いだけの外界を感じ続けていた。

—オマエの中には、情報が多過ぎる—

眠り続けた時は、長く数千年に及び。

一つ一つの時間は、死と大差ない程の拙い
情報量でも、それでも常に情報を汲み上げる
感覚を持つてしまった少年には、その全てが
自らの一部として蓄積され続け。

記憶という情報容量に限りのある魂の力は、
目覚めた時から既に困窮していた。

—もつと沢山……私にくれる忘れたい心を、
思い出して……—

あまりに過大な情報の中で、曖昧な自らを、
少年が再び拾い上げられたのは——

『忘却』という『力』が少年と巡り会い、
過大な情報を一時取り払った影響は大きく。
少年の大切な記憶を奪い、少年を破綻させた
『力』であっても、それは少年には必要な事
だったと黒い男は現実を告げた。

「それならピスは俺を……助けてくれた、
のに」

『忘却』を宿し、少年の記憶を奪った事を、
妹分は無意識に自身を責め続け。

そして、少年からこれ以上奪うより自身が
消えることを願った妹分に、少年は……その
嘔吐きを永遠に刻み込まれたも同じだった。

それでも暗く深い眠りが、痛みも吐き気も、
全てを曖昧にぼやかしていく。

—ユーオンは……ずっと、ここに、いてね—

その願いに応える事が、せめてもの償いと
わかっているのに。

なのに少年は、それを叶える事が出来る、
白い少女も受け入れられない。

—ラピ狐ちゃんに、触れたいんでしょ？—

そこに一つの救いがある事は……。

暗がりにはいた少年に、唯一陽の当たる道が
そこにあると、少年も気が付いていたが。

「でも……それは……—」

けれどそれは、誰かの光を奪う道筋だった。
「俺のじゃ……ないから……」

それは決して、少年に許容出来る事ではなく。

もういいんだ、と。不意にその闇に現れた
白い少女に、少年は痛ましげな顔で伝えた。

「俺はもう——これで十分だよ、ラピス」

白い少女がどうしてここにいるか、それは

銀色の髪の子にはどうでも良かった。

そもそも少年は、近くに在るものは常に、
我が事のように感じるのだから。

白い少女は、相変わらず無表情に、少年を

真摯にじつと見つめる。

その紅い目を直視出来ずに、少年は応える。

「俺より狐魄が残る方がいい。狐魄はもう、

ラピスじゃないけど……それでも……」

少年の答えに白い少女は、無機質な顔でも、

悲しげに姿を薄れさせていき……。

白い少女の悲鳴が聞こえた気がして。

少年は暗闇の中、舞い戻る吐き気と痛みに
顔を歪め、夢と現の区別すらもつかず。

死に物狂いで己を掴むと、壊れかけている
存在を再び浮かび上がらせた。

ふらふらと暗闇を彷徨う少年に、羽飾りが

何か言っていた気がするが、これが夢なのか
現実かもわからない少年は全て聞き流し。

「……狐魄に、近付くな」

白い少女を脅かすものが、そこにはあった。

中空の四角い空間の縁で、それが何かよく
わからない脅威が、白い少女を追い詰める。

これ以上、近付かないでと——白い少女は

初めて、自らの意志を呼び覚ましていた。

それは少年が白い少女に触れるのを拒んだ

時と同じ……救いを怖れる悲鳴でもあり。

その脅威は、白い少女を迎えに来たのだと、

暗闇の中で少年は悟る。

届き続ける少女の悲鳴に、少年はこの城に
来て初めて、自身の抛り所たる宝剣を抜いて
脅威に対峙する。

しかし少年は、それに勝ち目がない事など、

一番初めからわかっていた。

「アンタ達は……狐魄を……」

ここで滅んでも構わないと、闇の中で少年は
脅威に向かって剣を振るう。

「狐魄を……連れていくのか」

それはただ、少女がそれを受け入れるまで。

どれだけ間違った怖れであれど、少年だけは
……怖れる少女を肯定する者であるために。

それらは少年に——少年はここで何をして

いるのかと、痛ましげに尋ねた。

そして、白い少女の存在は少年にとって、

いったい何であったのかと。

長く少年を包む暗闇とは対照的に。

その夢はやがて、白い少女の拙い安らぎを届け始めた。

「……狐魄……？」

少年はきよろきよろと、闇の中を見回してみるが、そこには最早白い少女は見つからず。

代わりにそこで、ふっと何か、別の悲鳴が少年に届き。

それが何故か酷く気になり、動かない躰を、少年の切り札の一つ……花の御所の術師からもらった護符の、中でも『水』の気を帯びたお札で体力だけは回復させ、悲鳴の発生源を少年は追いかけてみた。

白い少女の悲鳴が消えたためか、不思議と、階段を駆け降りる少年の心持ちも軽く。

降りた分だけ上がる徒労が後に待つ事も、その時は考えずに進んでいられた。

「……私に何の用があるの？」

悲鳴の発生源では、相手の姿もわからない脅威の一人が、怪訝そうに少年を見つめる。

「さあ？ 俺にもわからない」

目の前の相手を覚える、一時的な記憶すら怪しいらしい自身の状態に、さすがに少年は、これはまずいと一人笑った。

本格的に、少年に限界が訪れているのか。そうでなければこんなあやふやな世界は、説明がつかないと首を傾げる。

それでも別に、今の状態は夢と思っている少年は、何でもいやと好きに振舞う。

「最上階まで送るから、さっさと帰れ」
その相手が上の方から来たのだと、何故かそれは少年は把握していた。

無表情に伝えると、相手もずっと不機嫌にしており、少年も内心の気楽さとは裏腹に、無表情を続ける。

それでも少年は、段々笑顔を隠せなくなり。

——狐魄がきつと、楽しいんだ——

白い少女の脅威だった者を連れ、最上階に近づく程にその確信は強くなった。

それは、『楽しい』のだと。自らが曖昧な少年でも自覚出来る程……その、不機嫌さも優しさらしい相手とその仲間と、白い少女の間にはそんな心が主であり。もう心配ないと、少年は安心出来たからなのか。

「ありがとう——……狐魄を、助けてくれて」
微笑んで言う少年に、相手は不服気に応える。

「……待ってるから。狐魄と、一緒に」
どうして待たれるのか少年は不思議だったが、それは難しいと、とつくにわかっていたので。

「俺はあんたのこと……好きだと思っ」
ただその目の前の相手から伝わり、少年も同じ心を映した——素直な想いだけを口にした。

夢か現か。いったい何の時間だったのか、よくわからない長い眠りから、やっと少年ははつきりと目覚めた。

—キラ師匠、大変っス！ 何か知らない間に、もう数日たつてるっスよ、オレ達——

「……俺だけならともかく、レンまで一緒に、眠りこけてたのか？」

バンドナを着けたままの少年は、どちらかと言えば、その方が不思議な事態だった。

—大変なのはそれだけじゃないっスよ！？

オレ達が惚けてる間に、何とラピ狐ちゃん、何処かに貰われちゃったらしいっスよ——

「……え？」

—さつき師匠ママとカイクの悪魔が、師匠を見舞いつつそんな事を話してたっス——

「……………」

それは本来——仔狐の処遇を心配していた少年には、見過ごせないはずの事だったが。

「そっか……狐魄は、もういないんだな」

あまりに落ち着いた様子の少年に、羽飾りが拍子抜けしたように黙り込んだ。

「……大丈夫だよ。きつと狐魄は、いい所に行ったはずだから」

—そ、そ——なんスか……？ 何か師匠、妙に確信あり過ぎて不思議っスよ？—

いい夢を見たんだ——と。少年は羽飾りに、穏やかに笑いながら答えた。

「内容はよく覚えてないけど。狐魄も多分、楽しそうだったから……」

金色の髪の少年ならともかく、銀色の髪の少年がここまで平和な顔で笑うのは珍しいと、羽飾りはやはり不思議そうにする。

「凄く好きな……優しい、いい夢」

少年はとても大切そうに、そう繰り返した。「温かいんだ——……そいつらの所は」

穏やかでかつ、幸せそうな笑顔などという貴重過ぎる表情で、少年はベッドから起きて立ち上がった。

「俺みたいに簡単に、壊れたりしない所」

—師匠も大概、しぶといっスよ。多分師匠は、何回壊れても、何となく戻れるタイプっす——

「何だそりゃ。褒め言葉なのか？」

—そりゃもー。師匠はたとえダークサイドに墮ちても、根本は変わらなさそうっスから——

—そうして少年の穏やかさは、しばらくの間続く事になる。

—活動再開とばかりに、城主の元を訪ねて——

その膝の上にはいた、またも有り得ない存在を目にするまでは。

*

その青い目の幼い少女。瑠璃色の長い髪をサラリと下ろした、姿は六歳前後の幼女が、玉座に座る城主の膝を占拠する姿には。

銀色の髪に黒いバンダナを着け、赤い目の少年はただただ——絶句するしかなく。

「あら、どうしたのかしら、雲英君？ 何か私におかしい所でも？」

「……………」

傍らには大きな鳥や、側近の悪魔が背後に控える中で。悪びれない城主と、膝の上の幼女……碧眼の灰色の猫のぬいぐるみを抱え、無袖の功夫服といった恰好の子供は、城主にべたりと甘えながら口を開いた。

「どうしたの……キラ兄さん？」

それも呆れる程に、悪びれない物静かで、幼女にしては落ち着いた声で。

何で——と少年は、厳しただけの声色を、強張った顔の奥から絞り出す。

「何でエルが……あんたの所にいるんだ？」
そこにいるのは紛れも無く、少年が長い時を越えてまでこの世に戻した、かつての実の妹……少年の妹分の瑠璃色の髪の少女の躰を、貰い受けて新生した幼い少女で。

瑠璃色の髪の妹は、城主の礼装の、余裕の無い腰回りの裾をひしっと掴み、

「母さんの部屋の、鍵をもらったんだよ……わたしもずっと、母さんに会いたかったから」
無表情ながらも心から嬉しそうに、母と呼ぶ相手の膝の上を満喫しており。

「キラ兄さんにも、会いたかったの」

わけがわからず、黙り込むしかない少年に、城主の膝の上で座り直しながら言う妹だった。

城主を母と呼ぶ幼女が、いつからそうして現れたのかはわからないが。

それは城内にスキヤンダルとして浸透し、少年と城主も一応、親子関係にあるのだと、あっさり知られてしまった状態であり。

「……あんたは何を、考えてるんだ？」
幸せな妹にはひとまず何も言えず、城主を睨むように尋ねた少年に、

「そうね……私も、自分の願いを叶えたいの。これはその、大切な一つ……」

膝の上の幼女を撫でながら、妖しい微笑みを浮かべる城主は……ついに妖精から主導権を奪った悪魔であると、少年は悟る。

そこで唐突に、少年の脳裏に——

先日に見たよくわからない長い夢の、ごく片隅に現れていた誰かの声が響いた。

「あいつの事は、甘く見ないで正解だぜ？——それが誰の声かも、全くわからなかったが。」

―は？ 多分それは、オレは言っていないし、それを言った奴も見えないっス、師匠―
とりあえず城主と、それに甘える妹は放置し、居室に戻らんと階段を昇る少年は、真っ先にその謎の事の事を羽飾りに尋ねた。

「レンが見てないって事は、やっぱり夢か？
……でもそれにしても、はつきり覚えてて」

長い夢の中で、少年はその誰かに出会い、大切な事柄とは思ったものの。夢の他の要素……楽しかった気持ちの伝播が大き過ぎて、今まで放置していたのだった。

―後は何て言われたんっスか？ キラ師匠が覚えようとしたくらいなら、相当重要な事項だったはずっスよ―

「何だったかな……アフィは、運命を変えるために現れた『魔』だとか、レイアスと同じ事を言ってた気がする」

先日養父から伝話で聞いた事柄を、それも重要だと必死に覚えていた少年は、それらの話を合わせて頭を悩ませながら、ゆつくりと階段を昇る。

『魔』っていうのは、巡る命の何処かで、強い未練や無念を持って。願いを叶えるには何でもするって狂気が魂に宿った……そんな存在だって、レイアスは言ったよな」

養父は『悪魔』という存在を、『魔』でも特に、概念の力を借りる事が出来る程明確な方向性を持った化生だと口にし。

―師匠ママが悪魔でいるのは、願いを叶えるためだって言っていましたもんね。それなら、その謎の声の言葉を合わせると、師匠ママの願いは運命を変えるって事っスか？―
「そうなるよな……でも、それにしたって、意味がさっぱりだ」

それが嘘でない事は少年にはわかったので、問題はその真意であるが。

「後は……俺を、ソイツにくれとか。そんな事を言われた気がする」

―はい！？ どーという意味っスかソレ！？―
そこで羽飾りに、妙なスイッチが入ったようだった。

―師匠それ、男っスか、女っスか！？―
「……女、だったよな。でも、男のよな」
―そこ大事っス師匠！ どう考えてもソレ、求愛の言葉ではないっスか！？―

羽飾りの勢いに、違う気がすると思はれる少年も、何故そんな夢を見たのかとは理解に苦しんでいるようだった。

脳裏には、大きな鳥と話す誰かが浮かぶ。
―よーやく出会えた……オレに相応しそうな奴なんだけどな―

また会おうとその人影は言い残し、必死に残した言葉以外の情報は全て消えてしまった。

「……………」

よくわからない話が終わった少年は、ふっと階段の途中で立ち止まった。

「師匠？ どーしたんスカ？」

踊り場を見上げ、連絡通路の方に目を向け、淡々と不思議そうに言う。

「……………そこで何やってるんだ？ あんた」

「……………」

少年に気付かれるとは思わなかったらしい観察者の、動揺の空気が伝わる。

連絡通路に潜んでいた観察者は、観念して踊り場の方へと出て来た。

「おおお！ またもやカラスさん！」

「……………」

バンドナを着けた少年を見下ろす相手は、紛れも無く先日少年を襲った黒い少女であり。

「……………調子、悪そうね」

険しい顔付きで言う相手に、少年はああ、と……………この相手は少年を見ていた理由を悟った。

「別にこれは、あんたとやり合ったせいじゃない」

「!?!」

淡々と言った少年に目を見張る黒い少女に、少年は密かに笑いを噛み殺す。

「俺の不調は、今に始まったことじゃない。

あんたが気にすることは何もない」

「別に、気にしてなんかいないわ」

黒い少女は不服そうに、俯きながら言い返す。

「カイが、アナタの不秩序はまだ見逃してもいいレベルだって言うから……………自分の目で、見極めにきただけよ」

「?」

「アナタはまだ『神』じゃないって。それは

……………でも、あたしにはわからないわ」

だからこれは徒労だったと言わんばかりに、くるりと踵を返した黒い少女に、

「……………あんた自身、自分が『神』かどうか、

あやふやなんだな」

少年はあつさり、その所見を口にした。

「……………!?!」

黒い少女は再び、動揺の空気と共に振り返る。「『神』って何なのか、俺はわからないけど

……………あんたの探し物にそれは——今の役目は必要なのか？」

「……………アナタ、真夜さんに何か聞いたの？」

今やとてつもなく不機嫌な様相の黒い少女に、別にと軽く頭を振る少年に、更に黒い少女は難しい顔付きとなる。

「あんたをほっぽって、真夜の子供がずっと行方不明とは聞いたけど。ソイツも悪魔だし、何であんたは『神』に関わるんだ？」

「……………」

黙り込む黒い少女は、どうやらこれまで、

こうした話をあまりした事がないらしく、あまりに勘の良い少年を不審に感じつつも、何か思う所があったのか——

「……………ちよっと、ついてきて」

そしてある部屋へと、少年を誘ったのだった。

少年がいた城の西棟ではなく、中央の上層……本来なら重要な近臣以外は立ち入れない場所に、その部屋はあった。

「……って——」

「炯の部屋よ。アスタロトの血縁だもの」フルーレティの悪魔の城で、少年が滞在した部屋と確かによく似た雰囲気……近代的だという家具が程良く配置され、黒い少女曰く、パソコンというらしき謎の道具まで隅の方に設えてある部屋で、ふかふかとした長椅子に並んで彼らは座った。

「何で俺をここに？」

「……深い意味はないわ。話しやすい場所がここだっただけ」

少年の隣、黒い少女は少年を見る事もなく、俯きながらその話を始めた。

「炯がいなくなったのは……東の大陸なの」

「——？」

「魔界じゃなくて宝界の方。カイがアナタは、東の大陸の海底遺跡から発掘された剣だって言ってたわ」

なるほどと頷きつつも、しかし話の関連が、少年にはさっぱりわからない。

「その発掘隊は多分、あたしと炯が少しの間混じらせてもらった所と同じなの。あたしがいた時は、同じ東の大陸でも湖底の遺跡……『デルス・エイラ』という聖地から、色んな宝物を掘り出しているところだった」

そこでズキンと、少年には頭痛が走り。

「あたしはそこで発掘された『神』の宝から、今の『力』を手に入れて……でもその時から、炯は姿を消してしまった」

そして少年は——ある誰かの声を思い出す。

「だってオレ——とっくに死んでるしさ？——」

それは少年の本体の剣が、少し前に自らを

手放し、この少女に保護された時の記憶で。

遠い遙かな記憶も合わせて、真実の断片が既に、少年には繋がりつつあったのだが。

『神』も『悪魔』も、ヒトの運命を変える。

あたしの運命は多分……良くも悪くも、炯に変えられてしまったと思う」

それからその相手を探しているという少女は、『神』の使徒として働けば『神界』を使え、ヒト探しをしやすいのだと。少年の問いへの答えとして、自らの事情の一部を口にした。

「……ありがとう」

え？ と振り返った少年に、黒い少女は少し不服気に赤くなりながら、札を口にした。

「どうしてかわからないけど……アナタには、とても話しやすくて」

少女にとっては、これは愚痴に当たるような、滅多に話せない事らしかった。

黒い少女の素直な謝辞に、少年はポカンとしつつ。少し考えてから苦笑いを浮かべると、その思いの一部を告げた。

「……多分、ソイツ。あんたに会える方法を、ソイツもずっと探してる」

「——」
立ち入った事を直球に伝える少年に、少女は軽く息を呑んで少年を見つめる。

少年には辛うじて、わりと近日の記憶……少年の剣を一時期持ち歩いた誰かと、誰かの存在を知る者の会話が、今頃になって蘇る。

「オレの躰、早く見つけてよん？——
——バカ言え。そんな簡単に用意出来るか——」

「ちよつと時間、かかりそうだけど……でもあんたが待てるなら、また会えるよ」

少年は今、観えている全ては口に出来ず。それでも最大限を、拙く微笑みながら伝えた。

その言葉を信頼する根拠も、それを言った理由すらあやふやな少年に対し、黒い少女はしばらく硬い顔で少年を見つめていたが。

「……………」

何でかしら——と。少女自身が不思議に思うように、不意に黒い目を潤ませていた。

「アナタがそう言う……本当に、そうなる気がする」

そこで少年に浮かぶのは、ただ——

同じ誰か達の、それぞれ別の時の声だった。

——それとも——オマエが望むなら……

——少年。オマエを……オレに出来ないか——

「……会えるよ。ソイツは多分——あんたの近くにいる」

その真実を全て伝える事は出来ないままで。去りゆく黒い少女を、少年は黙って見送り。

少年の剣を保護してくれた、その黒い少女……剣を持ち歩き、少年が思い出した言葉を聞かせた誰かは、少女自身に他ならなかった。

「オマエ——何か、タチの良くないものに魅入られてないか？」

剣から記憶を奪っていた『忘却』の事も、その少女……正確には、少女が知らない内に少女の躰を使う誰かは、気が付いており。

「オレがここにいる事、ばれたら困るしさ——
——どうして誰かは少女の内にいるのか。それが少年が、真実を告げられなかった理由で。」

「神様って奴とは、間違っても殺し合うなよ？
——体も命も神のものになる……オレが今ここに囚われてるように——」

『神』の素因を持つという、黒い少女に……少年はただ、暗い目を澱ませるしかなかった。

少年がやっと、居室に帰りつく。

最近よく来る嫌な客が、遅い！と少年を待ち受けていた。

「旦那、何やってんだよ？ 今日はやばい程、問い詰めた事が有り過ぎるぜ？」

「あー。カイク長官、また来たっスカあー」

「……………」

鬱陶しい…………という顔を隠しもしない少年に、足を組んで少年のベッドに勝手に座っている男の悪魔は、ニヤリと微笑む。

久々に城主の元に出向き、妹に会うという衝撃的な今日が訪れるまで、少年はしばらく居室でゆっくり静養しており。

そこにこの男は、初対面の時の少年からの謎かけの答えだと言って押しかけていた。

「やはり嫌い同士の同盟は無理がある、旦那」

正確には一方的な嫌いで同士ではないがと、男は付け加えつつも、

「それなら発想を変えようぜ。互いを陥れるために互いの情報を手に入れよう」

「…………は？」

「旦那はどうせ、おれ様が旦那を、城主から引き離したい魂胆は気付いてるんだろう？」

それならおれ様側の情報もやって、旦那にもおれ様を蹴落とすヒントをやるから、お互い、

答えられない事以外は質問し合おう」

そうして度々、居室に引きこもる少年の元に、迷惑な男はやってくるのだった。

「なるほどな。似てないと思ったが、旦那も

あのロリ娘も養子なのか」

「……………」

互いを陥れるための情報交換。それには当然、嘘を伝える可能性も込みであり、少年側には

相手が真実を言っているかどうか、ある程度わかる有利さがあった。

それなので少年は、少年と妹の、城主との関係をそれだけの情報提供に留める。

「しかしあのロリ娘が現れてから、すっかりアスタロトはやばい方が表に立つちまった。

おれ様元々、前の奴とは知り合いなんだが、そっちとも今は話せん。完全に今のに、逆に

抑えこまれてるな」

どうやら妖精はこの相手とも接触を断つたと、少年は過不足なく悟る。

「おれ様は多少なら、未来の状況を予見する能力を持つてる。それもカイクたる所以だが、

このままじゃそう遠くない内、この城の中で、覇権抗争が起こりそうだぜ」

「…………アンタは何で、あいつをアスタロトにしていたんだ？」

「おれ様は正味、躰を持つあいつと遊びたいだけさ。バールの嫁扱いだが、おれ様も随分

昔から、あいつの事は気に入ってるんでね」

少年はこの男を嫌っているが、男は少年を嫌っていないらしく、口にする事はほとんど

偽りがなかった。

実際男は、妖精の安否を一番気にしており。

少年は少し悩んでから、妖精の状況に対し、所見を口にした。

「あいつは多分、外に出れないわけじゃない」

「お？」

「何か理由があるんだろ。俺はあいつより、今のアスタロトをもう少し探りたい」

その理由も多少は気付いていたが、そこまで教える事はないと口を噤む。

妖精の正体については、少年は養父から、既にある程度の推測を与えられていた。

「アフィには元々、アフィ自身の真の名前がないんだ、ユーオン」

「？」

「ティアリス・アースフィーユ・ナーガ……ジパングに登録した名前は検流惟だが、逆に言えばそれが最初の、アフィだけの名前かもしれないな」

養父曰く、ティアリスは養母の祖母から、アースフィーユは叔母の名前だという。

「わたし、自分の名前がないの——

初めて養父に会った時、そんな事を彼女は、あの穏やかな笑顔で口にしたらしく。

だから養父は、誰も呼んだ事のなかった、アフィという愛称を養母につけたといい。

「アフィの家系……竜族の中で、ティアとは巫女につけられる名らしい。アフィは巫女の孫で同じ適性——竜を召喚する力と、魔竜と呼ばれた叔母と同じ素因を持って、だからそれらの名前をつけられたそうだ」

「って事は……」

魔竜を名乗った牀の支配者。それは、かなり昔に死した叔母の魂が最も疑わしい相手と、養父は当たりをつけていた。

「じゃあ真夜は……あいつの中身を最初から知ってた？」

「私にわかるのは、貴方はただティアリスと同じアースフィーユという者でナーガの姓を冠する事だけだし——

「それは有り得る。生前に面識があるはずだ」

養母の義理の祖母にあたる悪魔の女性には、それは若き日々の縁者でもあった。

そもそも、養父は難しい声色で言う。

「竜族が二つの名を持つのは、一つ目が真名、二つ目が『神』からの首輪……逆鱗という、もう一つの心につけられる名前なんだ」

「逆鱗……？」

「真名は当然、本質に沿って名付けられるが。逆鱗はただ、力が暴走しないように制御するためだけの人格だ。魔竜である名前を逆鱗の方に名付けられたのは、そこにも意味があるはずなんだが……」

養父は養母の両親と、面識はあるがあまり深い付き合いはないと言い。

大いなる力を持つその両親は、幻の土地に隠れ住み、現世への関わりを避け……子供について多くを語らず、子供自身に、自らが何者であるかを探すようにさせていた。

妖精は、妖精が名乗った通りの魔竜。

それなら魔竜とは何なのか、少年は養父に尋ねた。

「俺もずっとそれが気になってる。はつきりしてるのは、昔に一度魔竜と化したアフィは、属性なき無色の竜……自然の脅威になる前の大気そのものの力が暴走した、身の周り全て凶刃の恐ろしい状態だったよ」

それを食い止めてしまえたらしい養父を、改めて少年は見直していたが。

『魔』とはそうして、これから何かになる、まだ方向性があやふやな点でも危険な状態だ。願いが定まれば悪魔にもなるし……それが、あの暴走よりはマシと、アフィの叔母というヒトも思ったのかもしれないな」

叔母自身はおそらく、魔竜として酷い思いをしたのだろうと……同じ素因を持った姪を、守るために躰に憑いたと仮定すれば、今あの悪魔に躰を渡す理由は自ずと導かれた。

迷惑な悪魔の男が部屋を出ていってから、

少年は羽飾りには、その答えを伝える。

「妖精は悪魔に……エルを会わせたいんだ」

—ふむふむ？ キラ師匠……その心は？—

少年の妹が現れてから、悪魔が台頭した。

その娘は大切な願いの一つと言った悪魔に、妖精が何を思ったのか。

「多分妖精は、アフィを元に戻せるように、悪魔を何とかしたいと思ってる」

—それって師匠……悪魔の師匠ママこそが、師匠ママって事っすか？—

「……アフィにずっと会えないのは、多分、そういう事なんだろ」

悪魔となつてしまった養母。それが一番、少年にも養父にもピンとくる解釈だった。

そう導いたのは妖精で、それもまた養母を助けようとした選択であると——

それなら全て、話の筋が通ると養父は言い、

妖精に手こずったとは言いつつ、悪い感情は養父も持っていないようだった。

「……みんな、何かを守ろうとしてる」

悪魔となつてしまった養母も……それを元に戻そうとする養父も、妖精も。

「それなら何で、噛み合わないのかな」

誰もが個々の守りたい者のために独自に動き、協力的体制をとれていないのが現状で。

目的は近いのに、互いに手を取らないのは何故か……少年にはわからず。

—師匠。パパと師匠ママのすれ違いが、それを体現してる気がしますけどね—

「……そうだな。何となく、アフィが何か、隠してる気がする」

—それが何なのかかわかれば、一番っすね—
自身に出来る大切な事は、その養母の心を

探す事……今の少年は、それを自然に自身の役目と、何故か受け止められるのだった。

かつては、殺すことしか出来ないと自らを定めた、天性の死神たる銀色の髪の少年は。同じく殺すことを特技と自覚し、処刑人となった過去を持つ妹の元へ、少し休んでから足を向けていた。

「……何で？ キラ兄さん」

「何でじゃない。俺がそう言うのは、エルもわかってて来ただろ」

以前は仔狐がいた最上階の客室で、悠々と一人羽を伸ばしていた妹に、苦いだけの顔で少年は言い含める。

「今すぐ帰れ。母さんの事は俺達に任せると約束したはずだ」

「うん、任せてるよ。わたしはただ、遊びに来ただけなもの」

「危険過ぎる。遊びに来る場所じゃない」

「ここか母さんの所にいけば、大丈夫だよ」

その部屋にはずっと、仔狐の頃から妖精が施した結界があるのは少年も知っていたが、

「母さんも安全とは限らない。エルを最優先出来ない時もあるはずだ」

まずこの魔界という所が危険であり、少年はカケラも、妹の滞在を認める気はなかった。

「……そうかな。わたしがいた方が、母さん、安全になる気がするけど」

少年と近い現状把握の力を持つ妹は、少年と違う切り口での観方を得意としており、

「わたしといると、母さん、優しいよ。でも兄さんといると、怖くなるよ」

「それはどっちでもいい。問題はエルの身が、安全かどうかだ」

あくまで頑なな兄に、妹は不満そうな表情を惜しげも無く浮かべた。

気ままな妹は、遠慮なく我が侘を言う。

「……兄さんと一緒なら、帰るよ」

「どうやってだ。……そもそも、どうやってここに来たんだ」

母さんの部屋の鍵をもらった。などと言っていたが、異世界間の移動など、少年や妹には本来叶うべくもない奇跡であり。

「帰れるよ、来た時の道を通れば。その後も、また道を作る事も出来るよ」

「……？」

実態はさっぱりわからないが、そもそも妹がここにいる事が、それは可能であると示している。

しかし少年は、まだ苦い顔を変えず。

「俺は……今はこの城を出られない」「ちよつとくらい、大丈夫だよ。戻れる方法、ちゃんと渡すって約束するよ」

とにかく少年の同伴を求める妹に、確かに無事に帰ったのかを見届けるのは必要だと、少年も改めて思い。

少年の体力や気力上、今すぐには難しく、翌日という事で話をついたのだった。

その後、結界のある所とはいえ、妹の身が心配な銀色の髪少年は、バンダナを着けたまま最上階の客室に留まっていたが。

何故か入れ替わり立ち代わり、悪魔が数人、部屋には来訪してきた。

「二度と来るな。帰れ」

「えー。おれ様と契約しておいた方が、断然エルちゃん、この先安全だと思いがね？」

「わたしはいいけど……ダメ？ 兄さん」

城主の側近が多いが、特にしつこかったのは、少年と同じ立場——客人の二人だった。

「えー。妹さんがいるなんて聞いてないよう。

ちよつとでいいから雲英ちゃん貸してえ」

「わたしはいいけど……ダメ？ 兄さん」

「……」

どの悪魔もすげなく追い返し、疲れた顔で長椅子に横たわった少年に、妹はその足下に座りながら兄を不思議そうに見つめる。

「兄さん……モテモテだね」

「は？」

少年と妹が城主の養子と知ってから、城の近しい悪魔達は掌を返したように、好意的に取り入ってこようとしていたが。

「俺じゃなくて、狙われてるのは母さんだ」

その中にはいくつか、城主への敵対心から少年達を傀儡の筆頭に仕立て上げられないか、そのような下心を感じる相手もあり。

少年がこっそりつけているネズミ疑い帳を、証拠は無いが気をつけろとして、少年は今夜城主に渡していくつもりだった。

少年と似た直観を持つ妹は、少年の言葉にうんと頷きつつも、

「でもあの鶉のヒトと、嵐のヒトは違うよ」

「——は？」

少年以上にフィーリング重視な妹の喩えが、誰を指しているかわからなかった少年は目を丸くしつ、睨むように足下を見る。

「鶉のヒトは多分、母さんの中のヒトからもお願いされてるけど、兄さんのこと可愛いと思ってる。嵐のヒトは普通に、キラ兄さんと凄く仲良くなりたいみたいだし」

「……待て。鶉のヒトって、誰だ」

後者は自称、嵐を司る愛の悪魔の事だろうが、前者の謎に少年の声色が低くなる。

「……あれ？ 兄さん、気付いてないの？」

妹はまた不思議そうにしつつ、立ち上がって少年の胸元まで来ると、足下までふかふかの長椅子にもたれるように床に座り、顔を斜め上に向けて少年を見つめた。

「あのヒト、『鶉』が象徴の悪魔みたいだよ」

「……」

黙る少年の代わりに、羽飾りが騒ぎ出した。

「……なるほど。だから師匠、カイムの悪魔、

あれだけ毛嫌いしてたっスねー

鳥の羽飾りを付ける剣士、討論好きの悪魔に、その鳥の名が許せないというかの如くに。

大笑いを始めた羽飾りに、妹はキョトンと、

少年の腕の羽飾りと鍵を見つめる。

「兄さん、あのヒトの事、嫌いな？」

—そりやもう、初対面から露骨につス—

「……兄さん、味方、少ないのに……」

これ以上減らしてどうするのばかり、じつと

兄を見る妹に、

「味方としてアイツは信用出来ない。エルも

わかるだろ」

「悪魔はそんなものだよ……だからお互い、

上手くいくよう、助け合えばいいのにな」

悪魔使いである妹は、さらりとそんな戯言を

答える。

「嵐のヒトは、もうすぐ休暇が終わりみたい。

兄さんがここにいなかったら、夜にお部屋に

入ってきたかも？」

—あー、それ十分有り得るつスよエルりん—

またも盛大に笑う羽飾りは、噂の鵜の悪魔や、

少年と似た直観の妹など、最近話し相手が

増えて楽しいようだった。

そうして長椅子で不貞寝する少年を囲み、

和気藹々とした中へ、その空気を引き締める

……そうなるはずの人物が。その悪魔すらも

和やかな雰囲気で見れた時には、少年はただ

絶句するしかなかった。

「……楽しそうね？ エルフイも、ユオンも」

中身が妖精の時には少年の事をユーオン、

悪魔の時には君としか呼ばなかった城主が、

何故か……少年と妹の本名を自然に呼ぶ事に、

少年は思わず息を呑み。

「母さん。今日は、一緒にいられるの？」

最上階の客室にやってきた城主に、まさに

飛びつくように妹は尋ね。

城主はええ、と微笑み。いつもの黒い礼装

ではなく、そのまま休めるような寝着に近い、

鉛色の礼装で現れていた。

妹を膝に乗せて寝台に座った城主は、腕を

枕に長椅子に陣取る無言の少年に、妖艶でも

親しげな微笑みを浮かべる。

「ブラックリスト、有り難く受け取ったわ。

あの目立つ放置ぶりはどうかと思うけど」

部屋に置いたままのネズミ疑い帳を、少年の

部屋を先に訪ねた城主は見つけたらしく。

「……俺以外、入らせないってふれ込みだろ」

城主の方を見もせず冷たい声で言う少年に、

改めて城主は……じつと己を見つめる少女の

頭を撫でてから、そこで——

驚く程に穏やかな顔で、少年に笑いかけた。

「……一番初めに、辛い事を言っただけ、ゴメンね、

ユオン」

「……——え？」

その時の微笑みは、穏やかでありながら、

何処か悲しく。声色もひたすら物静かであり。

長椅子から僅かに顔を寝台の方へと向けた少年に、城主はまるで、本来の養母が帰ってきたような顔で苦笑し。

「ユオンはそうしないって、私は知っていた。だから何も言わず、ラピスの運命を待つ事も出来たけど……」

しかし養母であれば、少年をユオンと呼ぶだろうと、内容はともかく現状がわからず、少年は黙り込む。

妹分の魂を、少年のために利用しろと言いつつ……それも本心であったはずの、この悪魔はいったい何なのか。

代わりに妹が、事情など何も知らなくても、大部分を察したように話し始めた。

「でも……他の悪魔に付け込まれないように。だから母さん、厳しい事を言ったんだよね？」
灰色の猫のぬいぐるみをぎゅっと抱え、暗い青の目で城主の青白の目を見据える。

「悪魔はみんな、弱い所につけこむもの……兄さんは特に、簡単に利用されそうだし」

それなら初めに、少年の最も危うい部分に切り込んでおく事が、苛烈な魔界という地で少年を守る布石だったというように。

「母さんはどうして、父さんと話さないの？」
少年も気になっていた事を、まさに直球に、妹はその悪魔と向き合う。

「父さん、ずっと心配してるし……母さんも今も、父さんのこと、大好きだよね？」

「……………」
悪魔は穏やかに妹を見つめ。少年も何となく身を起こし、ぐらりとしつつ、妹が母と呼ぶ相手をそっと見つめる。

「そうね……と。」
やがて悪魔は、微笑みながら悲しげな声で、少年も妹も見ずに視線を落として呟いた。
「ここにあのヒトがいたら、幸せだったかな」

その声の色はあまりに沈痛で、少年も妹も、咄嗟に反応出来ずに悪魔を見つめる。

悪魔は膝の上の妹を、そっと抱き締めると、少年を見て困ったように微笑みかけた。

「あのヒトが悪いわけじゃないわ……でも、今はもう、傍にるのが辛い」
「……………」

それはこれ以上は語られぬ領域と、少年も妹も、勘良く察する事しか出来ず。

少年は無言で立ち上がると、座る城主の懐、小さな手帳を見てガンをつけるように言った。
「さっきまでこの部屋に来てた奴ら。それはまだ書いてないから……貸せ」

そうしてサラサラと、何かを書き足していく少年に、城主は今度は妖しく微笑み。
「ありがとう。きっと今後、役に立つわ」
しかし声色はこれまでで一番悲痛で——その理由は誰も、この時には気付けないままで。

城主と妹は寝台で、少年は長椅子で。

そのまま同じ部屋で一夜を明かし。翌朝は、妹を家まで送ってくるという少年に、城主は何故か全く笑わずに少年を見つめていた。

「……すぐに帰る。勝手を言っただけで」

「……………」

青白の目にはこれまで見た事のない静けさが宿り。怒っているのか、それとも……悲しげとしか言えない顔に、少年は後ろ髪をひかれ。

「……兄さん。昨日は何か……夢、見た？」

妹が通って来たらしい、何処かの部屋の謎の扉に入った少年と妹は、暗いとしか言えない謎の空間をしばらく歩いた。

「いや、特には。エルは、何か見たか？」

この兄妹にとって、夢とは近くで眠る者の記憶を垣間見るための、一つの手段であり。

共に悪魔の傍で眠った者同士、何か新たな情報がないか、確かめる会話だった。

「何も見てないよ。多分、母さん……眠ってないんだと思う」

「……………」

それは少年も、薄々感じていた事であり。

目覚めた時は、まず何故妹と城主とそこで

眠っていたのか、羽飾りに教えられる事から

始まる少年だが。妹を細い腕で抱くように、

ずっとその顔を眺めていたような城主の心は、

一晚中感じ続けていた少年達だった。

「……あのね、兄さん」

だからその腕の、あまりの温かさに――

「母さん、多分……わたし達が、わかってる」

「……………」

妹も少年も、夢など見ずとも。同じ答えに、

そこで辿り着いていた。

「父さんは何も覚えてないけど……母さんは、わたしと兄さんがホントの子供だって……

きつと、わかってる」

……それをあえて、「覚えてる」と言わず、「わかってる」と言った妹の真意は。

―アスタロトは確か、過去とか未来が視える力を持った悪魔っスから。下手すれば前世の縁とか、わかつちやうかもですね―

「……それならレイアスも、俺達との縁は、多分わかってる」

妹の手をひきながら俯いて口にした少年に、羽飾りは「？」と不思議印を浮かべる。

「……あれは、母さんと同じだけど。でも、

もう母さんじゃないんだ」

拙くそれだけ、何とか少年は続け。妹も、

黙ったままで納得するように頷いた。

「生まれ変わりって……何なのかな、兄さん」

「さあな……それらしい奴は沢山会ったけど……多分そこには、意味は無いんだ」

その母の姿に少年は改めて――同じ答えを観ながら、暗闇を進むしかなかった。

謎の暗い道のりは、長くは続かず。

着いた先で出会ったドアを開けた時には、見知った光景がすぐにも広がっていた。

「……オイ。ちよつと待てよ——みずか水火」

「だから。何度も言うけど……イ・ヤ」

ジパングの自宅の、妹の部屋のドアから、何故かアスタロト城に出られた奇跡の秘訣は、何と城主を悪魔として召喚したらしい妹が、城主から直々に渡された、そのまま『鍵』の効果らしく。

「これ差すの、結構疲れるの。エルフィ達が帰るまで、見張ってるのも大変だったのよ」

少年が留守の間、妹を守ってもらっている同居人……鎖骨までの紅い髪と、端整で鋭い紅い目の美少女を、少年は恨めし気に睨む。

にこにここと、水火と呼ばれた紅い少女は、

鍵穴のあるドアなら全て、魔界への転移口に出来てしまうらしい小さな鍵を持ちながら、虚ろに微笑んだ。

「ハイ、あげる。後はユーオンに渡すように、エルフィには言われてるから」

家に戻ってすぐバンダナを外し、金色の髪に戻った少年は、疲労感の濃い顔で今度は妹をじつと睨む。

「……エル。わざとだな」

「？」

「最初から、オレを帰さないつもりだったろ」

「わたしは何も……嘘はついてないよ」

魔界に戻る方法はちゃんと渡すと言った妹は、自室のベッドで座ると、ぬいぐるみは置いて膝を抱える。

その鍵は、強い力を持った者でなければ、まず鍵穴に差す事が出来ず。

「水火以外、これ使える奴はうちにいないし。

それじゃどうやって……オレに魔界に帰れと言うんだ？」

「……それは大変だね。帰れないね、兄さん」

強い力を持つ聖魔という分類の紅い少女に、それを断られてしまう以上、少年にその鍵を使う事はとても難しく、

「兄さん、調子悪そうだから。しばらくは、家で休んでく方がいいと思う」

「……やっぱり、わざとだな」

「？」

人形の性を持つ聖魔で、あまりヒトの頼みに反発しない紅い少女が、はっきりNOと断るのは。明らかに紅い少女の主人と言えるこの妹の差し金と、少年は一瞬で悟った。

それだけ妹が心配し、強引な手段を使う程、少年の状態が差し迫っている事には、少年は目を向けず……渡された鍵を恨めし気に見て、どうしたものかと頭を悩ませる。

居間に行くと、後一人の新たな同居人が、帰ってきた少年に気付き、何か作業中の手を止めて振り返った。

「よ、久しぶりだな。魔界生活はどうだった？」

「……ラクト」

無駄とは思いつつ、その若く鋭い顔立ちの男——養父の旧知の間で、自称何でも屋の、淡い紫の硬質な短い髪と、紫の目が印象的な紫苑の男に、持っていた鍵を見せてみる。

「あー。コレはオレもきついな、正直。昔のオレなら協力してやれただろーけどな」

「……だよな。ゴメン、わかってたんだけど」
やはり男も鍵は使えそうになく、肩を落とす少年に、男は居間に広げていた多様な工具の一つを握って悪戯っぽく笑う。

「ゲートリングもレイアスが持ったままか。早々造れるもんじゃねーから、悪いが予備もオレは持ってねーぜ」

そもそも少年と養父を魔界に送ったのは、目前の男が造った道具の力でもあり。

少年の剣を小さな携帯型にしてくれた男は、そうして様々な道具の開発と改良に長けた、物造り系の何でも屋だった。

「そこまでまだ、魔界に帰らなきゃいけない用事があんのか？」

「……だって、アフィを放つといたままだ」
「それはもう、レイアスに任せればどうだよ。オレだって何も出来ないのが歯がゆいけど、結局アイツら二人の問題だしな」

「……………」

男は元は、養父、養母と並び立つ程の強い化け物で、その力を生かした道具造りからも、戦う武器職人などと呼ばれていたが。

ある呪いを左肩に受けた時から、その身の崩壊が少しずつ進み、度々左肩から襲い来る発作で明日をも知れぬ身であるらしく。

そんな状態であるためか、紫苑の男は常に体調不良という不機嫌な顔をしているのだが。

今は何故か面白そうに、悩ましげに対側の長椅子にあぐらをかいて座った少年を、手を止めたままで見てきていた。

「それよりオマエ自身は、何かやりたい事、ねーのか？ ユーオン」

「……………」

「やれるだけやって、悪あがきしとかないと、オレみたいにあちこち彷徨う羽目になるぜ。オレは幸い連れ戻してくれる奴がいたけど、オマエ、何かずっと迷子っぽいよな」

少年の状態は、自然の霊気を受けられない魔界から出た影響か、少し持ち直していたが、それでも目前の男と同じように、残り時間が少ないはずの少年を感じているように、敏い男は困ったような顔で笑う。

少年も男を映すように、困り顔で俯く。

「ラクトは……願いは、叶いそうなのか？」

そして一見突拍子もない事を尋ねる少年の現状把握能力に、男は苦笑するしかなく。

「そーだな、半分は叶ったようなもんだな。もう一度会いたい……僅かな間でも、それは何とかなった。だからオレも、ここに帰ってきたわけだし」

呪いを受け、心身の崩壊が差し迫っていた頃の男は、死に場所を探すように一人で姿を隠していたというが、

「悔いはないし、今、力尽きるならそれでもいい。でも……——」

「……」

「それじゃ、レイアスやアファイが文句言うし。後半分叶えるためには、もう少し悪あがき、続けるつもりだぜ」

今この、誰より信頼する仲間の下にいるのは、生きようとする意志であると。

男がいかに死に瀕しているかわかる少年は、その不敵な笑顔にやはり俯く。

男の願いを少年は知らない。

しかしおそろく叶わない類のものだろうと、男自身の諦観を感じ、それでも不敵に笑える男に戸惑いの目を向ける。

男は少年との間にある机に置いた、平らな角盤状の物を手に取り小さな布で磨きながら、他愛ない話を続けた。

「あんまり今生で大きな未練残すと、魔物になっちまうからな。オマエはその辺、何でか諦めだけはいいいみたいだけど」

「……諦め？」

それは少年にとつては、不思議な言葉だった。

「オレは何か——諦めてるのか？」

諦めなければならぬ事。それ自体が少年は、今はあまり心当たりがなく、

「未練があると……魔物になるのか？」

自然にそんな事を言う相手に、少年も自然に尋ね返す。

男はニヤリと、紫の目を軽く細めると、

「オレもオマエも精霊の化生だから、我欲が

ヒトより弱い分、『魔』への道は遠いけどな。その分、アファイみたく『魔』に染まった時は厄介だ……余程強い妄執がある気がするぜ」男と同じ紫の目を持つ少年に、自然を基盤とする化け物——精霊や竜はそうしたものだ、と淡々と告げる。

『魔』は死後に魂を初期化し切れなかった化け物だ。だから体が残っていれば何度でも蘇生出来るし、崩れた魂の隙間から、他者を取り込んで糧にも出来る」

「……はえ」

「逆に言えば、そうしなきゃ前の魂だけでは新たな自我を支える基盤が弱い。ユーオンも多分、似た感じなんじゃねーの？」

その状態でも『魔』とならない少年は、相当無理があると男は溜め息をつき、

「早い話。何千年生きてか知らないが、昔の事は忘れた方が、身のためってこった」最後にそう、厳しい所見を告げるのだった。

居間を出て、縁側に一人で座った少年は、夕暮れ時の空を見上げながら。そうか……と、拙く呟いた。

「昔の事を覚えてるから……新しい事、全然入らないのか」

この世界、この家では羽飾りはあまり力を受けられないらしく、答える者もなく。一人、少年なりに受け止めた現状を整理する。

「誰かが消えないと、みんな——いなくなる」

結局、そういう事であるのだと。

昔の事を覚えている『銀色』。

この躰で大過なく生きるために必要な己。そんな不自由な存在をこれまで支えてきた……彼らが『剣』に宿り続けられる理由。

—それ以外に、オマエが今この現世で、時を往く術はないによる—

誰か——何かの音が聞こえたして、俯いていた少年は再び空を見上げる。

今度は視線を、左腕に巻いた羽飾り付きの携帯型の剣に移す。

「……やっぱり、いるんだな」

ヒトの命を奪い、攻撃用の力へ変えられる古い宝の剣。しかし少年の命は少年のまま、剣から放たれる事はなく宿り続けてきた。

それはきつと、少年と剣を遙か昔、一つにした何かは今も少年を守っているから。

世界の全ての『力』——神秘が、『神』の賜物であるのならば。そんな奇跡もきつと、『神』の戯れによるものだった。

「オレが『神』なんじゃなくて……オレ達の中に、『神』がいるだけで」

—しかしオイラは中身——『力』がないから、不完全なんだによる—

その声は果たして、本当にここにあるものなのだろうか。少年はふと、思いを馳せる。

—だからオイラの中身になるなら、オマエは神になるによる—

今までは聴こえる事のなかった遠い声。

悪魔の囁きという方が、納得出来る——
そもそも金色の髪の少年は与り知らぬ何か。

「……冗談、キツイな」
それでも少年は、『銀色』と同じ答えを得る。

「だって——そうしたら、消えるだろ？」

結局はそれが、彼らを選んだ結末だと——

夜もふけてきた頃に、金色の髪の少年は、他の住人が寝静まつている事を確かめてから、その家を静かに後にした。

「……ごめんな、エル」

少年をここに留めようとする、妹の気持ちはわかっていたが。

「眠ったら忘れるし……レンが元気ないと、オレも色々困るんだ」

そのため、魔界に戻ろうと思えば、今のまま鍵を使う方法を探すしかなかった。

少年の、その答えそのものが、今後の行く末を暗示する——運命の訪れだとは知らずに。

無防備に一人で出歩いたりすれば、先日の

黒い少女に襲われる危険性もわかっていたが、「最悪の場合は、無理矢理使うしかないかな」

鍵を壊すつもりで力を解放すれば、一度だけ魔界に行けるはずと、少年は見定めていた。

それでも他の方法で、壊さず鍵を使うため、

少年はある者を訪ねてみる事にしていった。

「あいつの休暇がもう終わるなら……リンも早く行かないといなくなるよな」

ジパングの暗い夜道を、一度ならず行った

ことのある平原を歩き、北の海港に近付けるワープゲートへと少年は向かう。

『ディアルスなら何とか、一人で行けるかな』

体力も気力も拙かったが、黒いバンダナを着けると幾分はマシになり。金色の髪のまま

バンダナを着ける効果を、改めて感じ取る。

黒い翼は闇夜に融けて、月の光から何かの力を受けるようにすら見えた。

少年自身、正直な所、一人でここまでする

気になるとは思っていなかった。この状態なら、家で大人しくしているのが

良い事、養父も帰れるなら帰れと言っていた事を羽飾りからも聞いていた。

「……そうだよな。きつとコレは……オレの我が侘だ」

『銀色』なら多分、ここまでではしないだろう。

自らが曖昧な『銀色』は、差し迫るまで己の願いに気付かず、あまり自発的には動かない。

「でもオレは……忘れたくない」

彼らの願いは同じでも、自覚出来るかどうか。その一点だけでも彼らはずれていく。

そして『銀色』程に現状が観えない少年は、

『銀色』が一人で決めた事には気付かず。

諦めが良いと、紫苑の男に言われた少年は、

その実何も諦めてはおらず。

あくまで己の願いのために、暗い月の道を一心に目的地を目指し。

「初めから——そのつもりだったんだから」

その道の果てを思い。少年はふっと、顔を綻ばせていた。

旅慣れた養父母が知った近道のおかげで、朝方には少年は小さな海港に辿り着き。

ジパングからは北西に当たると、近い半島

『ディアルス』——西の大陸の北東端にある
大國に向かう船へ、乗り込めていた。

小規模な船だが、ワープゲートを通る利点

があり、昼過ぎには王都に最も近い港へ着き。

大人数を運ぶ公共の馬車に乗れば、王都も
すぐで、養父母にここで戸籍を作られている

少年には何の問題もなかった。

「……細かい場所は、誰かに聞くしかないか」
何かのメモを片手に、少年は王都をさまよう。

そして夕暮れ時に、早くも目的地に着いた

少年は、トントンと、ある小さな集合住宅の

一つの扉を叩く。

石造りの建築物が多いこの国では、珍しく
鉄骨の家。王都の端で人家は少なく、綺麗に
整備された石の国道の裏路地に、そのメモの
主の家はあった。

ノック後は黙って待っていた少年を、扉を

開けて迎えた住人は、目を丸くする。

「……——つて、え？ 君——」

「……あれ」

出てきた者の姿の意外さに、少年もそこで、
目を丸くしていた。

「リン………だよな？」

「ユーオン君、よね？」

少年が覚えている姿は、踊り子のような肌の
露出の多い服装で、首元で髪を結わえている
黒髪の女性……羽飾りが元々護衛をしていた
旅芸人一座の、花形の一人を訪ねて、少年は
そこまで来たのだが。

「それ——メガネ？」

「ユーオン君こそ、バンダナなんてするのね」

黒髪の花形は、襟のある上衣に足首まで包む
下衣と、艶とは無縁の服装に眼鏡をしており。
互いに互いの意外な恰好に、しばしポカンと
していたのだった。

花形は快く、少年を迎え入れてくれた。

「びっくりしたわ。もうすぐ休暇も終わるし、

本当に良いタイミングね」

「……良かった。まだレストに帰ってなくて」
護衛だった羽飾りの妖精と秘密の恋仲で、
しかし浮気心を出した相手を、暴走した力で
殺してしまった花形は。

上手くいけば、それを助けられると言った
少年に、何かあれば訪ねてほしいと、自身の
住処を書いたメモを渡した経緯があり。

「お茶飲む？ それともユーオン君はお酒の
方が良かったっけ？」

ふふふと嬉しそうな花形に、じゃあお酒でと、
遠慮なく頼む少年だった。

少年を、背が低い柔らかな長椅子に座らせ。花形は何故か、黒く縦長の大きな家具の前にある、背もたれのない椅子に座る。

「……それ、何なんだ？」

「え？ ピアノ、見た事ない？」

こくこくと頷く少年に、氷の浮いたグラスを渡した後で、花形は黒い家具の蓋を上げると、現れた鍵盤を控えめに数本叩いてみせた。

「……………」

ジパングでは見た事も聴いた事もない音を出す楽器に、少年はこの花形を訪ねた目的も忘れて、ピアノという楽器に見入る。

「……キレイな、音だな」

「でしょ？ 私も好きなのよ。他にもねえ、

「これもキレイな音が出るのよ」

今度は何やら抱えるような形の物を背後から取り出し、何本も張られた金属の弦を弾くと、また不思議な音の出る楽器を少年は食い入るように見つめる。

「こっちはギターって言って、私がマトモに使えるのはこの二つくらいだけど。なかなかレストでも採用されないし、完全に趣味の物なだけだね」

「……それは何のために、使うものなんだ？」少年が尋ねると、花形は少し躊躇いを見せたものの、

「私、本当はレストでやる軽業や芝居より、歌を作るのが好きなの。でもイーレン以外、イイって言うてくれるヒトはいなかったなあ」苦笑しながら、懐かしむように話し、そこで改めて少年の方へと向き直った。

「ところで、ユーオン君はどうしたのかしら？」

一人でジパングからここまで来たの？」

「……………」

こくりと頷く少年に、花形は眼鏡の中の目を不思議そうに開いて少年を見つめる。

少年も少し、先程の花形のように躊躇いを見せながら、

「レンがずっと、頑固だから。あんたなら、説得出来るかなって思ってた」

「レンって——イーレンのこと？」

少年が腕を掲げて見せた羽飾りに、元はその羽飾りを自らのペンダントにしていた花形は、困り顔で笑って頷き。殺してしまった妖精の恋人から形見欲しさにもぎ取った羽が、まだそのままである事に苦笑う。

「この羽が元の形に戻れば、レンはまだ目を覚ませるのに。この形になってるのは、レン自身の意志だったってナナハは言ってた」

「ナナハ様が？ という事は、ナナハ様程のヒトでも、これは戻せないの？」

花形の上司であり、希代の魔女である相手の見立てに花形も驚いたようだった。

「でも、説得って？」

「うん。声はずっと、聞こえてるんだ、コレ」羽飾りを横目で見て言う少年に、花形はええと、一気に青ざめた顔付きとなった。

「そんな……！ それじゃ私が毎晩、それを着けてた頃に喋った事とか、全部イーレンに筒抜けだったの!？」

「……………」

黙って頷く少年に、いやあー！ と花形は、両手で真つ赤な顔を塞ぎながら、全身を硬直させて俯く。

「何、妖精って何なの、そんなのアリなの!？まさかユーオン君、変な話とかイーレンから聞いてないわよね!？」

「……レンは、リンの病んでる所が面白いと、そう言ってたけど」

「やーめーてー！ 黒歴史なの、あの頃は私どうかしてたの、イーレンも殺しちゃったしおかしくなってたのー!」

羽飾りから、具体的内容を聞いたわけではない少年は、それ以上は追及しない事にした。

「とにかく——レンはこのままでいたって言うてるんだけど。元に戻れるのに、オレはそれ、どうなのかなって思ってる」

「——?」

半ば涙目で、頭を抱えつつ顔を上げた花形に、困ったような笑顔で少年は見せた。

少年は慎重に、その妖精の現状を花形へと説明する。

「レンは今、オレの剣の一部みたいな感じで……剣でいる方が楽しいから、もう妖精には戻らなくていいって言うんだ」

花形はそれを聞き、あー……と、涙目ながら納得したような顔付きとなる。

「イーレン、剣マニアだったものね……元々刃の妖精だし、言いそう、ホントに」

「でもそれじゃ、オレとか限られた相手以外、話す事も出来ないし。リンみたいに、レンがいない事を悲しむ相手だっているのに、このままじゃいけないと思ってる」

「……………」

難しい顔で話す少年に、花形はしばらく、両腕を組んで考え込んだ後——

次に顔を上げた時には、何とも形容し難い爽やかな苦笑で、花形は少年を見つめて息をつくように口にした。

「……イーレンがそれでいいなら、それでもいいんじゃない?」

「——え?」

「私は、殺したのは自分なんだから、我が俣言える立場じゃないしね。たとえイーレンが戻ってきて、よりを戻すかって言われると、それも微妙だし……」

それは花形が、少年に気を使って言っている言葉だと、少年はすぐに感じ取る。

「このまま一人ぼっちでいることが、私への罰なんじゃないかしら。きっとイーレンも、もう私のことなんて忘れて、剣の生活を謳歌してるんだと思うわ」

どちらかと言えば、これが花形の本心であり、そして羽飾りも戻ったとしても、花形だけを大切にするような性質でもなく。

うむむと少年は、悩ましく黙り込む。

ゴメンね。と花形は、悩ましがな少年に、肩をぽんぽんと撫で叩きながら、侘びを口にした。

「君には関係ない事なのに、悩ませちゃってゴメンね。私とイーレンの問題なのにね」

「……………」

「私も、どうしたらいいかわからなくて……あれからずっと、時間が止まったみたいなの。

こんな私に、新しい誰かを好きになる資格もないし、イーレンの笑顔にまた会いたいけど……私だけを見てなんて、都合のいい願いが叶うはずないもの」

「……………」

羽飾り付きの鍵を巻く、少年の腕を愛しげに両手で花形は包む。

「そういう相手って、初めから知ってたもの。

変わってほしいなんて、私の我が侘だし……」

気が付けば、窓の外は大雨が降りしきり、夕暮れとは思えない闇が訪れていた。

とりあえず——と。

何と言って良いかわからなかった少年は、素直な気持ちだけを口にした。

「あんたは多分、もつといい奴を探した方が、いい気がするけど」

「……ありがとう。でも、それも怖いのよ」苦笑しながら花形は、少年に背を向けると、

澱む空気を飛ばしたいかのように、一つ二つ、鍵盤を静かに叩き始めた。

「気持ちが高ぶっちゃったら、何をするか、自分でもわからないもの……私みたいな妖、

必要以上に誰とも関わらず、大人しくしてる方が世のためだと思うわ」

「……………」

その花形の惧れは、少年には——

とても近い心を、すぐ身近に知っており。

黙って花形の後ろ姿を見つめる少年の前で。

花形は、雨音に併せて一つの曲を奏で始めた。

「……………」

初めて耳にする、方向性を持つて編まれた歌という旋律に。そこに流れる花形の心や、音そのものの刺激に、少年の鋭過ぎる感覚はしばらく占拠された。

時間が止まったみたいだと……そう言った花形の声が、もう一度聴こえた気がして。少年は思わず、その声をそのまま口にする。

Stop & Start... Freeze with terror...

花形は一瞬振り返ったが、気のせいだと思っただのか。そのまま物憂げな調べを奏でる。少年は再び、聴こえた声をそのまま謳った。

Stop & Start... Freezing to death...

声がよく聴こえるように、目を閉じて耳を澄ませ、少年はその先も花形の心を謳う。

一通り、静かに曲を弾き終わった直後に。

花形はとても驚いた顔で、少年を振り返って、ぶるぶると両手を握り締めていた。

「凄い、ユーオン君……どうしてわかるの？」

「——へ？」

「これ、私のオリジナルなのに……つい最近、

作ったばかりなのに。歌ってくれたの、私のイメージ通り……まだ歌詞は作れてないのに」

それにと花形は、目端に涙まで滲ませて、少年をまっすぐに見つめた。

「凄くいい声、ユーオン君。素朴で透明で、なのに感情がこもって……ああもう、これ

以上は言葉に出来そうにないんだけど！」

そしてがしつと、少年の両手を、突然花形は強く掴むと。

「——私と組まない！？一緒に音楽やろう、ユーオン君！」

呆気にとられる少年に、叫んだ花形だった。

それからいくつもの花形の音楽を披露され、

聴こえるままの声を少年が謳う間に、あつと
いう間に夜は更けていき。

「本当に、こんな時間なのに行っちゃうの？」

ユーオン君

「ああ。リンも無理そうなら、後はナナハを
訪ねるしかないし」

魔界に繋がる例の鍵を、化け物の一人である
花形にも使えるか尋ねてみたが、予想通りに

力が足りないという答えであり。

泊まっていけばいいという誘いをあつさり

断った少年に、花形は心から残念そうにし、

「凄く楽しい時間だったわ。ユーオン君本当、
才能あると思う……良かったらまた、一緒に
何かやりましょ」

「そっかな。リンの役に立つなら、何処かで

何か出来るといいけど」

そうして笑ってその家を後にした少年だった。

「……何やってるんだろ、オレ」

すっかり雨は止み、濡れた石が月の光を拙く
反射する夜道に出てみれば、目的は何一つも
達成されていない事に少年は気付いた。

「さすがに眠いな……これ、ナナハの所まで
持つかな？」

一応羽飾りに、覚えてほしい事柄は言っては
あるので、とにかく魔界に行く事が優先だと
少年は諦めるしかなかったが。

あまり長くうろろすると、妹や何やらが
少年を見つけてしまいかもしれないと、一人
苦笑した時の事だった。

「——今晚は。こんな所で……夜のお散歩？」

ぴたりと立ち止まる少年が、向かっていた
道の先で。冷たい石の建物にもたれかかり、
黒い少女が不敵に微笑んでおり。

黒い少女が不敵に微笑んでおり。

「……………」

少年は瞬時に表情を消し、目の黒い少女
……今まで会った時と違い、鎖骨までの髪を
首元で一つに束ねる相手を黙って観る。

「……どうしたの？ 自分を狙う相手の事も
もうアナタは忘れちゃった？」

にこにこ尋ねる黒い少女は、これまでの
基本は凜とした雰囲気は影形もなく。

少年はすぐさま、その違和感を尋ねる。

「アンタ……誰だ？」

建物から離れ、少年にまっすぐに対峙した
黒い少女は、その後は気の抜けた緩い口調で
話し出した。

「うーん。やっぱりオレには、こういうの、
合わないなあん」

これまでの違和感は演出であつたらしいが、
今の口調も、少年が何度か会った黒い少女の
ものとは程遠い状態であり。

少年は無表情のまま、見た事のない相手に、

おかしい事を尋ねた。

「アンタ——オレと、何処かで会った？」

少年は相手を知らないが、相手は知っており、
何かの目的で現れていると。そう感じていた

金色の髪の少年に、黒い少女の姿をした者は
悪びれなく、また不敵に笑った。

「会ったぜ？ オマエをオレにくれって——
その時、お願いしたんだけどな」

それが夢だと思っていた少年に、シビアな
現実を伝えるように。

おそらく、黒い少女の躰を借り受けている
何者かは、新たな寄生先を見つけたと言わん
ばかりにここにいる事を、現状把握に優れた

少年はすぐに感じ取り。

「……全然、覚えてないけど」

近日の記憶がとにかくあやふやな少年は、
相手が何者なのかは結局わからず、

「でもそれは——オレには出来ない」

それでも確かな答えを返した少年に、相手は
お？ と、意外そうな笑顔を向けてきた。

少年は来るべき事態に備えて、懐からその
切り札を取り出す。

「この躰は、レンのものだ。オレが勝手に、
アンタにあげていいものじゃない」

「なるほどねえ……でもそれってき、もしも
それがオマエのものなら、オレにくれるって
言ってる？」

あくまで不敵に笑う相手に、少年はこれ以上
問答を続ける気はなく。

そのまま無言で、白く光る月を背に水平に
小銃を構えた少年に。相手は心から楽しげに
……あくどい顔付きで笑った。

「……いいぜ。あがいてみるよ、少年」

少年が何故、その武器を選んだのか。
それすら知るような、悪魔の微笑みと共に。

＊

金色の髪少年がバンダナを着けている時、

黒い羽の出納は、わりと自由に出来ており、

人目があったので納めていた羽を解放した

少年に、黒い相手はへえと楽しげに、半歩程
ふわりと後退しながら呟いた。

「やつぱりヘンだよな、それ」

元々人気のない、王都の端の広い国道で。

羽を背に銃を構える少年と、銃を向けられた

丸腰の少女では、傍目には完全に少年の方が

有利だったが、

「どう見てもオマエの羽じゃないのに、何で

使えるんだ？ オマエ」

余裕しかない表情で少年を見る黒い相手に、

少年には答えを返す余裕一つなく。

元々、省エネ型である金色の髪少年は、

化け物と渡り合える力は無いに等しく。

「その銃もそうだけどなあ。羽なんて更に、

複数の気配を感じるしな……でもそれを、
全部ひっくるめてオマエは使ってるな」

少年自身の力はあまりに弱小で、戦う道を

選べるはずもなかったのだが。

自ら以外の力を、我が物として使う少年の
特技は、目の前とギリギリ渡り合えると

その現状把握能力は告げていた。

「……………」

黒い相手はそこで、少年の銃にのみ注目を
していたが。

残った手に少年は、もう一つの切り札を、

腰元から自然に取り出して握る。

「それじゃー。お手並み拝見といこつかな？」

にこりと笑った黒い相手の周囲から、半瞬後、
鋭さと速さを併せ持つ熱風が舞い上がった。

「……………!!」

まっすぐに少年を目掛けて襲い掛かる熱風に、
少年は銃を下ろし、もう片方の手の切り札を
咄嗟に振り上げる。

「——お？」

その手にあつた短刀で、両断された熱風は、
それだけで何故か全ての攻撃性を失い、黒い
相手は目を丸くする。

「何だそりゃ。その短刀……凄くイヤあな、
反則の予感がするな？」

再び相手は、今度は激しい炎を出現させたが、
身の回りを取り囲んだ炎を、それすら少年は
短刀のみで斬って捨ててしまった。

「……………むむむむむ」

両腕を組んで不服気な顔をする相手は、その
短刀に込められた力……養父から渡された、
それも養父の右前腕の骨から作られたという
短刀に、『力』に介入する事の出来る力が、
高密度に詰まる事は知るべくもなく。

しかし黒い相手は、戦闘や『力』について、

かなり広い知識を持つているようだった。

「何となく、何でも無効に出来るみたいだな、それ」

「……」

「似た反則を使う奴、知ってるんだけどなあ。

あいつの力でもないっばいし……まさか他に、同じ力を持つ奴がいたとはねえ」

『力』に介入出来る養父の強みとは、まさにどんな『力』でも『無意味』に出来る事で。

何かあればこれで身を守れと、自らに最も相性良き短刀を手放してまで、養父は少年の身を案じて護身の術を与えていた。

銃も短刀も、少年自身が激しく動けずとも、十分に効果を発揮する使い道を有しており。

黒い羽と雨上がりの大気も少年に力を与え、そもそも少年は、込められた力を細切れに、しかも大きく爆発させて使える特性を持ち、短刀の力も当分は尽きそうになかった。

—攻撃は……何とか防げそうだ—

黒い相手を再び銃で牽制しながら、少年は襲い来る眠気を必死に堪え、頭を働かせる。

—後はどうやって、視界を奪うか……—

初めから少年は、勝てるとは思っていない。

目的はただ、身を隠せる手持ちの護符を使い、魔界に帰る鍵の力を解放する隙を、相手から引き出す事であり——

『銀色』がこの場に出れば、返って消耗が激しく、逃げる事が難しくなる。

まずもって『銀色』の特技は殺す事であり、何か古い縁を感じる黒い少女の躰を使う者を、傷付ける気は彼らにはなく。

だから現れないのだろうと、少年は自らの役割を認識していたが。

「……——」
それでも何故か、妙な悪寒が胸中を走る。

胸騒ぎを振り払うように、少年は銃を握る

手に力を込めた。

—これなら多分……出来るはずだ—

天上の聖火を宿す身と、銃を貸してくれた

悪魔の女性は言った。

その言葉の意味を知らない少年ではあるが、聖なる天の火というと、思い浮かぶのは一つしかなく。

月の有無で、効果が変わるといった女性の言葉もそれを後押しし。

「……お？」

自身にずっと銃を向ける少年を見ながら、黒い相手は少年がそれを使う気だと悟った。

「そう——来なくちゃな」

その銃を防ぐ手立ては乏しく。しかしすぐに撃たない少年の隙に、身代わりの黒い鳥達を、相手が呼び寄せると少年は確認し——

黒い相手の身代わりをあえて待った少年は、暗い空と白い月を背に、重い引金を容赦なく引くと。

起こった『力』は、少年にも予想を遥かに超えた規模だった。

「……………!!!」

少年達が向かい合っていた広い石の国道の、道幅を大きく超えて、道沿いに散在する家や林を巻き込んだだけでなく。

黒い相手を中心とし、道の幅以上の直径の真円内に、天空からまさに無数の白矢としか言えない光が降り注いでいた。

合わさった光の柱に、完全に飲み込まれた相手を、残光が煌めく中で結果を確認せずに少年は場を離脱する。

「これ、ヤバ過ぎるだろ、マヤ……………」
少年の特性もあいまって、まだまだ何度も使えそうな銃を、焦り顔で懐に仕舞う。

相手がどうにかなったとは思わなかったが、

この規模の力を黒い少女に向けた嫌悪感を、苦い顔で噛み締めて少年は走った。

そんな少年に、するりと何か――

緋く長い影が、陰に隠れるように追い迫る。

少し離れた路地裏に入ると、少年はすぐに、隠術の『力』を秘めている札――花の御所の術師からもらった内の一つを使った。

「少し様子を観ないと……………」
魔界に繋がる鍵の力を解放しようと思えば、かなりの集中力と体力が必要であり、それが確実に出来る状況であるかを見極めなければいけなかった。

石の家に囲まれた袋小路で、少年はふうと、疲労を吐き出しながら壁を背に座り込む。
「これで見つければ、チェックメイトだ」
隠れた先が行き止まりで、人目も全くない。そんな状況に一人苦笑する。

この石は光を反射するのか、先程の光柱で、道や人家に被害は無かった。

黒い少女を守る黒い鳥達が、幾羽も光柱の直撃を受けたが、それも不思議と致命傷ではない事を逃げながら感じていた。

「……………何か耐性があるのかな、あいつら」
そもそも先程の光が何であるのか、それ少年には詳細はわかっていないが。

それは少し前まで、聖魔を名乗った同居人、紅い少女の背にあった羽の光に似ていたと、その特性を把握する。
「……………太陽や聖地で、元気になるんだよな、確かあれ」

強まった眠気を堪え、息をひそめ、少年は数刻、大人しく待ったが。黒い相手が追ってくる気配は微塵も感じず、それならと必死に、疲労の強い鉢に喝を入れ――
吐き気と共に立ち上がった、その時だった。

「……………え？」

少年はただ、その緋色の影に愕然とする。

「なん……………で……………」

立ち上がったって顔を上げた刹那に、ようやく

気付いたある追跡者。

黒い少女が以前に垣間見せていた緋い蛇が、少年のすぐ足下で、かま首を擡げていた。

「……………銀……………？」

現状把握に優れる勘の良さを持つ少年が、その追跡に気付けなかった事……………。

直観の知覚が程々に抑えられた金色の髪の少年はともかく、その内の『銀色』までが、反応せずに訪れたこの事態は——

少年からすれば、有り得ないこと。

目前の危機を確実に探知し、そう断言する。

緋い蛇は寸分の容赦もなく、爬虫類特有の無機質な鋭い目で少年を見据え。

人間のみならず、化け物でも反応の難しい

速さで瞬時に蛇は跳び上がった。

「がッ……………！！！」

少年の足下から、顎に激突するように首に

蛇は喰らいつき。四つの毒牙が顎の付け根に激痛を伴って喰い込む。

「っあ——ああああ……………！！！」

毒牙を通して注入された何かは、緋い蛇が

今日まで秘密裏に守り通したものと。

目的を遂げ離れた蛇の前、血を嚙んで喉を押え、軀を折って倒れた少年は悟る。

その傷口からある『力』が……………この少年に

だからこそ、全身を侵して広がっていた。

「あぐ——う、ああッ……………！！！」

その絶え間ない侵蝕——軀が崩れるような

悪寒が、少年の視界を霞ませていく。

「っ……………そういう、コトか……………」

このまま、雨上がりの石畳に溶けていく。

己が形を失う危機を、止められるとすればただ一つ……………『銀色』が得意とする、全ての

『力』に通じる白光だけと思われたのだが。

「わざと、だな……………銀……………」

どんどんと少年の意識が遠くなっていく中、

それでも現れない『銀色』と少年のずれ……………『銀色』の行動や言動、声に出されなかった

事柄を把握出来ない金色の髪の少年は、その

隠された願いをようやくよく自覚し。

暗闇で喉を押え、のた打ち回る力も消えた少年の元へ。やがて、ソレはやってきた。

——悪いなど。開口一番にあっさりソレは言った。

「オレ、その銃の効力は知ってるんよ。何せ……うちのオフクロの秘蔵だしな」

横向きに倒れ、喉を掴む少年の真横に立ち、黒い相手は緋い蛇を肩の上へ迎える。

「オレは囷で、本体はこつち。オマエが銃を使えば、後は逃げるだろーと思ってたし……

太陽の眷属であるアヤに、あの光はほとんど無効だからな」

ぴくりとも動かさず、硬く目を閉じた少年の

横で、黒い相手は屈んで少年の全身の状態を確かめ始めた。

「……驚いたな。元々、同じ自然の化生……相性いいはずの精霊とはいえ。オマエ、竜の因子とか持ってたか？」

緩い声が段々と、影を潜める黒い相手は、

「テイアリスが……養子にするわけだ」
何故かその——養母の真名を、陰しく呟いた。

そこで僅かに顔を歪めた少年に気付いてか、黒い相手は自らの事について話し出す。

「オレは元々アスタロト……蛇の悪魔だけど、ワケあって、神様に殺されてさ？」

養母の義理の祖母である、悪魔の女性の息子。養母からは叔父と言える相手は、養母より

幼げな声調で先を続ける。
「色々あって、『竜の墓場』に迷い込んで、

どうやらオレには龍神の素因があつたらしく、そこで『逆鱗』を手に入れたおかげで、この

世に戻ってこれただけだな」

膝をつく黒い相手の肩から、緋い蛇が再び少年の喉元に近寄る。

「コイツには、その『逆鱗』——今のオレの依り代を預けて。ソレをオマエに遷させてもらったわけだが……」

少年の手元、顎から首にかけて、養母の額に

刻まれた蛇と似た形の紋様が——青白い光で浮かび上がりつつあった。

そして更に、少年の髪は銀色へと変わり。『馴染むのが早過ぎるな。本当にオマエ……

素材もイイけど、全く抵抗してないか」
黒い相手はやれやれと、少年をその状態に

したのは己でありながら、溜息をつくように両肩を竦めた。

「テイアリスが悲しむぜ？ と言つても……こうなる事、あいつはわかってたはずだけど」

頭痛を抑えるようにソレは片手で頭を抱え、険しい顔付きで少年を見下ろす。

「あいつの事は、甘く見ないで正解だって、忠告しといたんだけどな」

もう片方の手は、少年の頭に当てられ。その手が触れている場所から、徐々に少年の髪

の銀色が、今までとは少し違った緋みを帯びた金へと変わり始め。

「それじゃ……望み通り、オマエをもらうぜ」
冷然とそれだけ、告げた直後に。黒い少女は

意識を失い、少年の横に倒れ込んでいた。

その少年達の願いは——本質は同じでも、結果としては大きく違ってしまったていた。

自らの意志で軀を動かすための魂の力が、残り少ない己をどう扱うのか。

どちらの少年も、少年自身が動き続ける事にはそこまで興味は持っておらず。

「オマエが望むなら。後一つ、邪道な方法は無くはないがな」

『神』を名乗る黒い男の声に、口元を拙く和らげた少年には、その意図がしっかりと伝わっていた。

金色の髪の少年には、ある手段の一端が。銀色の髪の少年には、余す事なく全てが。

自らの力で己の回転を保てないのであれば。自ら以外にその軀を渡せばいいのだと……そもそもは妹をこの世に還し、羽飾りを元に戻したかっただけの少年の願いは単純であり。

しかしそこで、誰にその軀を明け渡すのか。

金色の髪の少年と銀色の髪の少年の願いは、ずれていた事を『銀色』は隠した。

——あたしの運命は炯に変えられてしまった——

その黒い鳥の嘆きは、古い縁を覚えていた

銀色の髪の少年には、聞き逃せる事ではなく。

——会えるよ。ソイツはあんたの近くに——

それが根本的な解決策ではないとしても。

少年に今出来る事は、ただ一つだけだった。

冷たい石の上に、しばらく横たわっていた少年は、やがてゆっくり……月の光を緋みの鬱金、柑子色の髪に映しながら起き上った。

「……………」

倒れていた時に緩まった黒いバンダナが、

はらりと落ちた下で。胡乱な目は少しずつ、紅い覇気を宿すと共に青白色に染まり。

その養母とほぼ同じような目の色となった、柑子色の髪の少年は、隣に倒れた黒い少女に

気付くと……フ——と。

困ったような穏やかな顔で、苦く微笑み。

「…………アヤ…………」

座ったままで黒い少女を抱き起こし、その

狭い肩にしっかりと両腕を回すと。

待ち望んだ時を、大切に噛み締めるように

……気を失ったままの少女を、愛しげに目を瞑り、強く強く少年は抱き締めていた。

何よりも長く感じられた、束の間の一時に。

その後、少女を石の壁にもたれさせると。緋い蛇を肩に乗せて立ち上がった少年は、月光の下で最大限に——不敵に微笑んだ。

「さてさて。まずは何から、始めたもんかな」
少年が大切にしていたバンダナを、首の傷を覆うようにしつかり巻くと、うーんと全身を少年は伸ばした。

「とりあえずどつかで、服でも買おうかな……
コイツそういや、金持ってんのかなあ？」

不敵な表情はやがて、雲に隠れた月明りを失って見えなくなり。暗闇で少年は、懐から慣れ親しんだ玩具を取り出す。

「う……ん……」

壁にもたれさせられた少女が、眉間に皺をよせながら、うつすらと黒い目を開けると。

「……——つて、えー!？」

黒い少女に向かって、小さな銃を向けている謎の少年に気付き、黒い少女は焦ってすぐに立ち上がった。

それを見越していたのか、少年は遠慮なく、その銃の引き金をひくと——

天上の聖火、陽の光を貯めこんだ月という後援がなく、闇に閉ざされた真の夜には……

大気 of 熱を奪う仕組みとなつている『力』が、いかんなく真髄を發揮し。

「なっ……!!!？」

少年と少女を隔てるように降ってきた巨大な雹に、少女はその路地裏の袋小路に、しばし閉じ込められる事となつた。

「これは、フルーレテイの氷……!!？」

そんな檻は本来、少女には意味を持たないが、そうした足止めを仕掛けられた事そのものに、わけがわからず少女は愕然とし。

「何のつもり……? アイツ——」

現在その攻撃が出来るのは、先日から様子を見ている不秩序な『神』疑いの少年だけだと、端整な顔を陰しくさせる。

黒い少女が力任せに巨大な雹を溶かした後、少年の姿は影形もなくなつていた。

「……——あれ?」

そして少女は、自身に訪れた変化にも気付く。「何処に行つたの?」

それに縁のある悪魔を探す傍ら、常に首元に収まっていた緋い蛇の不在。

蛇の正体もわかっていなかった少女には、それが消えた意味はわからなかったが。

キヨロキヨロと、ここまで共に旅を続けた

相手を慌てて探す黒い少女を、近くの建物の屋上から少年は見下ろしていた。

「もつと他のこと心配しろよな、あいつ」

覚えない場所で意識が戻り、突然強い氷の力を放たれた状況の相手に、少年は苦笑う。

「目離すの心配だなあ。頼むぜ、カイ?」

名残を強く惜しみつつも、ある義理のため、そのまま闇に消えていった少年だった。

さあ、わからない。

相手の姿も見えない暗闇で、少年は淡々と正直に答える。

レンの体は、レンが取り戻せばいい。

それが一番簡単で確実と、見知らぬ龍神の逆鱗を埋め込まれた相手に語りかける。

その暗闇がいったい何処で……そこにいる自身が誰であるのか。

少年はしばらく、己の名前も思い出せず、自らの形もわからずに、ただそこにいた。

「何なんスカイツは、師匠を強引に竜へと戻したっス！ 今の師匠、精霊としての姿も失くして、『力』だけになっちゃったっスよ！」

「違うっスよ、師匠！ オレは師匠だけに、オレの体を使ってほしいんです！」

「……——師匠！ キラ師匠！」

……そうなのか。

……どうして？

少年をずっと呼び続けていた声に気付き、それが少年の名らしいとは思ったものの。

だからこんなに全てがあやふやだと、遠い昔は竜という自然の血をひいた少年は笑う。

戻る気がないなら、誰が使っても同じだと不思議がる少年に、相手は食い下がる。

何もかもがピンとこないまま、少年を呼ぶ

相手の名前は思い出し。相手があまりに必死そうなので、暗闇を揺らして声らしきものを少年は造り出す。

「オレはあんな奴に体を貸すのは嫌っス！ 頼むから師匠、アイツから自分を取り返して下さいよ！」

「師匠はオレの体を奪ったと思ってるけど、それは違うんです！ オレを助けるために、師匠は自分を犠牲にしたんですよ！」

何をそんなに、騒いでるんだ？ レン。

その声には何故か、申し訳ない気が少年の内には湧き上がってきたものの。

……？

「キラ師匠——気が付いたっス！？ 何処に

そう思うならと——

そうしてそれは、彼らが同じ躰に在る事にな

いるんですか、キラ師匠！」

相手から感じたある答えを、少年は伝える。

なった真実を叫んだ。

「オレはあの時、完全に死んでました。でも
師匠は、剣に潜ませた師匠の竜の眼の力を
使って、オレの体を蘇生させたんです」

そこまでは少年も知っていた事だが。
しかし相手は、その事実の内情を口にする。

「そこで竜の眼を使わなければ、師匠は多分、
オレの体がなくても生き物に戻れたはずです。
自然の『力』をヒトの形にする竜の眼の力を
一度解除して、師匠は『力』に戻って、剣に
それを遷して——『力』も竜の眼もそのまま
だから、解放さえ出来れば元の形に戻れた。
それを師匠は、自分が元に戻る事を捨てて、
オレに竜の眼を使っちゃったんすよ！」

『力』を宿せる剣と一つになった少年は、
少年に戻る事も出来たのだと。だから、剣と
少年を守る『神』の内で、ただ封印の解放を
待てば良かったと相手は言う。

「師匠は多分、わかってたはずですよ。でも、
目の前の助けられる精霊を見捨てなかった。
良くも悪くも心霊ってヤツは正直で、本質の
まま行動しちまう。師匠は根っから、誰かの
ために自分を捨てる大バカ者なんす！」

それがわかった相手は、一度完全に死した
事もあつてか、様々な執着を失くした達観で
新たな環境に適応し。
元は自身の体を使う少年を、心から慕って
そこにいたのだと本心を吐露した。

「このままじゃ師匠達、みんなまとめて今の
アイツに吞まれちゃいます！ アイツと師匠、
何だか近過ぎるんです。師匠が消えるなんて
オレ、嫌ですからね！」

魂の拙かった少年は、逆鱗という魂じみた
『力』に喰われつつある現実がそこにあった。

元々逆鱗は、自然の脅威である竜、または
神としての龍の、巨大な力を制御するために
備えられた人格と言うべき、『力』の意志を
反映する秘宝であり。

逆鱗を宿す事は『神』を降ろす事に近く、
自らを失い逆鱗に乗っ取られる竜は、古くは
多く存在した事を少年は知る由もないが。

何より、その逆鱗の主は、少年と古い縁を
持つ者……正確にはずっと少年の傍にいた
『神』と、縁のある蛇の悪魔だったために。
その蛇すら驚く程、少年はたやすく逆鱗に
馴染み、既に己を失いつつあった。

「聴こえますかキラ師匠！ お願いだから
応えて下さい！」

それを必死に留めんとする相手に、少年は
……まいったなと、暗闇の中で何となく軽く
笑った。

そもそも少年は、とつくに限界だった。

それを留めてくれたのもこの相手だ。

それでも決して覆せない現実……どの道、

少年はもうすぐ変わってしまう未来がそこにあった。

俺はもう——これで十分だよ、レン。

もういいんだ、と。暗闇で今も少年を呼ぶ

相手に、少年は静かに……穏やかに伝え。

その答えに相手は、悲しげに少年を呼ぶ。

誰かが消えないと、みんな——いなくなる。

遙か昔から長い時を越え、それでも記憶を

保ち続けた少年は、それこそが魂の負担で、

その思い出を捨てて新たな己にならなければ
いけない事を……新たな己自身が拒否した。

「だって——そうしたら、消えるによる？」

ぼわりと、何もない暗闇の中で、不思議な

青い光が突然そんな声を発していた。

「そうすればキラが持つ記憶は消えるによる。

それは、キラが消えるのと同じ事だによる」

青い光は段々と、人影と言え程に縦長に

形を成していく。

「でもそれは別れじゃないによる。ただ単に

変わるだけで……キラがキラだったことは、

いつまでも消えないによる？」

それはやがて、あまりにも見慣れたある姿

……金色の髪で紫の目の、尖った耳の少年に
なる。

困ったような顔で、何処にいるとも知れぬ
少年に微笑みかけていた。

……アンタは、誰なんだ？

自らと同じ存在でありながら、自ら以上に
何かを持った者に、少年は拙く問いかける。

「コイツは『声』による。キラがあまりにも

あやふやになったもんだから、仕方なくまた

オイラを借りて話しているによる」

……？ 『声』……？

「キラと一つになったオイラによる。キラは

オイラも消さない事を望んだから、『声』が

オイラの代わりにキラになって、剣にキラを

繋ぎとめたによる。『声』もオイラとキラを

消したくないから、みんなが残れるように、

『刃』に体に戻ってほしかったによる」

それは遙か昔に、少年が呑み込んだ一つの

『神』の抜け殻で——数千年の時を越えて、

今も時間を止めたままの少年に語りかける。

「キラは、昔の事を忘れて変わるくらいなら、みんなで消えたい。そう願ったなによる？」

「生まれ変わりに意味はないによる。もしも……キラがそれを、忘れてしまったのなら」

記憶を捨て、変わってしまった自身の生を繋ぐより、その蛇の糧になると少年は願った。

……。

少年の沈黙は、間違いなく肯定だった。

長過ぎる時を越えてきた少年が出会った、大切だった誰か達と近い存在。それが誰かに近いとわからなくなる事……

しかしそれは、変わってしまった自身——金色の髪の少年の願いとは少し違い。

『声』もキラに忘れさせたくないによる。

だってそれは……忘れたくないのは、キラが生きてるからだによる」

その時こそ、本当に誰か達がいなくなると、少年はそれだけを懼れていた。

『刃』は妖魔から『神』になりかかっている。今オイラは『刃』と喋っているによる。キラが『魔』にも『神』になるのも嫌なら、

『刃』にまとめて任せればいいによる」

青い光から金色の髪の少年になったそれは、平和に笑いながら先を続ける。

「エルにわかるのも、レイアスとアフィだけによる。その他のヒトは、キラが忘れれば、もう誰が誰なんて意味はなくなるによる」

何になろうと、自身は変わってしまう。それを拒み、時間が止まったままの少年に、そのままで良い方法をそれは探していた。

「もう誰も、キラの事は……キラが覚えてるヒト達の事は、覚えてないによる」

せっかく再び巡り会えた、大切な誰か達。それが大切だった己を失う事は、今ここで少年が消えるのと何が違うのか。

『刃』がどうなっても、キラが魂を保てるわけではないがによる。眠るキラをそのまま置いておく事は、『刃』なら出来るによる」

忘れたくない願った少年。

それは何に根差した心なのか、金色の髪の

少年は知っていたと儂く微笑む。

「それなら……せめて誰かのためになる形で、キラは消えたいんだなによる」

少年は知っていたと儂く微笑む。

キラは消えたいんだなによる」

蛇とは違い、その相手と少年が同化する事はないとそれは笑う。

「まあ『刃』は、自分が体に戻れば、キラはもう絶対体を使わないと思つて拒んでるから、それでオマエ達はすれ違つてるによる」

今の蛇から、自ら体を取り戻そうとしない相手にも苦笑い、それは改めて――

形無き暗闇に留まった少年に、その希みをまっすぐに問いかけた。

「キラは……このまま、消えるのかによる？」

この闇に留まるのであれば、それは時間の問題だと、少年が置かれた現実を告げる。

「キラが消えれば、『声』も消えるによる。

金色も銀色も、ユオンは本当に……世界からいなくなるによる」

それは変わる事ですらなく、真の消失だと伝えるように。

……。

今はただ、闇の一部である事しか出来ない少年に、金色の髪の少年は手を差し伸べる。

「……忘れたくないキラを、消してしまつて良いのかによる？」

今すぐ彼らの抱えた問題を、解決する事は出来ないとしても。

消えてしまう事を希むのはまだ早いと――『声』は少年の、最も深い闇を暴く。

「忘れたくない。自分でありたいと思うのは、生きている証だによる」

例えそれが、変わってしまったたくない思い、時を止め続ける呪いであつたとしても。

「キラはまだ……生きたいはずだによる」

相反してしまう事になつた思いの中で、元々、

行くべき所がわからず少年は立ち止まり。

ただ膝を抱えている事をそれは知っていた。

何故なら少年は……。

生きたいと願う事自体、己に許せなかった。

――だつて……俺は――……

誰かのために消えられるのなら、きっと、それは一番救いのある終わりであり。

――俺は……ヒト殺し、だから――

永く大きなその傷に、『声』は断言する。

「それでいいによる。それがオイラ達による」

たとえその歩みが、滅びに向かうものでも……いつか解ける迷夢を、彼らは探し続ける。

魔界のアスタロト城では、ほどなく大きな波乱が訪れる事となった。

「おー。これはまた、骨のある役者が上手く出揃ったもんだなあ？」

不敵な微笑みと共に、妹を送り終わったと帰投してきた少年……フルーレティの使者でかつアスタロトの養子という、柑子色の髪で青白の目の、これまでとは違った風の少年を、険しい無表情で城主は出迎え。

「貴様………何者だ？」

少年が帰る直前、押しかけるよう訪れていた、飛竜という強大な獣を駆る化け物——灰色の目の男は、城主、少年が揃った謁見の間で、少年を一目見て厳しい顔で問いかけた。

少年はその男——少年の変容をすぐ見切る眼を持つ相手に、やはり不敵に笑う。

「なるほどねえ。アイツが、短刀の主か」

少し前にも、城に強引に留まり地下階層に幽閉された経緯のある灰色の目の男に、城の悪魔達が警戒するのは当然だったが。

男の傍らで、身を隠すように全身を覆ったケープを纏う、しかしゴツゴツとした輪郭を隠せていないやや巨体の者に、城中の悪魔の動揺が走る。

そうした悪魔達を全て下がらせると、その二人に少年は、にこやかに声をかけた。

「——よっ。久しぶりだなあん、オヤジ」
「……………」

灰色の目の男は無言で少年を睨み、傍らのやや巨体は、何故か苦悩するよう頭を抱える。

城主は少年と、灰色の目の男、傍らの者を全て一瞥した後で——

「……来たのね………貴方………」
顔は全く同じでも、あまりに表情や口調が違う少年だけを、無機質に睨み据えた。

城主のあまりの殺気に、謁見の間の空気が凍り付き。その凄まじい気迫に、灰色の目の男と傍らの者が一瞬顔を見合わせる。

少年は至って呑気に、何故か妙に緩過ぎる笑顔を見せる。

「そんなに怖い顔すんなよう？ せつかくの再会なのになあ、みんなさあ」

「………」
「こーなるのはわかってて、それでもオレを戻したのは……お前だろ？」

その声には皮肉より、何処か親愛の情が籠り。城主はただ、そんな少年に冷たい目を向ける。

「………どういう事だ？」
睨み合う両者に、灰色の目の男が踏み寄る。
「ユーオンをどうした、貴様」

ここでは紫雨と名乗る少年の事情を忘れる程、内心の激情を抑えて尋ねる灰色の目の男——本来の少年の養父に、少年は笑った。

首に黒いバンダナを巻き、縦襟と短い袖で、

短い丈の洒落た上着を纏う少年は。場の全責——城主と養父、傍らのやや巨体の者に対し、己が目的の宣言を始める。

「そーだな。先に名乗るとすれば……オレは

『氷雨』。紫雨の代わりの、フルーレテイの使者だと思ってくれればいい」

「な……！」

養父はそこで、ある疑惑が確信に変わったように驚愕の顔で少年を見つめる。

「紫雨の招魂、雲英がアスタロトの養子ってバレたしな？ 今代のアスタロトの監察は、引き続きオレがする。何やら早速……面白い事態になつてゐるみたいだな、この城は」

少年はそこで、全身ケープのやや巨体へと目を向けると、

「まさか、城を乗っ取りにでも来たのかい？ 前代のアスタロトの嫡男さんよ」

その正体をあっさりと、白日に晒していた。

にまにまと相手を見つめる少年に、相手はついに観念したのか、大きなケープを静かに脱ぎ捨てると。

「………嘆かわしい」

二重にこもる不思議な声と、溜め息と共に、中から現れた異形の姿……頭と肩に角らしき構造のある、金属製の絡繰り人形と言ふべき、全身が角ばる謎のやや巨体の悪魔に。少年はたまらず、大笑いを始めた。

「何だソレ、またカッコ良過ぎだろ！ どう探せばこの魔界でそんなキカイ手に入るんだ、アンタ！」

「………オマエのその姿こそ、我は問いたい」「いやまー、それは、オレは氷雨ってコトにしといてくれよ？ この二人以外に、オレの真名、決して口にしちややーよ？」

あまりに気安い会話を交わす、少年と金属悪魔はそれもそのはず。

フルーレテイの系の悪魔の女性が、灰色の

目の男に、探すように依頼した者の一人……アスタロトの血をひきながら家を継がずに、放浪に出た、悪魔の女性の伴侶である者を、見事に灰色の目の男は見つけ出し。こうして連れて来たのが奇怪な金属人形の悪魔で。

それは悪魔の女性の息子の、アスタロトの血をひく蛇の悪魔を宿す少年には、実の父に当たり。

自身はただの使者の『氷雨』だと、正体は一応隠しながら、少年は実父の成れの果ての金属悪魔と城主をまとめて見据えた。

「せっかくの孫とじーちゃんの再会なんだ、もつと嬉しげにしたらどーよ？ アスタロト」

「………」
今の城主は、アスタロトの血をひく者の孫であるとは、当初からの触れ込みであり。

実際にその金属悪魔と血の繋がる城主は、ただ冷厳と少年だけを睨む。

あまりに混沌とした状況を、少年は改めて
内心で整理する。

情報源は城主の傍に侍る大きな鳥であり、
少年が借り受ける躰を、先日まで使った者の
記憶は少年にはわからず。

「アスタロトを名乗れる悪魔が、爺いと孫、
二人ここにいて？ 爺いを連れて来たのは、
孫の間男ときたか」

アスタロトと化した城主を、連れ戻したい
灰色の目の男が、別のアスタロトの適性者、
金属悪魔を連れてきた事態。

元々家を継ぐ事を拒否した金属悪魔自身が、
アスタロトと化すると了承したとは、少年は
思えなかったが、

「んで、どーするん？ 今から覇権抗争でも
おっぴじめるん？」

しかし金属悪魔の妙な義理堅さを知る息子は、
ここに来たという事は、灰色の目の男に何か、
助力するつもりだろうとは踏んでいた。

灰色の目の男は、少年と城主——変容した

少年と、それをひたすら睨む連れ合いという
想定外の事態に、出方を悩んでおり。

金属悪魔はその傍らで、角ばった頭部の、
眼裂と思われる部位に宿る瞳孔らしき光を、
少年へ向けてこもった声で応える。

「…………抗争には及ばん。火療殿と我は——
現アスタロトを攫いに来た」

「——へえ？」

「…………孫を教育するは、祖父が役目」

「…………わりい。全つ然、意味わかんねえや」

けらけらと笑う少年に、男と金属悪魔はそれ
以上は何も語らず。

「だつてよ？ どうする——アスタロト？」

にやりと城主を見た少年の、今度は皮肉が

込められた微笑みに、

「……………」

城主はただ、冷やかな沈黙を続け。

ス——と。

城主が無表情に、無言で細い手を掲げた時、
少年は深刻な事態の到来を悟り。咄嗟に傍に
連れた緋い蛇に何かを指示し、そのまま蛇は
少年の肩から下りると姿を消し。

「——アファイ…………！」

同様に事態に気付いていた灰色の目の男が、
制止のために駆け寄る暇も無く。

城主は額と頬に刻まれた蛇のような紋様を、
額のものだけ青白く——際やかに光らせると。

「…………邪魔なヒトは…………みんな、消えて」

無色の大気が罅割れた。

そうとしか言えない黒い亀裂を謁見の間の
全空間に走らせ。少年が先刻、城の悪魔達を
下がらせていなければ、場の全員を塵一つも
残さず切り裂く力が迸っていた。

「やべーやべー。魔竜ちゃん、ばねえなあ、相変わらずなあ？」

「……………」

空間ごと斬られるような暴虐な力の後で、場に残ったのは少年と城主だけだった。

「やっぱりお前、アスタロト化した『魔』は逆鱗の人格か。魔竜を悪魔にして理性付けるなんて、大した工夫だよ、ホント」

悪魔じみた顔で笑う少年の、首のバンダナの下にも、城主とよく似た青白く光る蛇の如き紋様が浮かび上がっており。

「オレもそうだけど……『力』の人格なんて、『魔』の人格と紙一重だもんか？」

大き過ぎる力を制御し、力の主を守るための心。それは、力の主の望みを叶える『魔』の心と大差ないと、少年は嗤う。

「……………」

城主はまるで、言葉を忘れたように、今も揺らめく大気を纏いながら少年を見据える。

それがただの魔竜であるなら、少年だけをこうして外す『力』の使い方は有り得ず。

激情に吞まれてその力を呼び出しながら、明らかに少年を傷付けまいと、自らの望みで己が暴走と闘う悪魔がそこにあり。

それでも——と、少年は、目の前の悪魔の限界を知識として知っており。

これまでと一転し、厳しい眼光をたたえる。「悪い事は言わない。この少年は諦める」

「……………」

「願えば願う程、お前は『魔』寄りになる。それはコイツの望みじゃない——お前だけの血塗られた妄執だ」

悪魔がそこまで、激情に吞まれている理由。

この時の到来を知らながらも、その運命を変えんと願った『魔』に、少年は冷たい目でまっすぐに対峙する。

悪魔はただ——消え残る理性で言葉を紡ぐ。

「……………ユオン、を……………かえ、して——」

その少年の存在を奪った者は、冷然と答える。

「ならまず、お前が帰って来いよ」

紫雨としての目的は失った少年が、あえてこの城に訪れた目的。

他ならぬ目の前の相手と交わした約束——義理のために、少年に宿る蛇は、形式上では姪にあたる相手を厳しい顔で見貫く。

「オレに『逆鱗』……………龍としてのオレの形を教えてくれる代わり、お前は、自分が魔竜になった時は殺せ。そう言ったよな？」

それは彼らが、ある黄昏の地で話した事柄

……………龍の因子を持つが故に、『竜の墓場』に迷い込んだ蛇の悪魔と。魂を初期化し切れず『魔』となり、その墓場に留まり続けた竜の、遠い日の出会いだった。

突然の魔竜の暴徒化に、直撃を受けかけた灰色の目の男と金属悪魔が、それを予測していた者によって連れ出された事を、緋い蛇を彼らにつかせた少年は知っていた。

「——何なんだ、ここは」

「名称は橘診療所。アスタロト城とうちが、繋がった事に感謝するんだな、飛竜」

謎のドアに引き込まれた彼らは、辛うじて魔竜の力の暴発から無傷で逃れていたが、

そのまま、彼らを引き込んだ者の居室へと通され。少年にその光景を伝える緋い蛇を、肩に乗せる金属悪魔は黙り。灰色の目の男は、そこにいた黒ずくめの男と、後一人の姿に、警戒と当惑の複雑な声を出した。

「アンタは……悪魔の『パール』だろ？」

「悪魔って言うな。俺を悪魔扱いするなら、アスタロトを本気で嫁にもらうぞ」

黒い男はやれやれと、部屋の隅に寝台のある

応接間のような部屋で、客を座らせた長椅子とは九十度の位置の長椅子に、元々座らせていた後一人の隣に気怠そうに座る。

その後一人に、灰色の目の男は改めて声をかけた。

「どうしてここにいるんだ——水火」

「……………」

それは、男が自宅を留守にしている間に、男の養女を守ってもらっているはずの義理の妹……紅い髪と目を持った少女であり。

紅い少女は何故か全く反応せずに、ただ、じっと男と金属悪魔をまとめて見つめ。

少女の隣では、やや長めの黒い髪を適当に首元で括り、黒ずくめの服に白衣姿の部屋の主が、改めて事情を話し出した。

「オマエの養子が行方不明になったからな。オマエの悪魔使いの養女がアスタロトの奴を喚びつけて、行方を尋ねたわけなんだが」

「……………!？」

灰色の目の男が引き取った、養子の妹という、悪魔を召喚する術を知る幼女の能力は、男も知ってはいたものの。

まさか、魔王級の悪魔を召喚出来るはずがないと、驚愕の顔をする男に、

「この紅い鳥を含め、色んな奴の力を借りてそうしたわけだが。アスタロトの城にすら、

養子は戻ってなくてな——その状況を知ったアスタロトが、逆にぶつつん来たらしい」

部屋の主は、隣の紅い少女をちらりと見つめ、手早くそうして状況を伝える。

「こりやマズイつてんで、ある奴がその時に、アスタロトから紅い鳥に遷った。んで旧知の俺の所に押しかけて、協力を依頼したわけだ」

「……………まさか」

灰色の目の男が改めて、紅い少女を見ると

「……そこで少女はくすくすと微笑みを浮かべ。やあ。久しぶり、レイアス君」

男を手こざらせた『妖精』が、そこで笑った。

元々、人形の性である紅い少女は、聖なる羽の残滓を有するために、その『妖精』……実際は天使である誰かの依り代となるのに、丁度良かったのだという。

「わけあって、あたしの正体は言えないし、本当の姿では話も出来ないけど——あたしが誰なのか、レイアス君はわかるよね？」

「……………」
少なくともそれが男の連れ合いの躰を奪っていた者とは、男の眼には明らかだった。

「……………嘆かわしい」
長椅子に座り、ずっと無言だった金属悪魔が、膝に片肘をついて顎を支え、苦悩するように何故かそれだけを口にした姿に。紅い少女は心から楽しげに微笑み。

もしも男の推測通り、紅い少女に宿る者が、男の連れ合い——金属悪魔の孫の、叔母なら。それは、金属悪魔の妻の娘のはずだった。

単刀直入に言うけど。と、紅い少女はすぐ真面目な顔付きに切り替わった。

「テイアリスはもうあたしでも抑えられない。あの子の魔竜をずっと宥めてきたけど、多分あの『魔』は、あの子が知ってしまった——前世のあの子の未練なのよ」

「……………何だって？」
怪訝な顔をする灰色の目の男に、紅い少女は冷たい声色で続ける。

「『魔』の望みは単純だった。大切な子供を助きたい……ユオンとエルフィ、その二人を返してと、それだけを『魔』は望んでいたわ」
「……………」

「きつとテイアリスは、あの子達のお母さんだったんでしょ。でも思いを遂げられずに死んで、その記憶が魂に残ってしまった……それがあの子に宿る『魔』の温床」

それはかつて、銀色の髪の少年と話した時、紅い少女に宿る者が得ていた結論だった。

—君の母さんは、早くに死んだんだ？—

「でもね。テイアリスにはもう一つ、あの子自身の願いがあった。今のあの子が出会った、大切な子供……ラピちゃんを助きたいという、新しい願いが」

「……………」
苦い顔で俯く男に、紅い少女も僅かに苦笑う。
「本当はラピちゃんは、『魔』が見込んだ子……『魔』が助きたい我が子達を助けられる器として、用意されたはずだった」

それが何故、『魔』にわかったのかと言えば、「テイアリスには過去や未来が視える力があって、だからアスタロトの適性もあつたの。ユオン君とエルフィちゃんが、この時代に現れると『魔』は同じ力で知ってた」

おそらくはそれが、全ての発端の呪いであり。「それでもラピちゃんがいる間は、『魔』とあの子の望みは違って、それであの子は『魔』になり切らずに済んでたんじゃないかしら」

それらを全て、『魔』の間近に直接宿つて
確かめた者は、溜息と共に先を続けた。

「でも今は、ユーオン君を助けたい思いが、
その『魔』とあの子を同調させてしまつてる。

エルフィちゃんに会えたおかげで、一時期は
大人しくなつてただけけど……」

「……それで、さっきのアイツを見て、あの
暴発なわけか」

「ええ。あたしは直接見てはないけど、今の
ユーオン君、あの子がそこまで動揺するなら、
かなりマズイ状態なんじゃないかしら」

「……………」

突然行方不明になつたという養子の少年に、
男は強く——苦渋を浮かべる。

そんな男に、紅い少女はでもと話を繋げた。

「遅かれ早かれ、ユーオン君がそうなるのも、

あの子はわかつてたはずよ。それは誰にも、
守り切れる事じゃなかつたんでしょ」

まるでその運命を、選んだのは少年であると
知るかのよう。

男はそこで、苦渋のままの顔を上げた。

「アフィは——俺達と一緒にいる時は、全く
そんな素振りは見せなかつた」

「そうでしょうね。だつてそれは、正確には
テイアリスじゃないもの」

「……………」

男もそれはわかつていたように沈黙する、

「テイアリスは、過去や未来が視えてしまう

力と共に、幼い頃の自身の記憶を封じられた。

そこから動いていたアースフィューユは、その
名の通り、『逆鱗』の内の人格なのよ」

本質と逆鱗。二つの心のために二つの名を

持つ者……男が無意識に『逆鱗』の方の名で

呼んでいた連れ合いは、最初からそうだった
のだと。

「アースフィューユは多分——逆鱗ごと、もう

『魔』に変わってしまったている」

そこで紅い少女も悩ましげな顔をする。

「でも、記憶を封じられた元のテイアリスが
どうなつてるか、あたしもわからなかつた。

貴方もよね——アッシュ？」

「橘灰と呼べ。そんな古い名はお呼びでない」
急に話を向けられた黒い男は、紅い少女に

宿る者に無理やり付き合われているらしく、
やる気のない様子で応える。

「俺にわかるのは、あの少年が今のアイツに
なつたのは、少年自身の意志つて事だけだ」

自身がそれを、少年に宿る蛇の悪魔のために、
半ば導いた真実は口にせず。

ただ、その收拾だけを黒い男は伝えた。

「何とかしたいなら暴走アスタロトを宥めて、

少年を助ける方法、一緒に探してやれ」

「……当たり前だ」

少年自身は、何を希むのか。それを尋ねた

灰色の目の男は——少年の心も、一人で全て

抱え込んだ連れ合いの心もわからないまま、
再びその城に踏み入ると心を決める。

そうした光景を、魔竜と直接対峙しながら、
氷雨を名乗る少年は受け取り続けた。

「……みんな、心配してるぜ、ティアリス」

「……………」

少年は何故か、自ら『逆鱗』と呼んだ相手を、
しかし真名の方で呼びかける。

天井が高く、傷だらけの柱が立ち並んだ、
二人だけの謁見の間で。不思議な程優しげと
なった少年の声に……ずっと揺らめく大気を
纏う、黒い礼装で空のような青い髪の魔竜は、
無造作な長い髪を微かに揺らして俯き。

「……………違う……………」

両手を握り締める魔竜は、かすかであつても
呪詛のような、震えばかりの声を振り絞り。

「わたしは……………」

目前の少年が、誰であるか。遠い日に確かに
会った蛇の龍を、覚えていたその魔竜は、

「私は……………ティアリスじゃ、ない」

相手と出会った地、自身が長く留まり続けた
『竜の墓場』で。留め続けてしまった、古い
自らの願いと真の名――

「私、は……………ミリ、ア……………」

――わたし、自分の名前がないの――

我が子を助けた。叶わないと知っていた
願いと共に、封じられるしかなかった名前を、
そこで口にした。

しかし少年は、にべもなく相手の揺らぎを
斬って捨てる。

「違う。お前はティアリスだよ、ずっと」

最早、少年本来の緩い口調は影形もなく、
「それは『魔』だ。もうその名前の主ですら
ない、変わってしまった何かなんだよ」

――……………あれは、母さんと同じだけど。でも、
もう母さんじゃないんだ――

今の少年に躰を譲る前に、銀色の髪の少年が
気が付いていた事を、最初から知っていたと
……少年は魔竜を真っ向から無機質に見た。

『魔』を殺せ。オレにそう言ったお前が、

本当のティアリスで――アースフィーユだ」

そして少年は、懐からその切り札――

自らの母の秘蔵で、少年も同じ力を使える
小銃を取り出して構える。

「そうでなきゃ、今までのお前が嘘になる。

『魔』の方が本質なんて、お前もゴメンだろ？」

「……………」

自身にその銃を向けた少年に、魔竜はまるで
放心したように顔を上げ。

やがて……………とても安堵したような、今にも
泣き出しそうな微笑みを見せた。

その魔竜に少年は、唯一つの救いとして。
魔竜の望み通り、迷いなく引き金を引き……………。

その魔竜の望みは、それすらも。

『神』の素因も持った少年に殺される事で、
竜としての己を少年へと渡し……少年の内の、
竜の因子を持つ者の命となることであつた。
その妹が、同じく竜の命で世に留まるように。
だから魔竜は、それを知れば止めるだろう
連れ合いと、距離を置く事しか出来ず。

「……世話の焼ける奴らだなあん、本当に」
本気で魔竜を撃ち抜く気で、少年は小銃の
引き金をひいたが。それはどうやら、少年に
軀を渡した者には許せない行動だったらしく。
寸での所で照準をずらされ、魔竜の周囲に
こもった、大気の熱だけが奪われて凍結する。
「ここまでしなきゃ、オマエは反発しないん？
ユオン君」
凍りついた空気の中で、暴徒と化していた
城主は気を失って倒れており。
それを抱き起こしながら、少年はぼやく。

「テイアリスの望み、オレは叶えたいけどな。

そうすればオマエは多分、生粋の竜として、
独立して生きていけるはずだし」

そうなればこの軀も晴れて、全て自分のもの
なのにと、本気で残念そうにする少年は。

自らの逆鱗に取り込まれつつあつた者が、
自己を取り戻したらしい事に苦笑した。

「誰かを守ろうとはするのに、守られる事は
拒むのか。そんな、自分を追い詰める方向で
やつと自分に戻るつて、どーなんよオマエ」

その相手が自己を取り戻せた理由が、己の
救いを否定する矛盾にある事には、さすがの
悪魔の少年も嗤うしかなく。

「オマエには、オマエの周囲がオマエの事を
大切に思う心は……オマエ自身の自己愛扱い
なのかねえ」

座り込んで城主を抱え、様子を確認しながら、
内なる誰かへ少年は溜め息をついて続ける。

その、己と周囲の区別が曖昧な者へと。

「だから、それはオマエには重要じゃなくて。

あくまでオマエ以外を助ける方向じゃなきゃ
オマエは出て来ない。テイアリスのやり方も
大概だけだなあ……我が子を思う心としては、
そつちはまだ、理解出来るけどな」

それが逆鱗に取り込まれる事は避けられたが、
しかし全く浮上してこない者に、やれやれと
少年は肩を竦めた。

「まー……そーいうバカ、嫌いじゃないぜ？」

魔竜たる悪魔の時を凍らせた、同じ怠惰な
悪魔の適性を持つ少年は。

内なる誰かの凍った心をそのまま受け入れ。
そこで少年は、この城に再び、灰色の目の
男達が踏み入ってきた気配に気が付いた。

「んじゃ……後は、任せるとすつかね？」
名残惜しそうに、城主を静かに床に降ろすと。

そのまま一人、姿を消した少年だった。

心から意地悪く笑った少年に、幼女は痛く
不服気に眉を顰めた。

そうして面倒事は全て、父の世代に任せて。

魔界の城を後にし、気ままに宝界へと戻った

少年を――

その瑠璃色の髪の幼女は、険しい顔付きで、

紅い少女と共に待ち受けていた。

「……兄さんから、出ていって。蛇のヒト」

少年がいる場所をどう見つけ出したのか、

紅い少女に頼んで連れて来てもらったらしい、

灰色の猫のぬいぐるみを抱える瑠璃色の髪の

幼女が睨み付ける前で。

何処ぞの近代的な建物の屋上の柵に座り、

暗い夜景に浮かぶ町々の灯りを背に、少年は

にやりと不敵に微笑みを返し。

「そう言われても――当の兄さんにその気、
ないみたいだけどなあ？」

心から意地悪く笑った少年に、幼女は痛く

不服気に眉を顰めた。

「わたし……アナタのこと、嫌い」

「そっか。そりゃ、残念だなあ」

紅い少女はにこにこ、黙って見守る横で。

幼女は柵上の少年を見上げ、その首元の黒い
バンダナを見て更に顔を険しくする。

「……それがあれば、兄さん、大丈夫なのに」

「――お？」

「兄さんの大切なヒトと、わたしが好きな、

兄さん達がそこにいるのに。兄さん達なら、

きつと……兄さんを助けてくれるのに」

それはおそらく、黒い男と、瑠璃色の髪の

幼女だけが気が付いていた、少年と関わった

ある者達の残滓に関わる真実であり。

省エネ型の金色の髪の少年が、バンダナを

着けていた時に確かに状態を持ち直させた、

そのままの少年に『力』になり得る何かが、

そこにはあった。

なるほどねと、少年はその黒いバンダナの

謎……様々な呪いや『力』を抱えた媒介を、

改めて下目に見つめ。

「そりゃま……コレはさすがに、不秩序で

反則業っぽいしなあ？」

秩序の守り手という黒い少女が、その媒介を
取り上げる役目を負う事も知っている少年は、

少しだけ困ったように微笑む。

「そもそも、兄さんが望んでない事、無理に

させても仕方ないか？」

「…………」

そして問題をそこに戻す少年に、幼女は再び、

酷く不服気となり。

その後は何も言わなかった幼女達を置いて、

少年は夜の町明りの中へと消えていき。

「兄さんの――バカ」

柵越しに町の灯を見下ろしながら、幼女は

それだけ、噛み締めるように呟いていた。

色んな相手から、バカバカと言われるその少年は。表向きの少年……龍神でもある蛇の悪魔が好きに動く現状を、早くも受け入れてしまっていた。

しかし蛇は逆に不服そうに、名も知らない都会に流れる川の木造の橋に腰かけながら、独り言のように少年に話しかける。

「なー。オマエは本つ当に、これでいいん？オマエさえ望むなら、色々抜け道はある気がするけどなあ？」

夜の川は町の灯を所々反射しているものの、表通りから離れた川辺に他にひと気はなく、暗い川面に少年の影が僅かにだけ映る。

「オマエが独立してくれた方が、オレは凄く助かるんだけどなー？ さすがにオレもさ、別のオトコがいるのに、アヤに手出す気にはなれないんよね」

その後しばらく沈黙が訪れたのは、そこまで責任持てない。そんな反応があったようだ。

それなら少年の腕に今もかかった、少年の依り代である、羽飾り付きの鍵——携帯型の剣を捨てればいいと、内なる竜の少年は蛇に答えたようだが、

「んなこと、隣の悪魔がさせるわけねーし。ヒドイ呪いだぜ？ シャワー浴びる時すら、この鍵外せないんだからなあ」

この蛇からは度々、こうして謎の単語が口に出され、蛇は少年が思いもなかった様々な場所へ、少年を連れて飛び回っていた。

一度死した後、『竜の墓場』という神域で逆鱗を手に入れ、龍神と化した蛇の気配は、生前とは変容しているらしく。

だからこれまで、黒い少女に気付かれずに潜む事が出来たという蛇は、そのまま当面は少女に見つからずに活動したいという。

「オレもオマエ以外の器を探すけど、簡単に見つかるとも思えねーし。無ければばばと、容赦なくこのまままでいくからなあ？」

わざわざそれを、こうして尋ねる蛇のヒトの好さは、少年が初めから感じ取っていたものでもあった。

「シグレが復活したいか、または成仏するか。身の振り方を決めねー限りは、オレも放浪の旅かなあ」

金色と銀色の髪の少年をまとめてシグレと蛇は呼び、軽口を叩くように少年の心持ちを尋ねはするものの。少年に何か指示する事はなく、ただ少年の答えを待つと、当たり前を受け入れており。

「まー……どーせ、時間はあるしな？」

悪魔であり神である蛇に、寿命など時間の観念はないにも等しく。

何の道も選べず、時間を止め続ける少年に付き合おうと、少年が宿った躰を完全に奪いも諦めもしない蛇の緩さは。きっと、遠い日の約束のままの永い縁だった。

—どうせオイラは死なないし、特別する事もないによる—

ソレは今も、迷子の少年に囁き続ける。

—でもオイラは、オマエがそれを決めるまで、

ここににいるによる—

結論を出せば、己を断罪するだけの少年は。

何も決めず迷い続けること、そのものが、

少年を生かし続ける拙い方途だった。

少年が今後、再起の叫びをあげるとすれば、

紅い同胞と剣を取る時と知ってか知らずか。

「ここから何を希むのかは、シグレが決める

しかない。たとえそれが——ヒト殺しでもな」

そうした赤まみれの望みだけを持つ、少年を

救う事は出来ない現実も告げるソレに。

「……………ありがとう」

やっとな少年は、それを声に出来たのだった。

少年のこれからを希む全てに——

もう——と。その二つの人影は突然、昏い

所に留まり続ける少年の前に降り立っていた。

「ホントに良かったなあ。エルフィちゃんが

その記憶、『忘失』させてくれてて」

ある夢のような現に迷い込んだ時、少年から

失われていた、束の間の邂逅の記憶。

別の場所に保存された事で、少年の不調で

消える末路を免れた温かな記憶を、狐の耳を

生やす白い少女が微笑みながら届ける。

「でも、私が見つけなきゃどうなってた事か。

これ以上鶴ちゃんに心配かけたら、さすがの

私も怒るからね？」

白い少女の後ろ、温かな赤がちらりと見える

誰かは。大切な約束だけを、そっと伝えた。

「待ってるから……………狐魄と一緒に」

少年はその誰かに、困ったように笑うと、

「……………誰にも、会う気はなかったけど」

自身の意志と矛盾する、拙い希みを口にした。

「でも……………あんたに会いたかった」

不服げな誰かへ、少年の答え探しが始まる。